
ネトオク男の楽しい異世界貿易紀行

medici

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネトオク男の楽しい異世界貿易紀行

【NZコード】

N3102Y

【作者名】

medici

【あらすじ】

最終学歴高卒で親元バラサイトの青年綾馳次郎はネットオークションで生活する物欲溢れるネオニート（収入があるニート）。出品するお宝探して蔵から見つけた古い鏡は異世界と行き来できる魔法の鏡だつた！！ 異世界のお宝を買うために相互貿易でお金を貯めて、物欲満たして幸せ一杯の異世界ライフ！ になる予定。物欲だけじゃなく、チートとか奴隸とかもありマス。男の欲望とか多めなので苦手な方はスルーしてね。

第1話　うぶだこ//トーハ異世界の香り（前書き）

初作品、初投稿です。お見苦じご点ばかりですが、よろしくお願いします。

第1話　「ふだん//」は異世界の香り

「国境の長トンネルを抜けると、そこは雪国であった」

有名な小説の冒頭の文が頭のなかで反芻している。

俺、綾馳次郎^{アヤセジロウ}の場合はもっと劇的に「蔵の古い鏡を抜けると、そこは真っ暗な部屋であった」となるだらうか。

…………よし。意味わからねえ…………。

その真っ暗な部屋にも鏡があつて、もともといた蔵と繋がつているようだつた。鏡面が妖しく蔵の中を映している。

焦つて鏡の中に飛び込んでみれば、問題なく行き来できることが確認して安堵の息が洩れた。

蔵に来るときに持つてきいた懐中電灯で部屋を照らす。石作りのカビ臭い部屋の内部が浮かび上がるが、鏡以外にあるのは木製の箱だけだ。

それ以外にはなんにもない。

だいたい8畳間くらいの部屋だろうか。窓もなんにもないので、外の様子は全くわからない。何の音も聞こえてこないから、地下室

かなにかかもしないな。あとは出入口の木製の頑丈そうな扉がひとつ。ここから外に出られるんだろう。

とりあえず、唯一置かれている木製の箱を開けてみることにした。
昔熱中したRPGの宝箱みたいな箱だ。

……おおつと！ どくばり！ は勘弁してくれよ 、と、

思いながら開けると、当然ワナなどはなく問題なく開いた。

中身は服一式だった。

中世風というかなんというか、シェイクスピア劇で使う扮装のようないい服だ。縫製でフリフリの付いた長袖シャツ、金糸の刺繡が施されたいかにもな時代めいたベスト、太めのズボンとベルト、他にはなにも入っていなかった。

まさに装備一式。本当に宝箱だったのかな……。

服はいったん箱に戻し、これからどうするか考える。扉から外に出てもいいが……。

そして、少し悩んだがひとまずは鏡の世界から脱出して、蔵に戻ることにした。

蔵に戻り、さきほどの部屋と同じようにカビ臭を感じながら、気持ちを落ち着かせて考えてみる。ありえないことが起きているというのはわかる。古い蔵で見つけた鏡が別世界へ通じてました！ なんて、ファンタジーではお約束な設定だけれども、実際に起こると存外に困るもんだな。さて、どうすつかなあ。

……まあ、ひとつ言えることは、この鏡はすごい高値で売れる！
ということやで……。

俺は高校を卒業してからの就職で失敗して、それからは2年近くニートを続けている。就職で失敗したと言つても、就職ができなかつたわけではない。最悪最低のブラック企業に入つてしまい、精神的にも肉体的にも疲れ果ててしまい退職した、というだけの話だ。

退職してからは、どうしても仕事をする気になれず「ラブラブ」口口にしてたんだが、いつまでもなにもせずにいられるわけもないわけで、偶然本屋で見かけた「儲かる副業！ネットオークションで月収30万円！」という本を買い、その本の通りに、古本やら古道具やらをネットオークションで売りそばいてみたら、ことのほか儲かってしまって……、それからは、まあ、それで生活している。

幸い、近所で毎週フリーマーケットが開催されているし、地元の大きい神社での骨董市なんかでもそれなりに良い物が買えるため、オークションで思つた以上の収益を上げることができた。

途中からは自分も面白くなってしまつて、半分くらい趣味と実益を兼ねていると言つても過言ではないけどな。

最初のころはなにが高いのかよくわからなくて、赤字とまではいかなかつたが「儲かる」というほどではなかつた。しかし今ではすいぶん慣れてきて、微妙に貯金すらできているほどだ。

もともと物好きアイテム好きではあつたが、これはなかなか才能があるなど、自分でうぬぼれちゃうね。

鏡を見つけたのは、以前からアプローチをかけていた近所の旧家の蔵の中だった。桐の簾^{タレス}の裏に隠されてるようにして置かれていて、枠はマホガニーかウォルナット。重厚な意匠が凝らされ、年式も古そつだつたし「これは存外良わそつなものを見つけたぞ、問題はなんて言いぐるめて買い叩くがだなー」などと皮算用していたのだが……。

考え事をしながら暗い蔵の中をウロウロしていたからか、足元に雑に積まれていた古道具類に足を取られて、鏡のほうに倒れこんでしまい、そのまま鏡の中に吸い込まれた。そして、畳頭にもどる。……とこつわけだ。ザツと血つと、そんな感じ。

蔵の中にはまだ金になりそうなものがあつたが（古い皿や火鉢なんかの道具類とか、その道具をしまう行李も売れるし、昔のオモチャなんかも売れる。だいたい古いってだけである程度高く売れちゃうので、蔵はまさに宝の山なのよ）、今はまずは鏡だ。蔵から出て、家主さんに、蔵の中にあつた鏡だけ買い取りたいと交渉を始めたことにした。

「あ、すんまセーン。蔵のなか見ゆかれてもらつた者ですナゾおー」

居間で茶を飲んでいる家主（80歳くらい）のおばあちゃん。経験から言つて老婆はチヨロイ）に顔をかける。

「蔵の中になつたもので、とりあえず大きい姿見だけ今回譲つて欲しいんですよ。ちょっとサイズ大きいもんで、他のもの運べないもんでね、鏡だけ。で、金額なんんですけど、4000円で買い取らしていただきたいんですよ。よろしいですか？」

一気に喋る。もつ400円は出しておく。取引は有無を言わさずスピードに行うのが肝心だ。「心変わりしだす前に撤収しなければ……」と思つてゐる。

「あー、あんなにあるもんはもう全部いらんもんじゃけ、なんでも持つてえよ。金もいらん」

と老婆。やつたー！ 超ラッシュ！ だが、実はこれはよくあるパターン。蔵を開かせるといふまでいけば、もうほとんどの中身はもられたも同然だつたりするのだ。

蔵の持ち主つてのは大抵は蔵のことを「古いガラクタが詰まつてる片付けの面倒な倉庫」程度にしか認識していない。自前の倉庫を知らないやつに漁らせるのは嫌だけど、かといって中身を大事にしているわけでもない、というわけだ。俺みたいな貧乏人からすると宝の山なんだけどねー。金持つてのはそういう性分だから金持ちなのかもしれないな。

そんなわけで、無事鏡をゲットして、割らないよう車に積み込んで家まで運んだ。

俺は、一人暮らしをしていない。

両親と同居してゐる。もつと前にパラサイトと並つてもいいかもしれない。

就職してないから……、と言い訳して、ちょっとばかりの食費を払つているだけである。兄弟は兄貴と姉貴がいて、どっちももう家を出でる。

俺は末っ子で甘やかされて育つたから、パラサイトでも仕方がないんだ！ でも就職したら家から出ます！ 就職したら必ず出ますぞ！

第2話

異世界屋敷はヨーロッパの香り（前書き）

第2話 異世界屋敷はヨーロッパの香り

行くべきか行かぬべきか、それが問題だ。

鏡を前にして俺は唸っていた。この鏡が別のどこかへ通じているとしても、別に無理して行かなくてもいいのだ。必ず帰つてこられる保証もないし、うつかりどっちかの鏡が割れたらおそらくはそれでジ・エンド。どちらにも行き来できなくなろううだうしな。

向こうに行けないのはともかく、帰つてこれなくなるとかマジ勘弁。

……かといって、なにもせずにこの鏡を売ると言つてもな……。
最低でもどこへ繋がっているのか程度は調べないと、売りようがない。「超レア！どこかへ繋がっている魔法の鏡！特価1億円」では誰も買わないだろう。というか本気にされない。どうみてもネタ出品だものね。

なのでとにかく、鏡の世界を探索することにした。

鏡が繋がっているのは謎の石の部屋。その木製の扉を開いた先がどうなつているか全くの未知数なので、考えられる範囲で準備しなければならないが、とりあえずはすぐ戻れる範囲だけ調べてみようと思う。

玄関から編み上げブーツを持ってきて履き、懐中電灯で照らしながら

がら鏡の世界へ入る。ヌルッとした触感もなく、世界を移動する。本当に奇妙だが、今はとにかく探検だ。この鏡自体のことはおそれぐどれほど調べてもわかるまい。

木の扉に門が掛かっていたので外し、少しだけ扉を開いて向こう側を伺う。

石の部屋は地下室だったのだろうか、扉の向こうは同じような石作りの昇り階段で、階段が途切れた先から淡く光が洩れている。正直すでに心臓バクバクなんだが、とにかく進むしかない。正直、かなりビビッてます。

おつかなびつくり階段を上った先は、西洋風の屋敷の廃屋の一室だった。窓から指す日の光が、淡く部屋内を照らしている。

広さとしては3LDKといったところだろうか。現代的な西洋屋敷という風情よりは、もう少し雑な石作りの屋敷で、残されたオーケ材の重厚なテーブルや、マホガニー製の食器棚が、かつての住人の生活を偲んでいる。

イギリスかフランスあたりへと繋がっていたのだろうか……？

と考えながらも、残されている道具を物色する。食器棚やテーブルなどの家具は残されているが、小物類はこれといつてなにも見つかなかつた。前住人は大物だけ残して引っ越したのだろうか、上手くすればオクで売れるものが見つかると思つたんだが……。

まあ、食器棚やテーブルもかなり良い物なので、売れば相当良い金になるだろう。勝手に持つて帰つて売つていいのかどうかは知らんが。

どうやら外国と繋がっていることが判明したので、外に出てみる

ことにする。恥ずかしながら、少しだけファンタジー的な異世界と繋がっているんじゃないかという懸念があつたのだ。

鏡の世界つてだけで十分にファンタジーだしな。

家の外も完全に荒れ果て、雑草というレベルでは片付けられないレベルの有様である。つか、木だよこれ。林の中には家があるって感じに近い。日本家屋だったたらとっくに倒壊してるだろう。

そうでなくとも家はもともと林の中にポツカリと開いた場所にあつたみたいで、回りは全部、背の高い広葉樹の林。それでもなんとか、もともと道だつたらしきところを発見し、しばらく歩いて行くと草原に出た。人影は全くない。田舎つていうか、手付かずの土地つて感じ。

されどもめげずにしばらく歩いていると、小さい村を発見した。

鏡のある屋敷と比べると質素な石作りの家が十数件ある。俺は林の中から身を隠して発見した第一村人の農夫を観察してみることにした。

農夫は西洋系のおっさんといったところ。やはり外国……、つまり地球のどこかではあるらしいが、ここで俺が出て行つても身分証明もなけりや、言葉も通じないわけで実際どうじょつもない。なので、さて、どうするか……。

そのまま隠れて観察を続けていると、畑の反対側から農夫の嫁といつた風情の女が来て叫んだ。

「あんたー、お昼持つて来ただよーー。」

それに気付いて作業を中断し、返事をしながら女のほうへ向かう男。

……うむ。完全に日本語だったな。

厳密には、日本語として「理解した」という感じだ。耳に入ってきたときはまったく別の聞きおぼえのない言語だったはずだ。だがなんていうか、脳内で一瞬で日本語として変換された。

これなんて翻訳こじんこやく？

ひとまず、いつたん屋敷へ帰ることにした。

今回の自動翻訳でまた一気にファンタジー度が増した。うつかり「やあ、日本から観光に来た者です、H A H A H A！」なんて声を掛けたらいきなりオマワリさんを呼ばれて拘束！となる可能性も排除できないからな。現代の地球の西洋の国なら、そんなことはないだろしつけども、最悪の可能性も考えておかないといかん。

屋敷に帰った俺は、なにかこの世界に関する情報がないか今一度

家探ししてみることにした。まだ見てない部屋もあるとはいえ、リビング？ にテーブルと花台くらいしかないとこらを見るとあまり期待はできそうもないが……。

最初に書籍を探したが、やはり一冊も見つけられなかつた。文字を見れば一目瞭然だつただがな。

他の部屋にも家具がいくつか残されていた、タンスやベッド、チエアにデスク、チェストにブックビューロー。どれも良い品だ。まとめて売れば100万円は下らないだろう。もう、これらを売つちやつて、それでこの鏡のことはおしまいにしてしまつてもいいのかも……、と思つてしまつ程度には美味しいです。

しかし、肝心の決定打になる情報が見つからない。

この家にあるのは、地下室の箱の中になつた例のシェイクスピア服と、英國アンティークみたいな趣の家具類だけである。まあ、これらだけとっても現代世界とは思えないわけだが、アンティーク趣味の人人が住んでた家と言われてしまえばそこまであるからして。

あとは裏口と屋根裏ぐらいしか見るところが残つていない。正直、屋根裏はただでさえホコリっぽいのに勘弁してほしいので、裏口を開けてなにか探してみる。

と、そこに蜘蛛がいた。

厳密には裏口の壁のところに蜘蛛が巣を張つてたのだが、この蜘蛛、胴体だけで10センチほどもある。そして脚が12本あり、脚も入れた全長は25cmくらいだろうか。巣の真ん中で大人しく佇んでいるだけだが、……これはでかい。

蜘蛛が苦手な人が見たら気絶してもおかしくないレベルだわ。

携帯のカメラでおつかなびつくり写真に収めて、鏡の部屋から自分の部屋へ戻る。

携帯の蜘蛛の画像を元に巨大な蜘蛛についてネット検索する。ググるちよび同じサイズのものでルブロンオオツチクモというのが出るが、これではない。そもそもツチグモじゃないしな。ジョロウグモの類のようだし。そもそも脚が12本ある時点で蜘蛛ですらないし。

落ち着くために台所でコーヒーを入れて持ってきて、一息入れた。インターネットでの情報が絶対だと言うつもりはないが、これでひとつ可能性が消えたと見て間違いないだろう。

とりあえず「現代の地球のどこか」ではない。過去の地球か、異世界かの一択になったわけだ。

今、ググっても見つけられないクモは、単純に絶滅しただけかもしれないからな。とはいって、自動翻訳の件もあるし、異世界の可能性のほうが高いと言わざるを得ないだろうな。これからは、異世界にいるものとして行動したほうが良さそうだ。

つまり、モンスターが出るかもしれない。とか、魔法で撃たれるかもしれない。とか、異端審問に掛けられて火あぶりなるかもしれない。とかだ。

気楽な気持ちでつづっていたらヤバイと思つとかないと……。

第2話 異世界屋敷はヨーロッパの香り（後書き）

オーク材とかマホガニー材とかは、主人公がそう思っているだけで、
厳密にはきっと違う木です。よく似てるだけで。

第3話 異世界衣装はコスプレの香り

親ゆずりの臆病者で子供のころから損ばかりしている。

そんなわけで、もう少しだけ向こうの世界の情報を得たら鏡は売却することにした。単純に異世界とか怖いし、過去の世界だとしたら、それはそれで怖い。ハッキリ言つて俺の手に余る。

厳密には売却する前に「異世界へ渡航できる権利」を100万円くらいでネットで若者を募つて売ろうかと考えている。行けなかつたらお金は頂かないという風にすればいいしな。

300人も向こうに送れば3億円ですよ。ウツハウハ。

その後で、ノウハウを売るという触れ込みで鏡ごと売却してしまえば、異世界とも後腐れなくサヨナラできるし、お金もたくさんゲットできて一石二鳥だわ。7億円とかで売れば、合計で10億円！遊んで暮らせる！！

……とはいって、現段階では完全に絵に描いたモチ。もっと情報を得て、それなりに上手くやらなきゃなー。

で、まあ、結局はもう少し鏡の世界の情報が必要なのだ。なのでいつたん鏡の世界へ入り、例のシェイクスピア服を持ってくることにした。あ、向こうのものって「いつに持ち込めるのかな、そういうえば。

……普通にこいつの世界に持ち込みました。

ひょっとすると持ち込めない可能性も考えてたけど、まあこれで、屋敷の家具はこっちでオクに掛けられる。ちょっとした軍資金にはなりそうだ。

屋敷の服は何年も宝箱の肥やしだつたとは思えないほど、しつかりしており、サイズも多少小さい程度で問題なく着れた。

しかし……、これは恥ずかしい。ヒラヒラとした飾りの付いたシリクのシャツつてだけで、なんとも言えない気分だが、さらに刺繡入りのベスト。これもちょっと光沢のある生地だし、パンツもかすかに光沢がある。なんで全体的に光沢多めなんだろう。

だいぶコスプレっぽくて恥ずかしいが、あの世界に溶け込むには必要な処置だと自分を納得させる（農夫もこんな格好だったような気がするしな）。まあ、自前の服だと、ジャージとかトレーナーとか、そんなもんしかないし、それよりは自然だ（？）と思つてこじてた。

バッグに必要な道具、というか、もしもの時の自衛の為の武器（自作のナイフを数本）を入れ、編み上げブーツを履いて鏡の中へ入る。

屋敷の外にでて、ふと氣付く。そういうえば時間のことなんにも考えてなかつた。

日本時間は10時をちょっと回つたところだが、こっちも同じ時間とは限らないのだった。全く知らないところで日が暮れるたりしたら、それこそ死の危険がある。

日の高さを確かめようとして、眼に入ったものに愕然とする。

ああー…………「この世界の情報」こんなところにありましたよ。なんで気が付かなかつたんだろ。

昼間なのに月が一つでござました。

太陽はちょうど頭上の位置。昼の長さがどうなのかはわからないが、とりあえずすぐに日が暮れる心配はなさそうだ。ここが異世界なのはもう確実と言つていい。

地球上月が一つあった歴史はないはずだからな。

屋敷の前の林を抜け草原に出る。前に来たときと違い、全くの異世界だと思うと、林の木々もなんだか見たことがない種類のものが多く混じっているように見えてくる（実際全部異世界種？なわけだけど）。

そういうえばガラパゴス島では、観光客が他の地域の種を持ち込まないように、靴底を洗つてから上陸させたり、遊歩道以外は歩かせないなどの管理を徹底しているらしい。

全然氣にしてなかつたけど、異世界を行き来するなら、そのへん
もある程度は氣を配らないと思わぬ事態にならないとも限らないな。
こつちの虫を一匹持ち込んだばかりに、向ひつの虫が何種類も絶
滅したりとか絶対にないとは言い切れないし。

そんなことをツラツラ考えながら歩いていると。

ガサツ ガサツ

50㍍くらい向ひつの茂みから音がして、すわモンスターかと身
構えたところ。

不精ヒゲのワイルド系獵師が出てきた。
殺したばかりと思しきイノシシ的な生き物を引きずつて。

第3話 異世界衣装は「ヌスペ」の香り（後書き）

超短くてすみません。

第4話 異世界はRPGの香り

「エーハル、エーハル、エーハル、エーハル」

まあこ、まつたく心の準備ができていなかつた。「どうも」に
ちば 「おおいたのに死ぬほど」^{じもつた} 吃つた。

「どうした? 何などいろいろなにしてる?」

「どうぞ」

やつと普通にこじこじめできた。

獵師は見た目三十歳後半といった感じの、ブラウンの髪と無精ヒ
ゲがワイルドなナイスミードル。

「」を肩に掛け、腰には大振りなマチハット。マタギよろしく毛皮
の服を着て、こちらを見つめる両手は力強すぎでちょっと怖い。
質問に挨拶で返してしまつたが、仕方がない、なんとかファース
トコンタクトを成功させねば……! とにかく言葉を紡いだ。

「えへ、あつと、それがですね、なんというか、自分もどうして自
分がここにいるのかわからなくてですね。なんというか……、気付
いたらあっちの森の中にいたっていうか……、自分の過去が思い出
せないっていうか……、ハツキリ言つと記憶喪失っていうか……」

記憶喪失設定でいくことにじめてみた。

まあ、これは最初から決めてたことだが、他に思いつかなかつた

からな。しかし、獵師のポカンとした表情を見ると、どうも失敗したかな？ といつもしてくるけど仕方がない。押し通すしかないぜ。

「記憶喪失か……。見たとこかなり若いみたいだが……。おい、名前くらいは覚えているのか？」

「…………名前と歳は覚えています。ジロー・アヤセ。21歳です」

やう答えると、アゴに手をやつてなにやら思索していたようだが、彼の中でなにかを把握したらしく、ウムと頷いて言った。

「やうか。なぜ記憶を失ったのかはわからんが、……おそらく内陸からの脱出組だろ？ ベストの刺繡もドレスシャツもこの辺りには無い物だ。……憲兵から逃げてきたにしては、身奇麗過ぎるが……」

「…………えっと、憲兵に追われる要素があるんですか？」

聞き捨てならない単語を聞いて焦る。「え？ ガチで憲兵とか存在してたんですか……？ のん気に村で「ににやにやちわ」してたら、ガチでタイ一ホの可能性もあつたつてこと？

「ああ、内陸からの脱出者は憲兵に捕らえられ本国送還になるか、依願して労働奴隸になるかのどちらかになる。まあ、だいたいの脱出者はこっちに協力者を持つていて上手く溶け込んでいるようだがな。……お前みたいに脱出者丸出しの格好してるやつは稀だよ。ちなみに、脱出者を憲兵に引き渡すと報奨金として銀貨3枚が貰える」

そう言ってニヤリと笑う獵師。ちなみにもじやないよ、ち

なみにじや。

良かれと思つて着た異世界服で、マジで奴隸になる5秒前とか洒落になんねーーー！こんなことなら大人しく自前の服着てればよかつたんや……。このガチムチ獵師が俺を憲兵に引き渡したら、異世界で楽しい奴隸生活がはじまつんや……。

俺はよほど絶望的な顔をしていたらしい。獵師はそんな俺を見て嬉しそうにワツハツハと豪快に笑い、手を振りながら言つた。

「悪い悪い。冗談だ。いや、銀貨3枚の話は本当だが、別にお前を憲兵に渡したりはせんよ。ソレでの出合いもル・バラカのお導きだる」

「…………ありがとうございます。…………いやあ、心臓に悪いですよ…………」

「さて、俺はマイシをわざと解体せにゃならんから家へ帰る。どうする？ 来るなり運ぶのを手伝え」

と言つて、イノシシを引きずつて村とは反対方向へ歩き出す獵師。どうあるかというあるも、今のところは獵師を頼る他になさううので、イノシシを運ぶのを手伝はしかなかつた。

獵師の家は、村からは大体1kmほど離れてた小高い丘の上につた。村にあつた石の家とだいたい同じような家で、周りには小さい畑があり質素ながらも、なんていうか、幸せの気配がする、そんな家だ。

俺はイノシシと一緒に運びながら、「このガチムチ獵師がアツチの趣味の方だつたら、どう考へてもオッスオッス」などと考へていたが、素朴な生活の気配のする家が見え、そこに獵師の奥さんと思しき女性がいるのを見て、ひとまず安心した。ノンケだコレ。

奥さんと思しき女性は、2人暮らしのようだし、やはり奥さんだつたようだ。獵師よりだいぶ年下と思われる肉感的な赤毛美人で、獵師ほどではないけど、背が高く、なんとも肉弾戦な夫婦である。

獵師がイノシシを解体している間、奥さんがこの世界のことをいろいろと教えてくれた。

まず、「内陸からの脱出組」とやらが、見つかるとアレな理由なんだけだ。

今いるここは、ハノーア帝国領の第2自由都市エリシエの街の近郊にある場所らしい。自由都市は帝国の都市でも特別なもので、エリシエのほかに2箇所だけ定められ、その都市でだけ他国との貿易が許されているんだそうだ。それ故、他の帝国都市と比べて活気があり、また物資も豊富なため、制限を掛けないといくらでも他の

帝国都市から人が押し寄せてきてしまつ。それで、例の本国帰還が奴隸化かつて話になるわけで、実際マジで俺もヤバいところだつたわけだ。獵師もまだ。

獵師は名前をショロー・ロートといい、この辺りで獵をしながら、モンスターが森から出でてくるのを監視したり退治したりする仕事をしているそうだ。

獵師になる前は傭兵として、それなりにブイブイ言わせてたそうで、奥さんことレベッカさんも同じ傭兵团出身となればまさに異世界クオリティ。奥さん身長180cmくらいあるんだよ……。獵師にいたつては190近いし……。

モンスターは基本的にはこの辺りにはいないんだそうだ。ただそれでも自然発生的に”湧いてしまう”ことがあるらしく、その場合、人のいる場所へ真っ直ぐ向かつてくるため、村と森との直線状にあるこの場所で監視するのが最も適している。……という説明だったんだけど、なんともわかりづらい。湧いてしまうって？

「モンスターってのは、血肉を持った生物じゃないからねー。森みたいに魔素が溜まりやすい場所では、ときどき湧くんだよ。それで、一直線に強い魔力を持つ人間を襲いにやつてくる。それを私たちがやつつけてるってわけだ。ま、このへんでは大した奴は湧かないし、心配はいらぬよ」

「あ、いえ、心配、というわけではないんですけどね。しかし、それではモンスターは通常はどんな場所に『湧く』んですか？」

「普通はダンジョンに湧くわね。あとは竜が住んでいるような場所も魔素が濃くてモンスターが湧きやすいかな。ま、ダンジョンは出入り口に結界を施してるから、中からモンスターが出てくることは

ないし、竜がいるような場所も人里から離れた場所だからね。一般人がモンスターを目にする機会は少なくなるわ」

ダンジョンktr。

なんとも正統派なRPGワールドである。モンスターの定義は予想の斜め上だつたけど、それほど出ないみたいだし、そこらで襲われることはなさそうだ。

と、思つていたら、魔獸やら亜人族やらの『野生動物』が、人里から離れたところにはいるので十分危険だそうで……。特に亜人族は人間を痛めつけて連れ帰つてアレしちゃうようなナニなんで、いやー貞操の危機の多い異世界で参っちゃいますね！

イノシシ解体中のショローさんが戻ってきて、手伝いのためにレベッカさんを連れて行つた（皮を剥ぐ為に一旦イノシシを吊る必要があるそうだ）為、部屋を検分して生活様式をこつそりチェックすることにした。文明は進んでないみたいだけど、どういう道具使つ

てるのか凄く興味あるしな。

基本的には、木製の道具が多いが、壁に飾られている飾り皿は磁器のようだし、カトラリーも銀製のようだ。まあ、普段使いの皿は磁器ではなく陶器と木の器のようだし、磁器は高級品ということだろう。そのわりにカトラリーはすべて銀（だと思う）だ。ステンレス鋼がないんだろうな、おそらく。

キッチンはかまど式で当然ガスなんかはなし。燃料は木炭で、今は火を落としている。

壁にショローさんの武器と思しき^{クレイモア}使い込まれた大剣が立てかけられていた。

さすがに勝手に触るのはルール違反のような気がしたので触らなかつたが、その横の壁に、装飾の施された短剣^{ダガー}が飾られているのを見つけて、目が釘付けになってしまった。

鞘に入っているので刀身は見えないが、絶妙な捻れ^{もぐら}の入った黒檀^ヒの鞘に幾何学文様の螺鈿細工^{らでん}が入り、鞘の石突と口金、鍔^{つば}、柄頭^{つかがしら}は青白く輝く金属製で美しい彫金が施されている。柄はらせん状に削られた鞘と同材料の黒檀で、こちらも空^{もく}の入りが美しい。

一見しただけでわかる、素晴らしい品だ。黒を主体とした落ち着いた一品であるのに、魔力とでも言つようなオーラが立ち昇り、その存在を主張している。

これはどうあつても刀身も見たい。

ショローさんとレベッカさんはまだイノシシと格闘中のようだったので、ちょっとだけちょっとだけよ……と呴きながらコツソリ短剣を手に取つて、鞘を引き抜いた。

鈍く輝く刀身はダマスカス製らしい多層鋼の文様入りの両刃で、
鎬の部分にはルーン文字のようなもの（とにかく読めない文字のよ
うな記号）が打ち込んである。

「うん。文句なしにカッコいい。

ヤバイ、ハツキリ言つてめっちゃ欲しい。

こんなに物欲が刺激されるアイテムは久しぶりだわあ。これくらいのブツだとオクに出さずに殿堂入りにするんだけどなー。

つか、こんなのが普通にあるってことは、上手くやればこういうのこつちで手に入れられるってことなんじゃね？ これは短剣だけロングソード長剣でもこれくらい素晴らしいやつもあるんじゃね？

ヤバイ、異世界深入りするつもりなかつたけど、こんなお宝が手に入るならもうちょっと無理してもいいかもしれないとか思いはじめちゃつた！ 思いはじめてやつた！

ハツキリ言つて日本だつたら重要文化財クラスなんじゃね？ うおー！ どうしようじゅうじょ！

「おおおー！」

「……それが気に入つたの？」

「うー！」

突然声を掛けられて飛び上がる。つい熱中しすぎてしまい、レベッカさんが戻ってきたのにぜんぜん気がつかなかつた。

「……えつと、はい、すみません、勝手に触つてしまつて……。こ

んなにカッコいい剣は見たことがなかつたので」

「ふふふ、記憶喪失なのに、そういうのはわかるの？」

「…………（一せひせ）」

やつべ、失敗した！と思つていると、あまり氣にした様子もなくレベッカさんが続ける。

「それね、傭兵やつてたこりに団長が皇帝から賜つた品でね。団長が亡くなつたときに形見として貰つてきたものなのよ。実際に使うようなものじやないから飾つてるんだけどね。なかなかステキでしょう?」

「はい、……記憶が戻つたとかではないんですけど、この剣にはなんだか引き寄せられてしまつて……。いろいろのを扱つよつた仕事でもしていたのかもしれません」

「仕事？」
そういうえばジローくん天職は？』

「……テンショク？ ですか？」

「祝福は受けているんでしょう？」
その天職よ

かれこれ2年くらい一ートなんですね。

誤魔化しきれない二ート臭が…………？

「……すみません、ちょっと天職？」
のことは記憶を喪失している

よつで……。あと祝福つてのもよくわからなくて……」「

「天職は、祝福を受けているなら、念じれば見られるわよー。」

『天職、天職、天職……』とね

なんというフワッとした説明……。さっぱり意味がわからねえ。
そもそも、祝福なんてものは受けないんだから、見られるわけ
がないんだし、念じたフリして「無理でした。祝福とやらは受け
ていい模様です」と誤魔化した。

「うーん？ ジローくんは商人見習いだつたりしたのかしらねー。
狙つた天職を得るための修行するはたまーにあることだし……。
ま、とにかく明日、祝福を受けに行つてみましようか、試しに。こ
れからエリシエで暮らすなら結局なんらかの天職が必要になるしね
ー」

「祝福つてのがイマイチよくわからないんですけど、どうこいつもの
なんですか？」

「”祝福を受けて天職を得る”。大精靈ル・バラカが祝福を授けて
くださるのよ。そして、天職に目覚めるというわけ」

祝福を受けて天職を得る……か。わかるようなわからないような
話だ。しかし明日つてことは、今日どうすんの俺。家になんにも言
つてきてないんですけどお……。

「とにかく今日は泊まつてきなさいな」

「は、はい！ ありがとうございます。お世話になります！」

某RPGの「てめえみてえなガキは一晩泊まつていきやがれ」を思い出しながらやけくそで返事をする俺だった。

第5話 異世界都市は地中海の香り

どこか深いところからゆうくつと浮かび上がるよう、俺は意識を取り戻しかけていた。

……まあ、普通に朝になつて目が覚めたつてだけだけれどもな。慣れない人んちのベッドだけれど、思いのほか良く眠れてしまつた。なんだかんだいって疲れてたんだなあ。昨日はあのあと、夕飯をご馳走になつてから、すぐ寝ただけど。

しかし昨日の夕飯はなかなかにワイルドだったなあ……。

シローラーさんが「今日はご馳走だぞ、ラッキーだったな」と持つて来たのはイノシシの肝臓ハバで、主食は芋、副菜は豆、さらにシローラーさんが手すから焼いたイノシシステーキ。

当然レバーは生のまま、味付けは岩塩だけで頂きました。まあ、ワイルドだけど思いの他美味しかつたよ。新鮮で。

しかし、イノシシステーキはちょっと野趣強すぎて都会育ちのいらっしゃい辛いものがあつただよ……。味は濃いけど、臭いもわりと濃い……。食べられないほどではないんだが、せめて香辛料なんかで誤魔化せれば……、と思つたけど、香辛料は高級品なんだとかで。

じゃあ香草とかでもよかつたんだけど、人んちで「」馳走になつて文句も言えないしなー。けつこう要領いい末っ子の俺としては「とつても美味しいです！」とか言つて食べましたよ。かなり胃がもたれたがな！

とは言え、初の異世界での食事。味覚に大きな差があるからどうしようかと、少し心配もあつたが、多少ワイルドさがあるとはいえ、基本的なところに差はなさそう安心したものだ。

今度は味噌でも差し入れしてやる。異世界人の口に合つかはわからんが。

さて、考へてたのとちょっと違う展開に巻き込まれるようにして、一晩異世界で過ぐしてしまつたわけだけれども、これからどうしようか……。昨日、寝る前に多少は考えたが

まず、一つ目として。

当初の予定としては、こっちの情報はある程度得たら「異世界へ渡航できる権利」を売ろうと思つてたけれど、この国の情勢だと、正直かなり無理くさいことが判明してしまつたこと。

なんせ、内陸から来たと思われたら憲兵にタイ一ホだ。さすがにそんな異世界ライフを売りつけるわけにもいかんだろう。

一つ目として。
例の短剣のこと。

あれだけの品は、普通に俺が日本でネットオークション遊びをしていても絶対に手に入れることはできないと断言できる。まあ、こちらの世界でも簡単に手に入るようなものでもないだろうが（皇帝

から賜つたと言つていたしな）、だが傭兵へ褒美として渡すくらいだ、完全に入手できないほどいの品でもないだろ。

滅多に見られないようなお宝だとはいえ、ちょっと驚くくらい夢中になつていて、我ながら引くわあ……（昨日もあのあと一小一時間くらい見させてもらつてしまつた）。

三つ目として。

日本に異世界の品を持ち込んでネットオークションに掛けても儲かりそなうだが、日本からこいつちに物を持ち込んだら、もつとずっと儲かりそなうだつていふこと。昨日の夕飯での香辛料の例を出すまでもなく、売れそなものは数限りなくあるし。

それと昨日それとなくショローさんに聞いたんだけ、こいつちの通貨つて、銅貨、銀貨、そして金貨なんだよね。金貨ですよ金貨。日本に持ち帰ればそのまま換金できるー グラム4000円ぐらいだけ、今。

正直、フリーマーケットでお宝探すのが馬鹿らしくほゞの効率を叩き出すのが明白だもんだから、かなり商売つ気が出てきてしまつているんだよね。

四つ目として。

まあ、これは三つ目からの派生なんだが、効率よく儲かるつてことは、お金持になつてアレとか「レとか買えたり、店とか始められたり、もつと言つと、会社とか立ち上げちゃつて社長になれちゃつたりとかー とかとかー ってことなんだよね。

でも厳密になんの仕事したいとかは全然ないんだ……。働いたら負けかなと思つてゐる。

ああ、それか思い切つて趣味全開の店のオーナーとかなら、いいかもなあ……。儲け度外視で商売できるくらい異世界との交易で儲

かつたらやれるかもしないな。デュフッ。

五つ目として。

やっぱ異世界で彼女作ったりとか、胸が熱くなるよな……。
なんてつたつて異世界、こっちの価値観では一ートの俺でもモテ
たりとかもありえるかもしれないしな！　かと言つて、向こうから
アプローチ掛けてくるような慎みのない女は「めんだよ！」彼女い
ない暦＝年齢の童帝なめんな！
……ちよつと脱線したかな。でもわりと切実な問題なんだよコレ。

六つ目として。

気になるよね、祝福。

単純に自分がなんの天職があるのか、すっげー気になる。だって
現実にはネオニートなんだもん！！
受けさせて貰おつか！　異世界の祝福ヒヤリを！
「受けさせて貰おつか！　異世界の祝福ヒヤリを！」

「受けさせて貰おつか！　異世界の祝福ヒヤリを！」

「ん？　ジローなんか言つたか？」

「うわあああ、口に出しちゃった。

「これから「記憶喪失」の俺としては、どうしたらいいだろうかと
シェローさんに相談してみた。

やりたいことはいろいろ思いついたけれど、記憶喪失のはずの俺
がいきなり精力的に活動しはじめちゃうのも不自然だしな。

その際、「どうやら自分は商人みたいなことをしていたらしい。
していたんじゃないかな？ 多分？」

などと遠まわし且つ曖昧に言つてみたら、まず神殿で祝福を受け、
そこでの天職次第で、対応したギルドに上手く紹介してくれるとの
こと。

なんだからずいぶん良い人すぎて恐縮しちゃうんだけど、シェロー
ーさん曰く、困っている人に出会うということ自体が、ル・バラカ
のお導きであって、祝福を受けているものは、その導きに遵つてい
るだけだとなんとか。

要するにそういう宗教観だということなんだらうけれど、シェロー
ーさんが特別いい人なだけなんじゃないかといつ氣もしないでもな
い。

パツと見、山賊みたいなオッサンなんだけどなー、人は見かけじ
や判断できないものだね！

そんなわけで、エリシェの街に向かつてシェローさんとレベッカ
さんと俺の3人と、昨日のイノシシの肉と皮を積んだ荷馬1頭で歩
いてる。村の手前で街道に出て、シェローさんの家からおよそ2時
間くらいでエリシェの街に到着した。

エリシェは、2メートル程度のその気になれば簡単に登れる程度の城郭に囲まれた都市で、石作りの家以外にも煉瓦作りの家も散見でき、赤い屋根の連なりが美しい。

入り口には門番はあれど、普通に開けっぴろげで入り放題出放題。

想像してたのよりずいぶんユルかった。

確かに活気のあふれる街だ。

異世界の街というより、イタリアかどこかの外国へ来てしまつたかのような感覚に襲われる。が、街行く人をよく見ると、ローブを着た魔法使い風の男やら、猫耳に尻尾の獣人少女やら（ちょっと毛深かめ）、槍を担いだブレーントメイルやら、背の低いガチムチヒゲもじや親父（ドワーフ？）の集団やら、とにかく種々雑多で、ああ、やはり異世界なんだなといちいち再認識させられた。数でいえば、人間が一番多いようだつたけど、亜人というか異世界種族というか、人間以外の種族の方もけつこういるんだよ。

神殿に行く前に肉と毛皮を卸しに行くというので、まずはそれに同行する。シェローさんが肉と毛皮を担いで、買取所らしき建物に入つていくのを見守りなら僕といつしょに残ったレベッカさんに気になったことを質問してみた。

「あの肉と毛皮でどれくらいのお金になるんですか？」

「んー、せいぜい銀貨3枚になればいいことじうね。それでもつかの食費の半円分くらいにはなるから悪くない額ではあるのよ。最近は獵師が減ったから、少しだけ買取価格が上がったつてのもあるしね」
……銀貨3枚で半円の食費というと、銀貨一枚＝1万円くらいの価値なんだろ？　いや、それは日本の貨幣価値に照らし合わせすぎているか……。

「金貨は銀貨10枚分なんでしたっけ？　銅貨は10枚では銀貨1枚分？」

「金貨はそのとおりだけど、銅貨はちょっと違うわね。10枚で銀貨1枚になるのは白銅貨よ。そして、青銅貨、これね、これが10枚で白銅貨1枚分」

と言つて、白銅貨と青銅貨を見せてくれるレベッカさん。白銅貨は厳つくした500円玉の使い古したもののようなコインで、青銅貨は、1セント硬貨に似た小さいコインだつた。

「うーん、とりあえず10進法で安心した。けど、まだいまいちわからない。

レベッカさんは悪いが、いろいろ質問をさせてもらおう。

「わついえばお金の単位をしつませんでした。銀貨一枚と白銅貨4枚と青銅貨7枚みたいな場合は、147なんとかって数えるんですね？」

「おー、ジローくんお金の計算ができるんだね。やっぱり商人見習

「でもやつてたのかしら、一般的にはあんまりそういう計算使わないから」

「え、じゃあどうやってるんですか？」

「だからそのまま。銀貨一枚と白銅4枚と青銅7枚、つて数えるんだよ？」

「うーん？ そんな難しい計算でもなくね？ お金の単位は「エル」だと教えてもらつたけど、1銀貨＝100エルとか教えれば幼稚園児でもわかることじゃね？」

あんまりつていうかぜんぜん算数が発達してないのかな。大丈夫か異世界人。詐欺に簡単に引っ掛けちゃうぞ！

「でもレベッカさんはわかるんですよね、計算」

「私は傭兵团で団員への報奨金の計算とか少しやつてたからね。簡単なものしかできないけど、お金の計算は得意よー？」

なるほど、納得。

ま、俺も最終学歴高卒様であるからして、算数は苦手だからな。しかも「読み書きそろばん」のうち、読み書きが完全アウトな異世界人！^{チキュウジン}

そうこうしていると、銀貨3枚を握り締めたシェローさんが、買取所から戻ってきた。あとでこの金で必要な物の買出しをするそつだが、その前に神殿に連れて行ってくれるようだ。

じゃあ、神殿行ってパツと祝福づけちやおつぜー！ とシローラ

ん。

ずいぶん軽いな。

第5話 異世界都市は地中海の香り（後書き）

主人公、高卒童貞無職という「冠王」。けつして作者に投影しているわけではありません。けつして。

第6話 異世界神殿は妖精の香り

「サルティネーラー」

神殿は街の中央広場正面に建っていた。そこそこ大きな建物神殿というより教会みたいなイメージの建物で、入り口には大精霊のシンボルらしきレリーフが飾られている（牛と蛇と鳥が合体したような謎モチーフ）。入り口から足を踏み入れると、神官と思しき女性がこちらに気付いて挨拶らしき言葉を発した。

「サルティネーラ！　久しぶりねショロー、レベッカ」

気さくにショローさんとレベッカさんに話しかける神官さま。

…………しかし、俺にはもっと重要な案件が訪れており、まずはその件について頭を整理しなければならなかつた。

神官は、細身の若い女性だった。ゆつたりとした若草色のローブ。ローブの上には赤、青、白、緑の凝つた意匠のカズラ。透き通るような輝く亞麻色の髪を腰まで伸ばしている。切れ長の眼、白磁のような肌、緑の瞳、……そして、特徴的な長くどがつた耳……。

……今まで言つた！

ドワーフとか獣人とかが街を歩いていた時点で、その可能性に

ついてはいつだつて考えていたんだ！

なんてつたつて異世界。どこからでも見てもファンタジー丸出し

の世界！ となれば当然の帰結じやん。

つまりあの神官は、あの耳がちょつぴり長くて、齧つと言わんばかりに耳なんか尖らせちゃってる神官様は！

ヒューマン・リソース

コノ「た」もじことなきコノ「」
ゆゆゆゆ夢にまで見た、えええエルフが現実に！ 僕はついに手

にいた! ハルフの國をひき出せ!!

俺デイード ットとか大好きなんだよーー！

あ w セ d r f t g y ふ じ ー ジ ー ほ ー

ニハリバベシ
ジヤヒヘ

「ではそちらの方が祝福を受けるといひことでいいのね？」

「あ、はー。ジローといいます。よろしくおねがいします」

「なにモジモジしてんのよジロー。神官さまみたいなタイプが好みなのかしら？」

「ははは、こいつ見えても神官さまはお前の母親よりもまだ年上だぞ、おそらく。だいたい俺がガキのこいつ祝福を受けたときからこんな感じだからな、って痛い！」

歳のことを言われてショローラさんの耳を引っ張るエルフの神官さま。

歳のこととか全然気にしない種族かと思い込んでたけど、そういうもないのかな。萌えるな。

「やうね、ジローさん、そんなに緊張しなくても大丈夫よ。や・さ・し・く・してあげるから」

しかしこのエルフ、ノリノリである。森の賢者とか、孤高の種族とか、そんな感じが全然ない。

背もなんか低くくて可愛いし、俺得すぎるだろっ。

「冗談はさておき、それじゃあ始めちゃいましょうか。じゃあ、ジローさん、祭壇へどうぞ」

少し高くなつた祭壇へ招かれる俺。可愛いエルフの神官ちゃん（推定年齢50歳以上）の隣に立つ俺。俺のほうがちょっとだけ背が高いね神官ちゃん。フワツとハチミツみたいな甘い匂いがしてきて、21歳童貞の俺には毒すぎるね神官ちゃん。

俺が脳内でいろんな妄想に花を咲かせているつま、神官さまは瞳を閉じてなにやら呪文を唱え始めた。びりゅり、このまま祝福の儀式がはじまるよつだ。

呪文を唱え終わると、「手を」と両手を差し出してくる。俺はその手をドギマギしながら取つた。
名前と年齢と性別を聞かれたので素直に「ジロー・アヤセ、21歳、男」と答える。

一瞬、両手に熱を帯びたと思った次の瞬間、辺りをカツと光が包み、そしてすぐに止んだ。

神官はホッと一つ息をつくと言つた。

「おめでとうござります。ル・バラカはあなたを精霊の御子と認め、祝福を受けられました。これより大精霊はいつでもあなたを見守り、あなたを助け、あなたを導いてくださります。実りある人生となりましょ!」

「あ、ありがとうございます?」

……困つた。こんな一瞬で祝福とやうは終わりなのか。ぶつちやけぜんぜん変化がない。

祝福を受けてなにかが変わったという感じがしない。

やつぱ異世界人だしちょと違うのかな?

「ジロー、それでどう? 天職はなんだつたー?」

「IJの瞬間はいつ立ち会つてもワクワクするな!」

早く天職がなんだつたかと教えるとシーローさんたち。

いやしかし、ぜんぜん変化なしなんですってば。どないせえっちゅうねん。

「ショローもレベッカもあせらないで。彼はまだ天職の見かたもしらないんですから……。ジローさん。集中して。『天職、天職、天職……』と念じてみてください。それで自分の天職を見ることができますから。最初は時間がかかるかもしれませんけれど、すぐに慣れますからね。慣れればすぐに”出せる”ようになりますよ」

またフワフワとした説明だな。レベッカさんの説明はコレの受け売りか。

しかし、ともかくやってみるしかないか。

「天職、天職、天職……」

念じてみると、目の前にパツと半透明の石版のようなものが出現した。物理的に板が出るとは思いもよらなかつたので驚いたが、内容も予想の斜め上だつた。

板にはいつもあつた。

【名前】
ジロー・アヤセ

【年齢】

2
1
歳

男 性別

人間種族

【天職】

魔術師 鋼治師 細工師 詐欺師 商人 料理人 宝石学者

【固有職 ザ・ライブライ 異界の賢者】

スキル 異世界旅行
スキル 異世界旅行
スキル 異世界旅行
スキル 異世界旅行
世界の理 ザ・プリンシブル
世界の理 ザ・プリンシブル
世界の理 ザ・プリンシブル
世界の理 ザ・プリンシブル
真実の鏡 ザ・ジャッジメント

【バラ力のお導き】

・ 猶師夫婦にお礼をしよう
・ 真実の鏡を使ってみよう

0
/
1 0
/
2

天職多つ！ しかもなんか凄そうな固有職まであるんですねけお…。

しかもバラカのお導きつて……。これってひょっとして、いや、ひょっとしなくてもRPGでこうところの「クエスト」じゃね？ ご丁寧に進行具合まであるし。なぜだか全部日本語だし。

ワクワク顔のショローさんとレベッカさん。神官さまも可愛い顔でどうだった？ と首をかしげている。なにこの可愛い生き物。俺がドンファンだつたらここまで20回は口説いてるよ。

「えつと、この天職つてのでいいんですかね。なんか多いけれど……、剣士、魔術師、鍛冶師、細工師、詐欺師、商人、料理人、宝石学者……」

「ちょっと、ちょっと待つてジロー、多いつてどういつ」と、今言ったのがみんな天職だつて言うの一？？

レベッカさんが困惑顔で聞いてくる。ショローさんも頭に？？？ を浮かべている。神官さまが難しい顔をして俺に質問してきた。

「ジローさん、……天職は今言つた8つあつたんですねか？」

「えつと、はい。8つです。……『天職』の括りで表示されてるので間違いないと思つんですけど……」

「ですか……。まず、一般的には天職は1人1つです。時々複数の天職を持つている方もいますが、2つの天職を持つている方で

30人に1人、3つなら100人に1人、4つ以上となると100人に1人のいるかどうか……。まして、8つともなるとちょっと例がありません。『夢幻の大魔導師』ですら天職は6つだったと言わっていますし……。あ

突然「思い出しましたわ」と言わんばかりに瞳を輝かせるエルフ神官ちゃん。なになに、急に近づいてこないで、童貞心がビックリしちゃうよ！

「ひょっとして……、『固有職』を得たんじゃないですか？」

さて……、どうするか。

第6話 異世界神殿は妖精の香り（後書き）

主人公がエルフ好きなのは、けつして作者の嗜好を投影しているわけではありません。けつして

第7話 異世界天職はチートの香り

「じゅうしょく？ ですか？ そういうのはアリマセンネ」

誤魔化すことにした。

可愛いエルフちゃんに嘘を付きたくなかったが、「異界の賢者です！」とか不審すぎるだろ？ 異界てのもストレートすぎるしな。

そうですか……と、なぜかちょっと残念そうなエルフをギュッと抱きしめてお持ち帰りしたいのをグッと我慢して、逆に質問した。

「固有職って、天職とは別にそういうのがあるんでしょうか？」

我ながらわざとらしい質問だが、訝しがることもなく答えてくれたことによると、4つ以上の天職を得た人の中には、天職の他に「固有職」というその人だけの職を得た人がいたらしい。エルフちゃんが知っているのは、『ザ・ヴェノム悪意の沼』『ザ・ミラージュ夢幻の魔導師』『ザ・シルエット影』の3つで、中でも夢幻の魔導師つてのは、100年以上前にエリシエで祝福を受けた有名人なのだそうだ。

悪意の沼だの影だのという、なんとなくヒールの気配がする連中は、昔話に出てくるような大昔の人で、伝説だけが残っているんだとかなんとか。

「固有職を得ると、1つだけその人だけが使える特別なスキルを得られるようになるらしいんです。『夢幻の大魔導師』はそのスキルを使って、たった一人で千の軍勢を止めたと聞いたことがあります。スキルの名前は伝わっていないのでわからないのですけれども……」

俺……、1つどころか、3つあるんですけど……。スキル……。
やっぱ内緒にしておいてよかつたな。千の軍勢を止める力はなさ
そうだけど、変な注目を集めるのは間違いなさそうだし。いや、エ
ルフちゃんの注目を浴びるのはやぶさかもないんだけれどね、一
般人の熱視線はいらないや。商品仕入れに行く時以外は家に引きこ
もってたから、視線とかちょっと苦手なんですよ。

固有職の件は「なるほどすごいものなんですね」とわざとらし
くかわし、気になっていた件を聞いてみることにする。

「ところでですね、祝福を受けても、特になにが変わったという感
じもないんですが、天職を得るどいつもいた違いがあるんですか?
僕、全然体感できないから不安で……」

「それは天職に対応した職業に実際に就くか、修行するかしなけれ
ば、なかなか体感はできませんよ。天職は要するに『その職の才能
がある』ということですから」

「才能ですか。あ、普通はもっと若く祝福を受けるって言つてまし
たね。つまり天職があつても、それを若いうちから磨かないと大し
たアドバンテージにはならないって意味だつたんですか……」

「ええ、普通は10歳で祝福を受けますから……、そういう部分が
あるのは確かに否定できません。けれど、悲観的になる必要はあり
ません。天職持ちはおよそ5倍は速く物事を吸収して成長ができま

すからね。まだこれから良い経験をいくらでも積めますし、成長したいといつ気持ちがあるのなら、苦難もまた楽しく感じられるはずですよ」

「「J……、5倍ですか。それはすごいですね……」

なるほど。

5倍の効率があるなら、そりゃあ天職以外の職は仕事にしないよなあ。でも逆に言うと、天職が出た職にしか就けないということなんじやないか？ 僕の天職に詐欺師つてあつたけど、詐欺師オソリ一の天職の人つて相当微妙じゃね？ 地元じゃ「あいつ詐欺師だぜ」と囁かれ下手すりや村八分だ。なにをしても信じてもらえず、誰も自分のことを知らない町から町へ詐欺を働きながら世界を旅する根無し草。この詐欺師の才能が憎い！ どうしてこんなに簡単に騙せちゃうんだよおおおおお！ とか言いながら日々を過ごすのか。人事ながら可哀想になってきたわ。天職システム酷すぎるだろ。

「5倍って言つても、伸び代は人それぞれだわよジロー。効率の良い修行してなきゃ、天職なしでも努力してる子にはかなわなかつたりするものよ？」傭兵団の中には戦闘系の天職持ちじゃない人もいたけど、けつこう努力や経験でカバーしてたしねー。まあそれでも努力して経験も積んでる天職持ちにはなかなかかなわないんだけどさ……」

まあ、確かにそうかもしれない。毎日1時間修行する天職持ちと毎日5時間修行する天職なしが同列であるなら、絶対に覆せない差ではなさそうではあるな。毎日1時間の勉強すらできずに高卒二トになつた俺だからわかる。

しかし天職8つか。どの天職もまあ、いちおつ心当たりがあるというか、長い一ート暦のなかで齧つたことがあるようなものがほとんどだつたりするのがアレだけど、そんな簡単なことでいいんだろうか。

あ、魔術師だけは心当たりないな。

いや……待てよ、ひょっとしてあれか？ 20歳過ぎて童貞だから魔術師の才能があるとか出たんのか？ え？ マジで？ そういう基準で魔術師になっちゃうわけ？ 10歳で祝福受けて魔術師の才能あつたら絶望するんじやね？ ヤラハタ（ヤラズにハタチの略）確定じやね？

さつき魔術師の天職もあるつて言つちやつたけど、あれって「自分童貞です」（キリッ）て宣言したもの同然だつたんじやね？ 天職システム酷すぎるだろ。

うわあああ

エルフ神官ちゃんに「僕のことは内緒にしてください。天職が8つあるとかで注目を浴びたくないんです」とお願いして、神殿を後にした。本当はお布施をするものらしいんだけど、今のところは一文無しだからと免除してもらつた。ま、稼いだらエルフちゃんが惚れるくらいのお布施しちゃるわい。

「さあ、ジロー。次はギルドに行くんだが……、どこのギルドにするんだ？ それだけ天職があるとどこでも選べるが」

ヒシュローさんに神殿を出たところで聞かる。

「商人の関係のやつでお願いします。……えっと、そのギルドではなにをするんでしたつけ？ すみません無知です」

「よそから来た人間はギルドで登録して住人登録をするんだよ。そうすれば、この街で商売をしたり就職したりできる。本当は他の都市から来た人間は紹介状がなければ登録できないがな、まあ、そこは上手く紹介してやるよ」

「なにからなにまで本当にあります。本当に助かります」

俺がお礼をすると、突然『天職板』（俺命名）が目の前に現れる。天職板は淡く光つており、良く見ると「バラ力のお導き」の「獵師にお礼をしよう／＼」が点滅しており、「獵師にお礼の品を贈ろう／＼」にヌルッと変化した。獵師にお礼をしたことによりクラスクが進行したらしい。次にお礼の品を贈ればコンプリートか。

「じゃあ、商工会議所に行くとするか。中では俺がジローを紹介す

るからな。適当に合わせてくれ

「は、はー。よろしくおねがいします」

商工会議所は思いのほか大きな建物だった。レンガ作りのちょっと洒落た建物で2階建て、無骨な石作りの建物が多いエリシュの街の中ではなかなか存在感がある。

入つてすぐの受付でシロローさんが「トビーはいるかい?」と付嬢に声を掛けると、奥のほうからシロローさんより少し年下くらいいか、30歳前半くらいの眼鏡の男を呼んで戻ってきた。

「仕事場ではトバイアスと呼んでくれよ、シロロー。いつちに顔を出すなんて珍しいじゃないか。しかもレベッカさんも同伴で……。レベッカさんもお久しぶりです」

「久しぶりねー、トビー君。今日はちょっとお願ひがあつてきたの

「あ

「お願ひ? また魔結晶の買取りですか? それなら二三りも得こはなれど、損はしないからこくらでも受けさせてもうりますよ」

「ああ、違つ違う、今日は全く別件なんだが……。おい、ジローラム

ショローさんに呼ばれてトビーと呼ばれた男の前に出る。ショローラさんともレベッカさんとも親しげに話をしているから、旧知の仲なのだろうか。眼鏡の奥の目は鋭く、一筋縄ではない氣配を漂わせていて隙がない。

「このジローラムはレベッカの姉の子、つまり甥なんだがね、エリショウで商人をやる為に帝都から出てきたんだが、途中で強盗に襲われて斡旋状を奪われてしまつてな、いや参つた参つた」

「……つまり斡旋状なしで登録してほしいつてわけかい？ ショローラム？」

「うわあ、なんかこの嘘わざといしきね？ しかもレベッカさんの甥設定で無理あるだろ。似てないを通り越して人種が違うレベルなのに……。せめて俺にも一言言つておいて欲しかつた……。

ショローラムが頷くと、胡散臭そうに俺をジロジロ見てくるトビエ氏。どう見ても嘘が見破られます。本当にありがとうございましました。

ショローラムに任せるのは無理くさいと判断。脳筋キャラに交渉を任せた結果がこれだよ！ 俺がなんとか補足して、トビー氏を納得してもらつしかねえ。

「…………トバイアスさん。実は僕は記憶を失つておりまして、このショローラムさんやレベッカさんの甥…………らしいのですが、その記憶がないんです。斡旋状という物も持つておりませんから、状況証拠から考えると強盗に襲われた際に頭を強く殴られたかして記憶を喪失し

たと考えるのが妥当なのですが……」

「つまり、君がレベッカさんの甥だといつのは、ショローとレベッカさんの証言しかないというわけだね?」

「……証拠はなにもありませんから。」

俺がそういうと、トビー氏は瞳を閉じて少しだけ思索し、言った。
「……レベッカさん、彼は確かにあなたの甥で間違いありませんか?」

「もうよー? ジローは間違いなく私の甥だわ。旦元なんかジェシカ姉さんにソックリ」

あっけらかんとした調子で肯定するレベッカさん。

「…………そうですか……。確かに着ている服は帝都の物だな……。
君、ジロー君と言ったかな。商人に関する天職はなにか持つてい
るのかい?」

「あ、はい。商人と宝石学者です」
トレーダー ジュエロジスト

「と、とりあえず一いつだけ言つておくことにする。またツラツラ言
つも言つても逆に不審だしな……。」

商人と宝石学者を選んだのは、まあ、単純に仕事になりやすそ
な天職だなと思つたからに過ぎない。細工師や鍛冶師でも良かつた
けど、そうすると商売つてより職人仕事になっちゃつしな。

「ほひ、ダブルジョブでしかも宝石学者とはね……」

ジックと僕の目を見つめるトビー氏。ジックと見つめ返す俺。緊迫した雰囲気が続いていたが、フウと息を吐きショローさんを見て観念したように肩をすくめてトビー氏は言った。

「……ま、そういう事情なら仕方がないなショロー。ここはお前の顔を立てて俺の権限でその子を登録してやるよ。……今度なんか奢れよ?」

どうやら、なんとか上手くいったらしい。

記憶喪失というところを明かさないと、善良なショローさん夫妻を騙している不審者にしか見えないからな……。

トビー氏はシェローさんの嘘には気付いていただろうが、シェローさんとレベッカさんが俺を保護しようとしているという意図を汲み取ってくれたというわけだ。良い人でよかった。

登録方法は青白い金属板に血を垂らして、それを職員が奥に持つていき、暫くして戻ってきた職員の手には一つに割られた先ほどの金属板があり、「これがギルドカードとなります」と言われ片方を渡され、あとは羊皮紙に名前と天職を記入し、それだけで終わってしまった。

ギルドカードはいわばエリシエでの住民票に近いものらしく、これがあれば店も立ち上げられるし、就職もできるし、家を買ったりもできるんだそうだ。俺始まつたな。

さて! 祝福も受けた。ギルド登録もした。

しかし、そろそろ一回家に帰らないとなあ。昨日は無断外泊だつたしな……。

第8話 異世界店舗は興奮の香り

「お二人のおかげで祝福も受けましたし、ギルド登録もできましたし、この街で活動する資金もできました。……お礼といつてもこんなものしか持っていないんですが、よかつたらこれを使ってください」

と言つて、店で売らなかつたボウイナイフをショローさんに渡す。これをショローさんが受け取れば、「獵師にお礼の品を贈ろう 1 / 2」の”お導き”のクリアとなるはずだ……。

商工会議所を出てから、3人でお昼を食べに行くことになつた。無一文の俺としては、これ以上の借りを作るのもあれだったので、断ろうとしたのだが、「若いもんが遠慮してんじゃないよ」とベッカさんに押し切られてしまい、異世界外食初体験と相成つたのだつた。

ショローさん御用達の店は、商工会議所から10分ほど歩いた場所にあつた。

パツと見の印象は屋台村。石置の上に置かれたテーブルやら長イスに、客が思い思いに陣取つて飲食している。

料理は道沿いの店舗で買うか、注文してから運ばれてくる方式のようだ。道幅せいぜい5mあるかどうかというところにテーブルやらイスやら置かれ雑多な客達が飲食しているせいで、かなり窮屈な印象がある。

なんだこれ、今日は祭りか？

レベッカさんが食べ物を注文に行くのについていくことにした。半分は食事の値段のリサーチの為。半分は興味本位で。

レベッカさんが慣れた調子で注文していく。

ギョーム（鶏みたいな肉）の串焼き5本で20エル。パエリア（のような米料理。具沢山で美味そう。なんか赤い）大盛り2杯で40エル。豆のスープ3杯で15エル、ナンみたいなパン3枚で15エル。リリアラム（赤い果物）3個で10エル。

しめて、100エルなり。

つまり銀貨1枚だ。あれ？ 銀貨3枚で半月分の食費とか言つてなかつたけか。買いすぎなのか、それともここが高いのか？ ショローさんちの家計が心配です……。

つか、1食で半月分の食費の3分の1使っちゃってるんですけど……。

テーブルではショローさんがセルフサービスらしい茶を用意して

くれていた。飲んでみると香ばしくて美味しいが飲んだことのない味の茶だった。茶葉を見たら猫ジャラシに似ていたので、とりあえず猫ジャラシ茶と命名しておいた。

鏡の屋敷がガチ西洋風だから、西洋的な文化の世界のイメージがどうしても拭えないんだけど、実際はどうも猥雑だ。茶碗で茶を飲むし、普通に米があるしな。……まあ、こいつはうが好みだからいいんだけども。

そういううちに料理が運ばれてきて、みんなでいただいた。

どれもこれも予想以上に美味しい！

ギョームの串焼きは硬めの鶏肉という感じだろうか、ウイキョウに似た香草と塩で味付けされていて、風味がいい。

パエリアは赤い見た目に反してマイルドな味わいで、やわらかく煮えた香味野菜とかたまり肉も味が染みている。米は日本米よりタイ米に近いようだ。

スープには豆のほかに卵も入つていて健康に良さそうだ。ナンのようなパンは、ナンというよりは、ピザの耳の部分という感じだった。うつすらと油が垂らしており、オヤツ代わりにこれだけ食べても良さそうなくらいだ。

やばい、異世界やばい。食い物超美味い。

銀貨一枚だから高いかとも思ったけどこの味なら納得だわ。それに量も半端ねえ。

パエリアの大盛りって米5合分くらいあるんだもの。それが2つ、つまり1升分くらいあるんだぜ。まったくショローさんもレベッカ

さんも大変な健啖家だよ。

3人でガツツ食いして完食。

最後に「ザートとしてリリアラムというフルーツをいただいた。見た目はマンゴーに似ているが、マンゴーより酸味の強い少し硬めフルーツで、この辺では食後に良く食べるものなのだそうだ。サイズも大きめ（コンゴより一回り大きいくらい）のこれが1個4エル、3個でまけでもらって10エルだった。

しかし、1エルの価値が日本円に換算してどれくらいのかいまいち掴めない。日本だったらばあのパエリアなんて1杯3000円以上すると思うけど（なにせ量が量だ）、それで試算すると1エル＝150円だ。

最小単位が150円つてありえないだる……。いや……ありえるのか？ 異世界に地球の常識を持つてきても詮無きことなのかな??

まあ、ひとまずこの件は保留としよう。日本のものを売却すればその額で判断できるだろしだ。

「シロー。いくといらないんだらつし、しばらくはついに居候してもいいわよ。ベッドもあるし……。街からほつよつと遠いけれどね」

食後の茶を飲んでるときにレベッカさんが唐突に切り出した。シエローさんもウムウムと頷いている。

提案としては非常に嬉しい。見ず知らずの、記憶喪失で、内陸の服を着てて、天職が8つもある、正体不明の小僧に対しての待遇としては、なんというか良すぎる。良い人すぎて不安になるレベルだよ。

でも、さすがにそんなに甘えるわけにもいかないし、なんと言つても一回家に帰らないといかん。親になんにも言つてないし、ネットオークションに出品中のものもそのままだし。

折角の厚意に心苦しい限りではあるが……。

「僕みたいなものにそつまで言つてもらえるのは、非常に嬉しいんですけど、さすがにそこまで甘えるのは心苦しいので、なんとか自分でがんばってみようかと思つていいんです。この手持ちの品を売れば少しばお金になると想つますので……」

そう言つて自衛の為と思つて数本持ち込んでいた自作のナイフをテーブルに広げた。

ナイフ作りとの出会いは中学1年生のころだった。

中学の時の部活の顧問が技術教師で（数学も教えていたが）、その彼が副業でカスタムナイフビルダーをやっていて、放課後にナイフを作つているのを見ていたらいつの間にか自分もハマつてしまい、今でも半年に1本くらいのペースで作り続けている。

まあ、その技術教師と今だに付き合いがあるから材料を安く譲つてもらつたり、工具を貸してもらつたりして、ニートになつても続けられているんだけどな。鋼材はともかく電動工具なんかは自分じ

やなかなか買えないし。

ショローさんが興味深そうに大振りな一本を取り、品定めるように見始める。

武器になりそうなもの……と思って、手持ちで一番刃渡りの長いボウイナイフを持ち込んだ物だ。

全長で35cm、刃渡り20cmの分厚いナイフで、個人でこのサイズを作る人はあまりいないかも知れない。日本で持ち歩いたら発見次第即御用だが、自分で愛てる用に作ったから問題はない。

鋼材かくざいはATS-34。ナイフ用ステンレスの定番だ。

シースも自作。牛革ぎわ製で細かいカーヴィングも施してある自慢の一品だ。

「良いナイフだな。仕事柄刃物はいろいろと見てきたが、こんな顔がほが映るほど磨かれた刀身は初めてだ。作りも丁寧だし、かなり高価たかな品なんじゃないか？」

と、ある意味刃物のプロとでもいうべきショローさんにも好評なようだ。

「かなり高価」がどれくらいの金額を指すかはわからないが、無名の素人の自作品なので、たとえネットオークションに出しても1万円にもなれば良いほうだろう。まあ、ネットでなんか売る気もないけど。

「記憶がないもので、どういう謂れの品かはわからないのですが、僕も良い品だと感じます。何本か売って、しばらくの活動資金になれば……、と思つのですが」

「やうだな。これならばかなりの金額になるだらつ。知り合いの道具屋のところで頼んでみよ」

「あ、ありがとうございます！」

じつちの世界に持つて來ていたのは、例のボウイナイフの他には、小ぶりのドロップポイントのシースナイフを2本、中サイズのハンターナイフが1本である。ボウイナイフは特別手が掛けている品なので売るつもりはないが、シースナイフとハンターナイフは売ってしまうつもりだ。

全部で金貨1枚にでもなればしめたものだが……。

ショローさんの知り合いの道具屋は、予想に反して大店だった。

どうしてもRPGの印象で物事を考えるからか、例の大作RPGの道具屋的なものを連想してしまつていいかん。「いらっしゃいませ。ここは道具屋だ。なににするかね。ここで装備するかね。120Gだがいいかね」みたいな、オッサン一人でやってる5坪くらいでやってるちっちゃな店をね。

道具屋は「ミーカー商会」と言い、このへんでは一番大きい店な

のだそうだ。中に入つてみると、道具屋といつよつは武器防具の店といった感じだった。

店内は5坪^{さかずき}から30坪^{さかずき}あつやつだ。売つている品物は……、RPGだコ^レ。

「J^リは武器防具の店だ。なににあるかね。J^リで装備するかね」つていうアレだコ^レ。

剣、ナイフ、槍にメイスにワンドに斧に鎧に盾に籠手にスネ^{スネ}。外套も服も靴も売つてゐるし、旅に使うであろう道具、寝袋やロープや鍋とか食器とか、照明に使つ松明やランタンやらもある。

……楽しい……

俺こ^う店大好きなんだよー

J^リでなら半日は時間つぶせるわあ。

夢中になつて武器や防具なんかを見てこると、シロ^ロさんが呆れたように呼びに來た。

……すみません、つい夢中になつちやつて……。ほととじつこの中に田がないんですよ……。

シロ^ロさんが店主に涉りを付けてくれ、ナイフは買ひ取つてくれるから、とにかく見せてみてくれとのこと。

ボウイナイフ以外のナイフを取り出して、カウンターに並べる。

店主は40がらみの筋骨隆々のハゲ親父だ。強そうな見た目に反

して、田つせは優しげだ。

「…………」のくんでは見ない品だな……。とすると内陸産か、あるいは田畠のまつの作か……？ いつたいどうなつとるんだコレは

などとブツブツ言いながら検品を行つてゐる。

すみません、それ地球産なんですよ。厳密には俺作なんです。

とも言えないのに、黙つて検品するのを見守つた。

どうやら事前にシエローサンが俺が記憶喪失だと聞いてくれてあつたようで、必要以上の詮索をされることもなく査定が終了した。

「待たせたな。

結論から申すと、ここつを売つてくれるなら全部で金貨10枚出やつ

「えつー？」

軽く絶句してしまつた。10枚！？

金貨10枚つて日本円に換算して……、さつきの暫定的な試算の1エル＝150円で計算するとあんた、金貨10枚はつまり10000エル……。

……150万円やで。

「ああ、勘違ひするなよ。ナイフとしての価値で申すなら金貨一枚くらいのものだぞ。……ただな、このナイフの製法は今のところまだこの国には伝わっていない、俺でも始めて見るものだ。そり

に鋼材もわからん。比重から考えると鉄のようなんだが……。ハンドル材も見たことがないものだ。要するに、なにからなにまで謎だつてことだ

そりやあそだううな。鋼材は日本製のステンレスだし、ハンドル材はマルカイタ（米製の人口合成素材）なんだから。

「……つまり謎を貰い取ってくれるというわけですか？」

「謎、というよりは信用だな。記憶喪失ということだが……、例えばだな、お前がこいつを『帝都』か『山岳』あたりからサンプルとして持つて来る途中で記憶を失ったものとする。それで、無一文だからとうちに持ちこまれたとして、新しい技術の粋を凝らして作られたものと解つているのに買い叩くわけにはいかんだろう。店の信頼と、なによりプライドの問題としてな。だから金貨10枚だ。まあ、そのかわり、このナイフの製法については研究させてもらひがね」

なるほどな。確かに俺が商人でよその国から新しい品を売るためのサンプルを持って来た使者とするなら、記憶喪失なのをいいことに力モネギよろしく買い叩くつてわけにもいかないんだな。

しかし、サンプルとか言つてことは、俺が商人に見えるつてことなのかな？

「商人でなけりや、あれだけ熱心に店の商品をチェックしたりはないさ。記憶を失つてもそういうところは変わらないものなんだな！」

と、ワハハと笑う店主。

なるほどねー。ただの物好き^{アイテム好き}なだけなんだけどな。商人の天職はあるけれど。

ま、高く買い取ってくれるのだから、素直に甘えさせてもらひつ」とこじよつ。これで当面の活動資金には困らなそうだから、素直に嬉しい。

しかも金貨だったら、ひょっとして向こうに戻つたら換金できるかもだし……なー

「じゃあ商談成立だな。ちよつと待つてくれ」

そう言つて金貨を10枚取り出し、青い巾着袋に入れてくれる。それを受け取りズッシリとした重みを感じながら、ショローさんとレベッカさんに向き直つて言つた。

「ショローさん、レベッカさん、本当に何から何までありがとうございました。お2人のおかげで祝福も受けましたし、ギルド登録もできましたし、この街で活動する資金もできました。お礼といつてもこんなものしか持つていないんですが、よかつたらこれを使ってください」

そしてバッグからボウイナイフを取り出しショローさんに渡した。

第9話 異世界クエストは現実の香り

「いいのか？ いや、嬉しいが、これはお前の記憶を取り戻す鍵になる品なのかも知れないんだぞ？」

「あ、はい」

あ、はい。じゃねええええ。

記憶喪失設定なのに持ち物簡単に手放しちゃオカシイってことには、全く考えが回らなかつた……。

でもまあ……、実際には記憶喪失ではないのだし、いいか！
もう、そういう入つてことで理解してもらおう！

「そうですね。今のところはそれを持つていてもなにも感じるところもありませんし、構いません。記憶のことは少しづつ取り戻せば良いかと思つていますしね」

シロローさんは一応それで納得したのか、それとも意外とナイフが欲しかったのか、それ以上の追求はせずナイフを受け取ってくれた。

受け取つてくれたことによつて「これでクエストクリアとなるん

かなー」と考へている。

突然輝きだす俺とシェローさん。
そして浮かび上がる俺の天職板。

そして……。

ポンッ。

と小気味良い音を立てて、天職板が手のひらサイズの可愛い妖精
さんになつた。マジか。おちつけ。

「よおよお、はじめましてだな。アホみたいなツラしやがつて。ハ
イこれオメデトウの品物。大事にしなくてもいいけど”ハジメテの
精霊石”は記念に取つておく奴が多いらしいぜ。じゃあな。これか
らも世のため精霊様のためにガンバッてくれよ

ポンッ。

…………え?

なにいまの? 白昼夢とかの類かな?
手のひらに青い石みたいのが乗つてるから夢じゃないのかな?

助けを求めるようにシェローさんのほうを見ると。シェローさん
の手にも俺のと同じような石が乗つていた。……どゆこと?

「シェローさん、今のは?」

と聞くと、俺の手に石があるのを認め、肩を抱くよつこじて囁つた。

「おお、ジローもお導きを達成したんだな、おめでとう。俺のほうも今達成となつたよ。」

「えつと… つまりジローのことです？」

興奮しているジローさんを横田にレベッカさんが詳しく説明してくれた。

お導きを達成すると、天職板が精霊の形を宿し、その精霊が達成の記念として「精霊石」という石をくれるのだそうだ。この精霊石は大精霊の加護そのものと考えられていて、見た目がまるつきり宝石といふことを抜きにしても、非常に高額で取引されるものなのだそうだ。

なので人々はお導きがあれば、みな積極的にそのお導きを「達成」しようとがんばるものなのだそうである。

シローサンの手にも精霊石があつたのは、彼もまたお導きを達成したからで、そのお導きってのはつまるところ……、俺との出合いのところから発生したクエスト……ってことだよなあ。確かにお導きに遵つているだけとかなんとか言ってたけれどもなあ……。

「…………… そうだったんですねかあ……。ふふふ」

俺を助けてくれたのが彼の無償の善意だったわけではないことに

微妙な落胆を覚えて、じるりじるに自分のピコアさになんだか笑えてきてしまっていた。

そんな事気にするよつたタイプじゃないと思つてたんだけどな、自分のこと。

それに……、実際結果オーライなのだし、俺なんて記憶喪失という嘘をついているんだしな。固有職のことだつて隠してくるし。だからなんか言えたよつた義理でもないんだけどな。

やつぱなんだかんだ言つても慣れない異世界で心が弱つてたのかな。

急にどりでもよくなつてきちゃつたな。……もつとにかくすぐ日本に帰りたくなつたなあ。

そう思つてしまつたら、もつひでひこも駄目で。

「……それでは、本当にありがとひでひこました。また、落ち着いたら伺わせていただきますね。それでは」

やう言つて身を翻し、2人から逃げるよつて店を出た。

いや、実際に店を出てから全速力で走つて逃げた。

後ろでレベッカさんが「ちょ、ちよつと待ちなさい」とか言つているのが聞こえていたけれど、呼び止められるほどに、もつ止まれなくなつてしまつた。

自分でもよくわからない気持ちに支配されていた。

走つて走つて走つて走つて、一気に街道に出て、そこからも休まず走つて鏡の屋敷に辿り着いた。

やつして一日ぶりに自分の部屋への帰還を果たしたのだった。

部屋に帰ってきて、母親に無断外泊の件を適当に弁明して、コー
ヒーを飲んだらもう普通に落ち着いてしまった。

我ながらいつたいなんなのかと思ひ。心が弱すぎるから、あんな
ことで逃げ出したりするんだと理解はできるけれど、だからといつ
てなにをするつもりもありはしなかった。

今は金貨と精霊石とギルドカードを机に並べている。

シローラーさんとレベッカさんから、事実上逃げてしまった件
については、ひとまず自分の中で保留としていた。バイトば
つくれ経験多数の俺にすれば余裕でした。

……もう少し落ち着いて、自分のなかでの感情を噛み砕く」と
ができたらまた挨拶に行くことにしよう。

いよいよ、これから異世界での商売について考える。

今、手元にある資金は、異世界の金は金貨が10枚。あと一応換

金できるらしい精霊石がひとつ。日本円はコソコソ貯めた虎の子の
87万円。

「この資金でつまご」と商売をはじめたいわけだが……。

しかし、実際に商売を始めるとなると、まずは誰かしらか事情の
知る協力者がいないと辛いものがあるんだよな。いちいち記憶喪失
だからとか言い訳しながら情報収集するのに疲れたつてのもあるし、
なにがあつたときのためにボディガードも欲しい。

剣士の天職があるから向こうで修行するつて手もあるけど、生兵
法は大怪我の元ともいうしな。やめておいたほうがいいだろ？
剣は欲しいが。

身を守るにはやっぱ傭兵でも雇うのがいいのかな？ でも傭兵つ
てのもなあ……。なんか裏切られて後からバッサリ！ みたいなイ
メージがあるしなあ。

傭兵なんかより、神官ちゃんとかがアルバイトでやってくれない
かなあ。「ここのれも仕事のうちだよ。だよ」とか、いろいろ
楽しそうだけどなあ。

そうだ。エルフだ。

商売もいいけど、エルフのこと調べないとかん。神官ちゃんし
かまだエルフ見てないから、どれくらいの割合で街にエルフ住んで
るのかわからないけど、エルフ見つけてお友達にならないといかん。
なんなら金貨の1、2枚もちひつかせてでも……。

ハツ！ いかんいかん。

まあとにかく一度神官ちゃんのところに行つて、エルフ情報を聞
いたり、記念写真撮つたりしてこよう。そんでプロマイド作つてこ
つちで売ろう。隠し撮り写真集とかでもいいかもしねんな。1万部

くらいいわれるんじゃないかな。

ハツ！ いかんいかん。

あと活動拠点をどうするかも考えないといかん。とりあえずは鏡の屋敷でいいのかもしれないけど、屋敷の権利とかどうなってんだ。異世界のそういうのってよくわからんぜ……。いざれトビー氏にでも聞いてみよう。

そんで俺、エルフと新婚生活するんだ……。

とにかく、最初は異世界での足場固めをすることにしてよ。お金稼ぎ自体は向こうのほうが容易ではあります、軍資金も多め。

じつちでの活動は後回しだな。

……いや待てよ。

……じつちの世界ではまず種まきからやつておへか……。

俺は口を立ち上げると、こきつけの巨大匿名掲示板群にスレ建てするのだった。

【速報】俺たちの鏡が異世界と繋がった

1 : 名も無き妖精

今朝起きると部屋にある鏡が異世界へ繋がってたんだけど

なんかアドバイスある?

第10話 異世界金貨はプチブルの香り

- 2 :名も無き妖精
鏡叩き割つて寝ろ
- 3 :しまったーここは糞スレだ！
- 4 :名も無き妖精
異世界のお姫様の着替えシーンが覗けるんですね
- 5 :名も無き妖精
いいからはやく[真づらしう]
- 6 :名も無き妖精
この手のスレ何度目だ
雑談スレでやれ

～～糞スレ終了～～

7 : 孤独の俺 4n0i9329de

どんなふうに繋がってるのか詳しく説明してくれよ
見えてるだけなのか向こうにいけるのか
全身鏡なんか手鏡なんかでぜんぜん違うだろ

8 : 名も無き妖精

ネタにマジレスカコイイ

9 : 名も無き妖精

どんな風に繋がってるとか・・・

1本のスジに決まってるだろう

10 : 名も無き妖精

通報しました

11 : 名も無き妖精

1まだあ?

12 : 1

鏡から異世界行つてきました

鏡の向こうは中世の屋敷（廃屋）だったよ

そこにいた異世界生物の写真撮つたからうロシとくよ

今からもつと冒険してくる！

他にもなんか面白いもん見つけたら写真撮つてくるわ
<画像アドレス>

13 : 名も無き妖精

向こうに行けるって設定か

1が向こうに行つてゐる間に鏡割つておこしてやるよ

14 : 名も無き妖精
グロ貼るなボケエ

15 : 名も無き妖精
怖くて開けないんですが、どんな画像？

16 : 名も無き妖精
でかいゲジゲジ

17 : 名も無き妖精

ゲ WWWジ WWWゲ WWWジ WWW

どう見てもクモだろこれ

18 : 名も無き妖精
なにこれ？

19 : 名も無き妖精

あしそくね？
あしそくね？

20 : 名も無き妖精
ガチじじゃんコレ

21 : 名も無き妖精
1はPROCGクリエイター

22 : 名も無き妖精

<<21

よかつた・・・・・脚の多い巨クモはいなかつたんや・・・

23 : 孤独の俺 4 n o i g g 3 2 9 d e

やけに展開早いな！
気をつけて行つて来いよ！

24 : 名も無き妖精

さつそくこのクモ擬人化しようぜ！

25 ; 名も無き妖精

異世界の蜘蛛だから
異^いく
蜘蛛^{アシ}たんですね

26 ; 名も無き妖精

イクツ！イクツ！イツちゅうー

27 ; 名も無き妖精
いい加減にしろよ

そこはアナザーワールドのスパイダーだから
アナルちゃんだろう

28 : 名も無き妖精

なぜそうなるwww

「こんな調子でレスが続していく。

よかつた、アホばっかりで。

とりあえずスレのほうは適当にレスしながら運用するとして、写真が足りないから次はちゃんと撮影もしなきゃな。

今日は異世界には行かないことにし、いつの世界のことを整理することにした。

オクで出しているものは一度すべて引き上げておく。幸い入札入ってる商品がなかったから助かった。

親にはちょっととテ力い仕入れ先を開拓したからしばらく留守がちになると言つておく。まあそれで嘘ではないからな。

あと、部屋には絶対入らないように釘を刺すことも忘れない。まあ、母親にそんな釘を刺してもまさに又力釘なんだけどな。入つてくるときはどんどん入つてきちゃうだろ？。普段は鏡には布でもかけて隠蔽しこいつ。

次は金貨について調べた。

まず金貨の重さが1つ40グラム。本物の金、つまりこの世界の金と同じ金属元素で且つ純金製なのだとすれば、今の大体の相場の1グラム4000円で換算したとして、なんと16万円にもなる。10枚で160万円だ。まあ、これはあくまでも超樂観的な試算だけれどもな。

もしもこの金貨を売るとして、そもそもこんな正体不明な品がオクで売れるのかという心配があつた為、ネットオークションで「金貨」を検索。

……あ、ダメだコレ。

出品されているものは、当然といえば当然か、正規品（信用ある機関で発行された保証書付きの金貨のことね）ばかり。

中には胡散臭いものも出品されてはいるんだけど……。と、いろいろ見てみると添付画像に興味深いものを見つけた。

ゴールドテスター。

金の持つ運動エネルギーを電気化学的に演算してうんたらかんとかで、金の含有率を調べられる便利な機械なのだそうだ。こんな便利なものがあるとは、と検索をかけてみたら驚きの24万円。高ければ……。

しかし、これがあれば24カラット（純金）まで計測ができる。この金貨が何カラットかはわからないが、仮にこれで計測して24カラットなら、相當に美味しい。とりあいず、機械を持つてそうな金買取センターにでも持つてみてみよう。

次は精霊石。

無加工の宝石のような青い石だ。つーかラピスラズリの原石なんじゃねーのかなコレ。ブラック企業にいたころ数回扱ったことがあるわ。

精霊石っていうからには、特別になにか効果があるのかどうだかわからないけれど、ただのラピスラズリの原石だとしたら価値としては大したことない。サイズも小さいし。

そういうえば、ショローさんの手にあった石は青くなかった。もし、お導きをクリアするたびに宝石の原石がもらえて、もらえる石がランダムだった場合、「当たり」の石に当たつたらすごいぞ。石のサイズはだいたい拳大だけど、もしダイヤモンドでこのサイズの石だつたら「億」もあるで……。

そんなでかいダイヤを売れるツテがあれば話だけどなー。

とはいえる精霊石は宝石なのか、それとも魔法の石なのか、ちょっと情報が足りないのでこれも一旦保留として、まずは金貨の価値を調べるために金貨一枚を握り締めて家を出た。

家の軽自動車に乗つて隣町の金買取センターに向かつ。隣町にしたのは、売ろうとしている商品があまりに出所不明で怪しいからだ。まあ、とりあいはずまだ売る気はないんだけどな。一応の用心つてやつだよ。

金買取センターは、質屋然としており、表からは中の様子がわからぬ。こういう店のほうが出所不明な貴金属とか売りやすそうではあるな。駐車場に車を止めて、サッとに入る。

窓口の店員に、金の買取を頼みたいと金貨を見せる。

たんたんと検品してから件のゴールドテスターを取り出す店員。固唾を飲んで見守る俺。頼む！ 頼むぞー！ 24金来いー！

「お待たせしました。こちら24カラットの「ゴールド40・3グラムですね。本日の金の買取金額がグラム3821円ですから、査定額は多少色を付けていただいて、「チラになります」

154000の数字を出した電卓を提示する店員。

キタ――――――! 24カラット!
実はせいぜい18カラット
くらいかな? と思つてたのに純金!
純金ですぞ――!!

……ついつい熱くなってしまったが、さてどうする。売る気は正直なかつたが、思いのほか良い金額が出ちゃつたぜ。このまま売つてしまつても構わないが……。

……ま、いいか！

売っちゃおう！ そんで無駄使いしよう！

事務的に免許証の提示が求められた以外、なんの詮索もなく買取りは終わった。今俺の手には154000円がある。ネットオクで1ヶ月がんばつても純利益でこの額が出るのは稀だ。

もつホントに異世界との交易で生活するしかねえ……。異世界怖いとかもう言つてらんねえ……。

その日はその後、ラーメン屋でトッピング全部乗せ大盛り味噌ラ

一 メンを食べて（なんと餃子も付けた）、スーパー銭湯でひとつ風呂浴びて、缶ビールを買って帰つて晩酌して寝た。

いやあ、本当に贅沢つて良いものですねー！

え？ セコイ？

2年も一ートしてるとこなんなんでも大贅沢なんだよー！

次の日、朝5時に起きた俺は、昨日のうちに洗って乾かしておいた異世界服を身にまとい、向こうに持つていくものをバッグに詰め込んだ。

まずは、ナイフ。ボウイナイフはショローさんにあげてしまったので、あとは中型か小型のナイフしか手元にない。昔、冗談で作ったククリナイフもあるが、あれはまだ未完成のまま放置しているし……。

なので、中型のなんの変哲もないシースナイフを1本だけ持つことにした。

次に金貨を一枚だけこっちに残して、残りの8枚をバッグに入れる。あとは、精霊石にギルドカード、デジカメ、救急キットにチリ紙、ハンカチ、タオル、お泊りセット（歯ブラシとか下着の替え）、非常食に、手持ちの宝石の中から数点。

まあ、こんなもんか。

お泊りセットを用意したのはアレだ。宿泊代がどれくらいかかるけど、向こうの宿に泊まってみるつもりだからだ。

手持ちの宝石は、安いものからイミテーション（模造品）、ちょ

つと高いものまで、全部で20数点。ジュエリースに入れて持つていく。

Jの宝石は例のブラック企業で働いていたころに手に入れたものだ。ああ、そういえば俺がどんな職種の仕事をしていったかまだ話していなかつたな。

ハローワークの楽しげな求人募集に釣られて入ったその会社は、一口で言えば宝飾貿易業とでもいうもので、やつてることはけつこう幅広く、宝石や絵画、毛皮やらの輸入輸出。絵画や宝石の営業販売、各種イベントの企画運営なんかが主な業務だった。

俺はそんな中、宝石の販売員として割り当てられたのだが、ノルマは月200万円、残業代なし、休日出勤手当てなし、朝礼長い、飲み会の強要、怒号に叱咤、さらに社長の顔がクドい、などなどブラック丸出しなその体质にすぐに辟易してしまった。

ボーナスが現物支給でしかも、宝石か毛皮か美術品が好きなから選んでいいぞ！などと言われた時は、マジで辞めると誓つたもんだつけ……。やっぱボーナス年4回とかいつ会社にホイホイ入っちゃダメってことだつたんだな……。

まあ、でもあんな会社にでも入つてたから宝石学者なんて天職があるんだろうとは思つけど……。もう、2度とあんなところでは働きたくないものだ……。俺が辞めてから暫くして脱税で摘発されたつて噂だけど、どうなつたのかなあ……。

それはさておき、異世界だ。ひとつと出かけよう！

そしてやつてきました異世界。

これからエリシエの街に向かうわけだが、距離がけつこつしんどいんだよな。移動手段つーと、馬くらいしか思い浮かばないけど、馬なんて乗つたことないしなあ。自転車つてわけにもいかないだろうし……。

剣士だの詐欺師だのなんて天職いらないから、騎手の天職でもあれば良かつたのに。むしろこれから増えないかしら天職。神官ちゃんにそういうこともあるか聞いてみるかな。

なんてことをウダウダ考えつつも、シエローラさんと出くわさないよう気に配り歩き、エリシエに到着した。

鏡の屋敷から歩いたり小走りしたりして、およそ1時間半。歩く速度がだいたい時速6kmだとして9kmくらいか？ 実際はもう少し短いだろうが、なんにせよ5km以上か。なんらかの移動手段を確保したいものだな。

エリシエの街は、昨日と同じように活気に満ちていた。

俺は一直線に神殿に向かった。目指すは神官ちゃん！ エルフの神官ちゃんとですぞ！（そういえば名前聞いてなかつたな）

「今日は神官様はお休みだよ」

デジカメ握りしめて勢い勇んで神殿に飛び込んだ俺に無慈悲な言葉を投げ捨てるカボツチャさん（仮名 推定58歳人間女。髪型がカボチャぽい）。

「では、神官さまをお願いします」

「だから今日は神官様はアレの日だからお休みなんだよ。また明日来るんだね」

ガーンだな。出鼻をくじかれた。

……つか、今アレの日つて言った？ あのオバサン、アレの日つて言ったよね。アレの日つてつまりアレの日つてことなのかな。エルフでも月に1回あるのかな。いや、またよ……、エルフはあまり性的欲求が強くない種族と聞くからな……、その反動で半年とか1年に1回、その……強烈な発情期的なものが来るって昔なんかのノベルで読んだ！ それだ！ このフラグ逃せない！

「…………どうしても火急の用事でしてね……。取り次ぐことはできませんかね？」

「そう言われてもねえ。アレの日のエルフ族がどこに行ってるかなんて、よほど近しい人間じゃないと知らないと思うよ。当然ここにはいないし」

よし！ 探そつ！ 年に1度の発情期で苦しんでいた神官ちゃんを助けられるのは俺しかいない！ フラグ回収するしかない！！

……しかし、考えてみるまでもなく探す手立てはなかつた。なんの取つ掛かりもないのに、ほぼ完全に他人のエルフちゃんを探すつてのは無理がある。さてどうすつかと思つたが、ふと、例のスキルのどれかが使えるのではないかと思い当たつた。

ダメ元でやつてみるか！

天職板を出す。

異界の賢者のところにあるスキル「異世界旅行」「世界の理」そして「真実の鏡」。

真実の鏡は使えば即クエストクリアになるから、これはどうせよ早めに使おうと思つていたが。

さて、どうだこのスキルってどうやって使うの？ 試しに板を指でクリックしてみたが抵抗なくすり抜けちゃうばかり。やっぱ天職板出すのと同じようにやるのかな。

まず、異世界旅行を試してみる。試すといつてもなんだか全然意味が解らん。「異世界旅行異世界旅行異世界旅行……」と念じるのみよ。

……はい。なにもおこりません。

さ、次々。「世界の理世界の理世界の理……」と念じるのみよ。

……はい。なにもおこりません。

大丈夫かこれ。なんか前提からして間違ってるのかな。説明書が欲しいにやー。

氣をとりなおして、次。「真実の鏡真実の鏡真実の鏡……」とダメ元で念じてみた。

念じてすぐに、天職板の内容が一瞬で切り替わった。ページをめくるよひ。

切り替わった天職板にはこう刻まれていた。

【種別】

?

【名称】

?

【解説】

?

【魔術特性】

なし

【精霊加護】

なし

【所有者】
ジロー・アヤセ

「なんぞこれ……」

などとボンヤリングしてる暇もなく輝きだす俺。

ああそうだ、眞実の鏡使つたからクエストクリアなんだな。

ポンッ

とまた、天職板が可愛い手乗りサイズの妖精になる。

「よおよおー、なんだよその謎の機械はよ。鑑定するのはいいけど

もつちゅうとワタシ好みの奴にしてくれよな。あ、コレお祝いの品
な。今回は簡単だつたからショボイやつだぜ。売つてもいいぞ。じ
やあな。また世のため精靈様のためにガンバッテくれよ」

ポンツ

そしてまた手に石が乗つてゐる。相変わらず言ひことだけバツと
言つて帰るやつだなあ。

順を追つて考えると。

まず真実の鏡は、どうやら鑑定スキルのようだ。妖精がそういう
ていたし、そもそも妖精が鑑定をしてくれているようだし。

今回鑑定したのは、俺が手に持つていたデジカメだらう。あの妖
精が鑑定しているみたいだから、異世界のハイテク機器の「デジカメ
は鑑定しきらなかつたんだらうな。

しかし、これは妖精の性能によるが、ものすごく有用なスキルだ。
異世界の商品を扱うともなれば無一のものだと言つてもいい。これ
からどんどん使っていこう。グフフ。

精靈石はコブシ大の透明でシャープな両剣結晶体だった。

クオーツ

「水晶だなこれは。ハズレか。せめて色付きならよかつたがなあ
…」

「ちよ、ちよっとあなた！ それお導き？ 今達成したの？」

突然興奮して食いついてくるカボッチャさん（仮名）。まあ、確かに外から見ればなんかボンヤリしてるな、と思つたらクエストクリアしてた、みたいな状態だらうからな。

「あ、はいそうですけど、なにか？」

「なにがもらえたんだい？」

「えつと、コレですね」

そう言って、水晶を見せる。

「ほー。いいのに当たったね。これ、真実の鏡だよ」

「真実の鏡ですか？」

「占いで使うからね。そう呼ばれてるんだよ、この石は」

……なるほどね、精靈さんもエスプリが利いてらあ。

水晶はタオルに包んでバッグにしまい、神殿を出た。

結局のところ神官ちゃんを探す方法はなさそうなので、神官探しはスルツと諦めた。

人間諦めが肝心だよな。気持ちの切り替えの速さで仕事に差が出るつてばっちやも言つてた。

さて、神官ちゃんがいないとなると、あと事情を知つてアテになりそなのは商工会議所のトビー氏か武器屋のオヤジだが……。トビー氏には俺レベッカさんの甥つてことにしてあるんだよなあ。嘘だと見破られてそうではあるんだが……。

でも、ま、トビー氏にはそれ以外にも聞きたいこともあるし、商工会議所に行つてみよう。

商工会議所に辿り着いて今更ながら気付いたが、もうギルドカード持つてるんだし、無理にトビー氏に取り次いでもらわなくとも一般職員（できれば女性希望）でも全く問題ないんだよな。

よかつた、あんな眼光鋭い男とマンシーとか無駄に寿命縮めるわ。

というわけで受付でギルドカードを出して、これから商売を始めるにあたつての相談に乗つてもらいたい云々を伝える。

そういうことでしたら、と受付嬢（セミロングの長いオカチメンコといったとか。推定年齢26歳）がそのまま相談に乗ってくれるそうだ。商談席のようなところに案内され、そこで話をすることになった。

「……とこつわけで、この街に来る途中で暴漢に襲われましてね、

ちょっと記憶が飛んでる部分があつて、いろいろ曖昧になってるんですよ。なので、基本的なところも聞くかもしれませんがよろしくお願いします」

「まあ……、大変でしたのね。私にわかるとしてしたらなんでも答えさせていただきますわ」

「この記憶喪失設定を話すのも、もう手馴れたものだ。つか流れるように嘘が出てくるのは、俺の素養ではなくあくまで詐欺師の天職のせいだと思いたいね。本当の俺は素直な良い子です。

「まず、この街か郊外で家を持ちたい場合などに問い合わせれば良いのでしょうか？ この街で商売をやるのは良いのですが、やはり拠点がないと、いつまでも宿暮りしどうわけにはきませんのではね」

「家ですか。街でならば、ギルド所有のものもありますし、個人所有のもので店舗くたなこ^へを募集しているものもござります。郊外では土地所有権が曖昧な土地が多いですから、建てた者勝ちなところがあるというのが実情ですわ。それと郊外でも、村に住むのはあまりお奨めできません。村のルールに縛られてしましますし、はつきりと言いますと商人にとつては足枷になりますから」

「なるほど……。たとえば、村からは離れている、誰も住んでいない屋敷なんかの場合はどうなりますか？」

「それは廃屋ということでしょうか？ 場所によりますが、廃屋となつて長年ならば、そこに住んでしまつても構わないと思いますよ。修繕にはそれなりかかると思いますが……。すでに田星を付けて屋敷が？」

「ええ、まあ。……えっと、では僕がそこに住むと決めた場合、そこが僕の家だということを保証する書類のよつなものをギルドで発行してくれたりなんかはしてもらえないでしょうか。廃屋とはいえる手にすむと云ふと不安ですし、なにより高いお金を掛けて修繕してから、ここには俺の家だから帰せということになつても困りますし」

と言つて、さすがにそれだとわからないからと、上司のところに聞きに言つてしまつた。ハツキリ言つてあの屋敷が一番の懸案なんだ。あの家をまず自分の家にしてしまわないと、枕を高くして眠れない感じがある。

こう見えても俺つてば、アツトホームな異世界生活夢見ちゃつてんだよね。俺がいて……、エルフがいて……、暖炉なんか灯しちゃつて、シチューなんか食べちゃつて……。ベッドはクイーンサイズを買おう……。

だから大事。家大事。

でも書類つてのはあまりに現代的な考え方だつたかな？ ファンタジー世界なんだからテキトーでもよかつたのかもな。

受付嬢が向かつた方向を見ると……、わあお、上司はトビー氏だわ。そんでトビー氏連れてきちゃつたよ。俺だと確認して微妙にしかめつ面だよトビー氏。

挨拶もそこそこに席について、おもむろに地図を広げるトビー氏。

「話はだいたい聞いたよジロー君。で、その屋敷とやらばどこにいるんだい？」

地図はエリシス近郊の地図らしく、南の海に面したエリシスの街と、北と西に続く街道なんかが描かれている。

「えつと、この地図だとシエローベンの家は……、ここですか？
とすると村がここだ、街道がここだとすると……、このくんですね」

「つむ……？ そんなところに廃屋敷などあつたかな……？ ミサキちゃん、ちょっとオルセルを呼んで来てくれ。やつはヤーツト村出身だ」

はいと返事をして席を外す受付嬢。ビュザニアサキをことばいつりしい。ずいぶん日本的な名前だな。

オルセルさん（推定年齢32歳のオジサンオーライサン。人良さげ）
はすぐに来た。

「オルセル。ここに何年も放置された屋敷があつてな、この青年が
そこに住みたしそうなんだが、こんな場所に屋敷などあつたか？」

トビー氏が聞くと、しげしげと地図を眺めるオルセル氏。

「んん？ ここですか？ ……『冗談よしてくださいにや。そんな場所にやなンにもありやしませんよ。ガキのこりよくそちらで遊んだもンですがね。廃屋なんかあつたら格好のガキの遊び場になつてますよ。それに村からも田と鼻の先じやあないですか。よほど最近建てた屋敷ならば、俺が知らないつてこともあるかもしませんがね』

「……だ、そうだ。ジロー君。そもそもこの辺は森が近いからな。
郊外に住む者はショローのような物好きを除いては、ほとんどない
い。」

「だとすると僕が見たあの屋敷は？」

「なにかを見間違えたかしたんじゃないのか？まあ、もしもそこに本当に屋敷があった場合は……そうだな……、住んでしまっても構わないよ。証明書を発行してもいい。どうせ君にしか見えない屋敷なんだからね」

と言つて笑顔になるトバー氏。

これ絶対馬鹿にしてるよね。ミサキさんもオルセル氏も苦い表情してるし。

クソッ、ビリじてこうなつた。

でもまあ、冷静に考えれば、証明書も発行してもらえるし、あの屋敷の存在もいまいち誰にも知られていないようだ。

結果だけを見れば最高じやん。気にしたら負けかなと思つている。

「ありがとうございます、トバイアスさん。では、その証明書はいただいておきますよ。今度ぜひ遊びにきてください」

「ああ、やうさせてもらうよ。証明書はすぐこなじめる。ちょっと待つていてくれるかい？」

お互にドヤっとし合ひ俺とトバー氏。茶番だわ。

トバー氏とオルセル氏が持ち場に戻つていき、また受付嬢と2人になる。

とりあえず家の件は、これでよしとして、まだ聞かなきゃならぬことが沢山あるのだつた。

店の持ち方。店のだいたいの値段。お奨めの宿。宿の値段。買取所のこと、この街のこと、それにこの世界のこと……。

でも、それはさておいて。

「護衛を雇いたいと思っているのですが、どうで雇えますかね？」

「護衛ですか？ ハンターギルドなどで冒険者を護衛として雇うこともできますが割高ですわよ？」

「やはりそうですねえ。普通、商人の方はどうして雇うんでしょうが。冒険者を雇うのが一般的なんですか？」

「普通は奴隸が多いんじゃあないでしょ？ が。商隊を組むよつな場合は護衛を雇う場合も多いですけれど」

「奴隸……ですか。しかしイザとこに奴隸が命を掛けて働きますかね？」

「奴隸の契約は、正式な精霊契約ですから大丈夫ですわよ」

「精霊契約？」

「精霊との間に交わした契約ですわ。これを反故すれば、即ち精霊の祝福を失うことを意味しますから。まして、護衛奴隸は他国で戦士をしていた者が多いのですよ。彼らは敵に背を向けて逃げ出したりはしませんわ」

なるほど。案外良いもののようだぞ奴隸。
買ってみてもいいかもしないぞ奴隸。

そう思つたらだんだんその気になつてきました奴隸。

でも一生面倒見るとか無理くさくな奴隸。

だいたい値段どれくらいするんだ奴隸。

出来れば女の子がいいな奴隸。

もつと言つと若い子じやなきやな奴隸。

正直に言つとエルフだつたら最高だ奴隸。

「奴隸つていくらぐらいするんスか？」

あ、喋りが雑になつてしまつた。スカ？ ジやないよ、スカ？
じや。

「私はあまり詳しくありませんが、ピンキリだと聞いてあります。
安くとも金貨10枚程度はするはずですが……」

「なるほど……」

安つす。

どんな人だつたとしても金貨10枚で、多く見積もつて150万

円じやん。

人生安つす。

さてはて、詳しく述べるためには実際に奴隸を売つてみるとこゝに行つてリサーチするしかなかつ。

奴隸商とか俺の人生はじまって最大の冒険になるで……。

第11話 異世界生活への始動の香り（後書き）

全国1000万の奴隸ファンの方おまたせしました。よつやく次回
奴隸のターンのようです。

第1-2話 エルフ奴隸は金額的に無理な香り

俺があの屋敷（鏡の屋敷ね）の正式な住人であるという証明書は、かなりガチな感じにトビー氏が作成してくれ、ニヤニヤしながら渡してきた。

羊皮紙に異世界言語でなんらか書いてある書類である。当然読めないので、まああの男のことだ仕様に問題があつたりはしないだろ？

ちゃんと懲懃な感じに「お手数かけましてありがとうございます」と言っておいた。「いえいえこれもギルドの仕事ですから」と笑顔でトビー氏も応対していたし、何の問題もないぜ。

……いずれガチで屋敷に招待してやろう。どんな顔するのか見物だな。

その後、その他の聞きたかったことを一通りミサキさんに聞いてから、俺は商工会議所を後にした。次の目的地は、奴隸商館である。

もちろん奴隸を買えるほどの金はないんだが、奴隸商行って、どんなもんだかりサークしなければならんのだ。……が、実際には腰が引けるなあ。どういう風に売ってるものかもわからないし、現代日本人にとつて奴隸とか……、なんつーか真っ直ぐ向き合える気がしないつーか……。

でもこっちで活動するなら、護衛、できれば、こっちの世界のことを教えてくれるアドバイザーにもなってくれる人が必要なんだよ

な。文字も読めないし……。

奴隸商館の場所はミサキさんから聞いていたので迷わず辿り着いたんだが……が……。これは入りにくいわあ……。

商館は白壁の窓のない2階建てのきれいな建物で、入り口は閉ざされ、看板らしきものはあるものの中の様子は伺えないという、ひつじょーに入りにくいものだつた。

非常に入りにくいつていうか……、これに1人で入るの？ 1人で廻る寿司屋にすら入れない俺が？ 「1人焼肉」以上に高難易度なんですけど。

それに、どう見ても会員制つづーか、一見さんお断りつて感じのオーラが剥き出されちゃつてるし……。上級者向けすぎると……。

でもなあ……。

異世界で商売するなら、乗り越えなければならぬハードルなんだよねこれ。貿易とは戦争なのだよ！

でもしかし、素直に扉を開けて入っていく勇気はどうしても出なかつたので、誰かが出てきたらお見送りに店のもんが出てくるだろうから、それを捕まえる作戦を探ることにした。さすが俺小賢しい。

店の前を不審者よろしくうろつく俺。

入ろう！ と決めた勇気が時間をおぐ」とに萎えていくのを感じながら、しかしそのときが来たら飛び出して、ああ言つていついつて……とシミュレーションしていた。

15分もうろついたころだろうか、はたしてついに店の扉が開い

た。

扉から出てきたのは、20代中程くらいかの銀髪が印象的な貴族風の男だった。店員の見送りもなく普通に店から出て歩いてくる。丁度俺がいる方向に。

店員の見送りがないとはアテが外れてしまったな。次を待つという手もあるけれど、奴隸商館なんて、そんなに客が多いわけでもないだろうしな。それともこのお兄ちゃんに話かけてみるかな。

それに、ひょっとするとこの人が店員の可能性もあるしな。

俺は思い切って話しかけてみることにした。いずれにせよ、奴隸のことが少しでも聞ければいいのだし、あの店に入るよりはハードルが低かるう。

「あの……、ちよっとお時間よろしいでしょつか？」

「はい？　どうかなさいましたか？」

にこやかに返事をしてくれる貴族風の男。お供もなしで単独で歩いているし、貴族風の一般人なのかな。でも顔付きというか、オー

「うと、ううか、正直あんまり一般人ぽくないけどもな。

「いえ、今そちらの商館から出でてくるのが見えたものですから、ちよつと教えていただけたらな、と思いまして……。あ、僕はジロー・アヤセという者で、商人をやっております」

「商館に御用で？ 今は営業中のはずですから行つてみては？」

「いや、実は、恥ずかしい話なのですが、僕は奴隸を買ったことがなくてですね、あの門構えに怯んでしまいました。ですから、よかつたら少しで良いので奴隸について教えていただけたらな……と」

「そういうことでしたか」

一応納得したらしい貴族風の男。どうやら店員ではなかつたようだ。勢いに近い形でこの人に声を掛けちゃつたが、やっぱ素直に店に行つとけばよかつたかなあ。でもまあ今更だな。

「それでどういったことが聞きたいのです？」

「護衛のための者が欲しいのですが、相場としてはどれくらいのかなど。種族や性別でどの程度変わるのがなんかも教えていただけたら……」

「相場という話ですが、まず、奴隸に相場というものはありません。種族、年齢、性別、容姿に経歴、天職によって大きく変わりますから。あなたがどのラインの人員を求めているかによりますが、奴隸として最低の部類『人間の60歳の男性、醜男の元山賊の下つ端で

天職なし』といつ条件ならば金貨一枚でも買えますよ

淀みねえなこの人。詳しいし。スラスラ教えてくれるし。この人に聞いたのは正解だつたようだな。もつといろいろ聞いておいつ、そつじょつ。

そして調子に乗ってしまった。

「希望を言つなら、エルフの若い女性で剣と魔法が使える子が欲しいんです」

「……正気か貴様」

あつれー？

「なにかおかしかったでしょうか。……すみません。実は僕、記憶を一部失つていましてね。なにか気に障つたのであれば謝ります」

「ああ、そういうわけでしたか……。いえ、エルフの奴隸が欲しいとはなかなか度胸がおりになるな、と思いましてね」

貴族風の男氏によると、エルフの女性というのは奴隸の中でも最上位に君臨するものらしく、買えるのは王侯貴族か大商人くらいのものらしい。当然値段は天文学的な数字。

しかも予約制。

そうでなくとも、奴隸になるエルフ 자체が少ない。

普通は、莫大な「借金」をしたか「犯罪」を犯したか「敗戦国」から連れてこられたのどれかで奴隸に身をやつすらしいのだが、借金で奴隸になつたり、犯罪で奴隸になつたりするエルフはほほいない為、自ずと敗戦国奴隸のみとなるそうだ。

しかし今は戦争は膠着状態。当然新規の敗戦国奴隸は入つてこない。だからエルフの奴隸は余計に少ないという寸法。

次に、エルフは他の種族と比べても寿命が長い。
いや、大事なところは見た目の若い期間が長いところなのだ。性的な意味で。貴族なんて自分の息子に引き継いだりするらしいんだよ。性的な意味で。もつやだこの国。

次に、エルフは精霊魔法が使える。

精霊と共にこの国では、精霊魔法を使えるものが近くにいるつてのは、特別な意味があることなのだそうだ。精霊魔法は精霊と感応して起こす奇跡なんだってさ。これは魔術師の使う魔術とは全く別の概念なんだそうで……。

最後に、エルフを奴隸にするつてが、すごいステータスなんだとか。

民草にはちょっと嫌われるらしいけどね。エルフ尊敬されてるから。でも値段とか凄いし、商人でエルフの奴隸持ってるっていうと一流の証明になるんだと。

だが

「そりだつたんですか……。でも買える」とせ買えるんですね。そこの商館でも予約つてできるんでしょ?」

「今の話を聞いていて、それでも買う気なんですか？正気を疑いますよ……。それとも、大商人の息子かなにかなんですか？」

「いえ、純粹たる一個人ですけども。でも夢が金で買えるなら、目指してみたいですね。……それに、僕はいずれにせよ大商人になりますから。エルフを買うのが先になるか後になるかの違いだけですよ。ま、今はしがない駆け出しですが」

「…………夢、ですか」

難しい顔をして沈黙する貴族風の男。

そうさ、夢さ。叶うはずのなかつた夢さ。地球に3億人くらいいるはずのエルフファン全員の夢さ。

それにエルフちゃんも俺のところに来たほうが幸せに決まっているね。なぜならおそらく俺が世界で一番エルフを愛しているからだ！ たとえそれが俺の独りよがりであったとしてもだ！

沈黙していた貴族風の男が俺に向き直って言った。

「では一つ勝負をしまじょうか」

「勝負ですか？」

「勝負です。あなたが勝つたらエルフをお譲りしまじょう

「ハア……、て、え？ マジで？」

「あんまりよくわからない話の流れに。

つに素でマジで？ とか言ってしまつ俺です。

第1-3話 異世界勝負は無謀な香り

「自己紹介がまだでしたね。私は御用商ソロ家のエルタ・ソロと申します。第1自由都市マリショーラの者ですが、今日はエリショに奴隸の納品をしに来ましてね。丁度これから奴隸をこじらせて運ぶところだつたんですよ」

「御用商……つてことは、國のお抱えの商人さまつてこと? やつべ、超大物なんじゃね。

「奴隸商館の店員かも!? なんて思った自分をぶん殴つてやりたい……ってほどでもないか! エルフ扱つてるなら結果オーライだ!

「はい。それでは、今日こじらてエルフのフリーの奴隸を連れて来てもらつことなんですか?」

「いえ……、先ほども申しましたが、エルフの奴隸は予約制ですね。私のところだけでも8名待ちといつ状況ですから……。今の国的情勢で正規に予約待ちをするなら、最低でも5年は待つことになるでしょうね」

「8名待ちが多いのか少ないのか判断付きかねるけども。値段すごい高いみたいだし、ボチボチ多いことなんだろうな。厳密にはいくらくらいするんだろうな。」

しかし、5年待ちとか凄いな。どんだけ人気なんだよエルフ。俺が世界一エルフ愛してるとか、撤回しなきやならないかもしけないほどのエルフ人気だよコレ。

「そんな状況であるのに、勝負？　に勝てば僕にエルフを譲ってくれるんですか？　勝負の内容にもよりますけど、あ、でもお金はすぐには用意できませんよ」

「いえ、あなたが買った場合お金は結構です。そのかわり、あなたが負けた時はそれ相応のペナルティを負つていただくということです？」

「どうです？　つたつて内容がわからなきゃどうもないんですけお……」

「だいたいこういう「うまい話」ってのは、必ず酷い結末になるものだよね。教訓だらけの世界で育つた日本人を甘くみんなさんなよ！　ブラック企業じゃむしろ「うまい話」で騙す側だったんだよ！」

「でもいちおう話は聞いちゃうー。どういう勝負かわからなければ、どうかに抜け道があるだらうからな。ひょっとするとブツコ抜けるかもしれんし。

「ではまず勝負の内容を教えてください。あまりにも勝機のないものなら、さすがに夢が掛かっていても乗るわけにはいきませんから」

「勝負内容は、簡単に言えば贈り物対決です。相手はエリシエの市長。贈り物を相手に気に入られたらあなたの勝ち。それ以外なら私の勝ち。簡単でしょ？」

「簡単でしょ？　じゃないよ。賄賂じやねーか。ワイヤロ

しかも贈るの俺だけってことは、贈賄でアレされたら俺だけナニされるつてことじやねーのコ。さりげなく酷い提案だな」

「なるほど……。それは僕、ジロー・アヤセ個人として市長に贈り物をすればよいのでしょうか？」

「そうなりますね。私が市長に渡りを付けますから」安心へださい「……つまり、エフタさんに紹介された僕が市長に贈り物をして、市長がそれを気に入れば僕の勝ちだと。そういう勝負ということでしょうか」

「そうなりますね」

ソロ家とエリショとの関係がイマイチよくわからないが、贈り物作戦がうまく行くならエルフくれてやつても良いからこの辺みがあるということなんだろうな。

一応俺の名義で贈り物をするけど、うまくこつたら皿みはエフタ氏が総取りする……と。

そういう話だなコレは。汚いさすが御用商汚い。

しかし、下手こじて変なものを渡せばアレされる可能性のほうが高い……と。もしくは市長が高潔な人物で賄賂が効かないとかか。そうでなければ、見ず知らずの俺みたいなのに、こんな話を持ちかけたりはしないだろうしな。

エルフが欲しいなんていう世間知らずをダメ元で使ってみようといつ話なのか……。

そもそも、この国における贈賄の罪の重さってどんなもんなんだろつか。一発死刑とかだとしたら、いくらなんでもギャンブル過ぎるなあ。

つまり、この勝負に勝つためには、まず市長にひいて調べあげて、市長になんらかの商売上の便宜を図つてもらえたるくらいの贈り物をする必要があるってわけだ。

そして失敗したら、あくまで俺が勝手にやったこととして、エフタ氏は俺を見捨てる。トカゲの尻尾切りっていうのかな、この場合も。

「うーむ……。どうなんだコレ。

「……僕が負けた場合のペナルティを教えてください

「あなたが負けた場合は……、そうですね。精霊石を10個いただきますようか。手持ちがなければ、これからあなたがお導きを達成するものを予約するという形でもかまいませんよ」

「…………精霊石10個ねえ。まだ精霊石の価値を調べてないけれど、昨日今日でもう二つもあるし、精霊石10個とエフタ氏とじゅうや釣り合いで取れてなさ過ぎる。

てことは、これは形だけのペナルティってことなんかな。失敗したら贈賄でアレでナニしちゃうんだろうから……。

それともそもそもがダメ元のお試しなんだろうから、エフタ氏的には精霊石の10個も取れれば元出なしで小遣い稼ぎくらいにはなるって考えなんだろか。精霊石なら取りっぱぐれのない債権としちゃ、優秀なんだろうしな。

それともなんらかの当て馬的なものとして利用とか……。

……考へ出せばキリがないか。

「どうです？ 勝負しますか？」

「その前に確認をさせてください。まず、エルフは予約制で手元にいないんじゃないんでしたっけ？」

「いえ、つっここの間ひょんなことから手に入ったエルフがおりましてね。予約の方々とは少々条件が折り合わないのに、まだ手元にありますよ。まだ若い美しいエルフの少女ですし。その点はどう心配なく」

ふむう。いることはいるらしい。

どうするかもっと詳しく聞くか。でも嘘並べられる可能性もあるし、現物を見なすことにはぜひともせよ信用しきれないし……。

でも「若い美しいエルフの少女」って聞くだけで、命を賭したギヤンブルでもやってみたくなるから男ってのは愚かだわあ。相手の思ひ壺だよ！

そして俺は命を賭けた勝負をすることにした。

こんな材料を天秤に掛けて、おそらく上手くやれると判断した

からだ。

でももし上手くやれなかつたら、なんとか屋敷まで逃げて、ほとぼり冷めるまで異世界は禁止か、泣く泣く鏡自体を売るしかなくなるかもしれないが……。

それでもエルフ少女がかかつてゐる以上、やるしかねえんだぜ。悪い奴隸商に捕まつたエルフ少女を助け出す俺とかつてこの上ない胸熱シチュだよね。これは惚れざるを得ない。

贈り物はエリシェ設立50周年のパーティで……とのこと。ハツキリ言つてハードル高いんだけど、ブラック企業のころパーティでの売り込みとかわりとやらされてた俺に死角はなかつた。職歴つて偉大だなあ。

エリシェ設立50周年パーティーは、「エリシェ設立50周年祭」の2日目の昼過ぎから開催されるそうだ。俺はそのときにエフタ氏に紹介されて市長に贈り物をする。そういう段取りである。
実行日の50周年祭まで、あと15日ほどあるのでその間に準備をしなければならない。ハツキリ言つてあんまり時間ないんだけれど、俺がんばるよエルフちゃん！

勝負の内容が口約束だけなのが気になつたんだが、当日にエフタ氏のお抱えのエルフによつて正式に精霊契約を結ぶんだとか。「逃げてもいいんですよ?」などと挑戦的なエフタ氏だったが、準備しきらなかつたら考え方をせてもらお。

最後にさりげなく「どうして市長に贈り物をするの?」と聞いてみたら「50周年のお祝いですよ」とシレッと答えたエフタ氏。じゃあなんでお前は贈らないんだよ。バカなの?死ぬの?

15日後に中央広場の前で待ち合わせる約束をしてエフタ氏と別れた。

さて、これからこの勝負に勝利するために打てる手をすべて打たねばならない。まずは市長についての情報収集。贈賄の罪の有無。50周年祭について。

細かいことを言えば、もつといろいろ調べることはあるが、到底1人では無理なので誰かに協力して貰う必要があるな……。

いろいろ考えたが、結局、ショローさんとレベッカさんに頭を下げて手伝つてもらうことにした。あのとき、逃げ出してしまったことも謝つちゃつて、協力してもらおう。これから鏡の屋敷に住むなら、近所さんになるのだしな。

第14話 精霊石は魔法の香り

「だいたいの経緯はわかつたけれど、どうしてそれを受けたのジロー? いくらなんでも怪しそうない? だいたいソロ家といつたら、本当に帝都でも有数の大商家なのよ? その人がお供も連れずにウロウロしたりするのかしらー? それにどうしていきなりジローにそんな勝負を申し込むのかしら。簡単な賭け事程度ならともかく、市長よ? エリショで一番偉い人なのよ? いくらなんでもおかしいわよ」

ガーツと面うレベツカさん。

冷静に考えれば確かにそうだ。つか冷静に考えなくとも変だ。

……なんで俺はホイホイと話を信じきつて勝負なんてすることにしたんだろう。商品とでもいふべきエルフも見てすらもいない。相手の身元も確認していない。

すべて自称ソロ家のエフタ氏の証言のみの話だ。

それともエルフ熱が高まりすぎていたのかな。恋は盲田ともいうけれど……。いやそれは関係ないか。

なぜかなんとかなるから勝負しなきやつて思つたんだよな……。

「それにねジロー。精霊石10個がたいしたことないなんてことはないのよ。人が一生のうちに得られる精霊石は普通20個前後。よほど精霊に愛された人でも30個程度なんだからね?」

うへん。2日で精霊石が2個も手に入っているから、一ヶ月に少なくとも5回くらいはお導きを達成して精霊石ゲットできるものかと思い込んでいたけれど……。

一生に20個ことは、10歳で祝福を受けたとして……、ひとつちの人の平均寿命はわからんが60歳くらいだとして、50年で20個だから……2・5年に1個か。10個だと、ハハハ、25年分だわ。

だからショローサンもカボツチヤさん（仮名）も俺がお導き達成したとき興奮気味だつたんだな……。

「精霊石の値段は、たぶんジローが想像しているのより、ずっと高いのよー？ 安いものでも金貨20枚はするんだから」

え、マジか。

超TAKEEEEEEE！

日本の金買取センターで一枚15万で金貨が売れたことを考えると、300万円……。車買えるじゃん。

お導きクリアするだけで、そんなボーナスが得られるなんて異世界人はお得だと言わざるを得ない。

まあ、向こうでの金の価値とこっちの金の価値と比べてアレしても意味ないんだけどもな。でもなあ、しかしなあ……。

「どうして精霊石が高いのかわかる？ 精霊石はそれ自体が精霊力の塊なの。そして、その力をエルフが精霊魔法で一旦還元することによって、石の種類によってだけ、いろいろな奇跡が起こせるのよ。使い道として一番人気があるのは『若返り』かしら。エリシウム

でも神官さまが精靈石の還元魔法の施術を請け負つて下さっているのよ？」

若返りて……。

そんなスペシャルパワーがあつたなんて……。

「これラピスラズリの原石や。たいしたことないわあ」 じゃな
いよ全く。300万でも安いわ。

「もし仮にそのHFTって人が本物で、本当に市長に贈り物をしな
きゃいけないとしても、それはそれで大変だわよ？ 市長は、ミル
クパールさんっていうんだけど、賄賂は受け取らない清廉な人物と
して有名だしね」

「別に賄賂といふことではないのかもしませんよ。贈り物を贈つ
て気に入られれば勝ちといふことですし」

「場所が他の場所ならねー」

あ、そうか。

パーティ会場なんていう、公衆の面前で商人からの贈り物を受け
取つてもらつて、さらに気に入るなんていう露骨な意思表示をさせ
なきゃいけないってわけか。

うわあ、なんで迂闊に受けたんだろうこの話。マジで逃げよつかな。

「あ、あとジローはやけに心配してるみたいだけど、物を贈つて罪
に問われるってことはないわ。だから、この話、本当に受けたるなら
精靈石10個渡すのは覚悟の上でチャレンジしてみるしかないわね

「贈賄 即 タイーホ」がないってのだけが救いつてわけなんだなあ。

話はちょっとさかのぼる。

俺はエフタ氏と別れてから、街で適当なお詫びの品を買つてショローセんの家に向かつた。

お詫びの品は酒にしてみた。

ひとつひとつの世界つてけつこう酒の種類多くて、ワインやビールだけじゃなくウイスキー やリキュー ルみたいなものも売つている。当然それはガラスの瓶に入つてるので、ガラスの生成技術もあるようだ。

家とか石作りが多くて雑なくせに案外技術力あるんだよな……。
それともただの食道楽文明なのかな。料理もおいしいし。

買ったのはウイスキーのような琥珀色の酒で、値段は85エルもした。ビールやワインのような樽売りのものは安いようだが、ビン

に入ったものは高級品という位置付けのようだ。

最初、イノシシ料理の件があつたので向こうに戻つて味噌でも買つてこようかとも思つたけれど、出所の説明をしきる自信がなかつたのでやめておいた。

2時間近くかかつてシェローさんの家に辿り着く。

うつかり昼時に着いてしまつ2人とも食事中だったが、昨日俺が逃げるよう立ち去つた件についてはまるで気にした感じでもなく歓待してくれた。

そしてまた飯をご馳走になつてゐる。

焼飯だ。
ヤキメシ

2人ともどう見ても西洋人な見た目なのに、食べてるもんは土曜日の昼にかーちゃんが作つてくれるような焼飯。
ヤキメシさすがに醤油味ではないけどな……。しかし、親近感沸くなあ。

食べ終わり、茶を飲んで一服してから、昨日の件を詫びだと酒を出した。レベッカさんは「若いのに氣を使いすぎよ」と言つていたが、シェローさんは有頂天だつた。そして早速開けようとしてレベッカさんに叩かれている。

ああ……、俺の中でだんだんシェローさんがおバカキャラになつていく……。

それから今日のエフタ氏のことを話し、手当では支払うので協力して欲しいと持ちかけた。

シェローさんは、「でつかい夢だなー」と能天気に酒瓶をさすり

ながら聞いていたが、レベッカさんはキヨトンとした表情でいる。どうか理解できない要素ありましたつけ？」

「だいたいの経緯はわかつたけれど、どうしてそれを受けたのジロー？」

そして冒頭の話の流れになつたのだった。

シロローさんは狩りの仕事があるとこりで、レベッカさんだけが手伝ってくれることになった。

本人曰く「危なっかしくて見てなんない」とこりとらしい。反論できるだけの材料もないでの、素直に厚意を受け取つておく。これもまた「お導き」かな? とも思つたが、もうそんなこと気にするほどのネンネちゃんでもないぜ。なんせ300万だしな。

そして2人で街に向かつたんだが、レベッカさんが「馬で行こうかー?」と語り、ドキドキ恥ずかしのタンデムで行くことに。

「じゃあ乗つて。馬は乗つたことは?」

颯爽と厩舎から馬に乗つてあらわれるレベッカさん。か……かつ
こいい。

やはり元傭兵。昔は馬に乗って戦つたりしてたのかな、乗馬のことはよくわからないが、手馴れた様子で俺の横に馬を寄せる姿に一切の淀みがない。

やっぱ騎手の天職欲しくなるな……。天職なくとも普通に練習すれば、これくらいできるようになるんだろうか。あと、馬も欲しい。

「…………えっと、どこのに乗ればいいんでしょうか？ 鞍、1人乗り用ですね、それ」

「この鞍おつきいから詰めれば女子供2人ぐらいなら大丈夫よー？」
「はい、どうだ？」

そういうて、前に詰めてくれるレベッカさん。マジか。つか俺子供か。つかレベッカさん俺より体格いいんだよな…………。

変にまじついていてもおかしいので、引っ張り上げてもらつて乗つた。

……人妻の腰に抱きついたりするのはセーフなのかな。シェローさんも「気をつけてなー」と意に介していない様子。ま、いいか！ いいならいいか！

レベッカさんの背中あつたかいナリイ……。

出発して暫くしてからレベッカさんが言った。

「昨日は、どうして急に行っちゃったの？ セツカへお導きの達成のお祝いじよひと思つたの？」

「あ、いえ、すみません。……ちょっとお導きについてに驚いてしまつて」

全く理由にならない返事をしてしまつが、本当のことを言つのは恥ずかしい。

無償の善意かと思つたらあまりに打算的すぎてがっかりしたなんて、そんなことは絶対に言えないし、言いたくもない。

この世界ではお導きを達成させようとするのは、当たり前のじと（なにせ精靈様が導いてくれる正しい道なのだから）であつて、そのことに何か思つたとしても無意味なのだからな。

シローランもレベッカさんも、全くの善人であるのは疑う余地がないし、俺も別にもうなにか拘つているわけでもないのだけれど。

「……ここによジロー。あなたが記憶喪失だつて知つていたの、ちゃんと説明してなくて私たちも悪かつたしね。……ちゃんとお導きの最中だつて言つておけばよかつた。……けつこひね、お導きが原因で友情が壊れるつてケースもあつたりするのよ。男の場合はほとんどないんだけど、女友達同士だと時々、ね。ジローは見るからに纖細そだから……。だから、『じめんね』

ん？ これ俺が逃げた本当の理由に気が付いてるよね。つか、それに対する話をしているよね。レベッカさんいぢりいち鋭すぎるんだよな……。

かと言つて認めるのも癪だと思い、「本当に気が動転していたんですね」「などと言い訳しておいた。レベッカさんも「やつ？ ならいいけど」とこれ以上は追求してこなかつた。

そういひしているうちに街に到着した。

時間としては、もう14時くらいになるだろう。帰りのことを考えると、そつは活動できない。本格的な準備に入るのは明日からになるだろつ。

そうそう。

エフタ氏との勝負自体は受けたことにした。

これから調査次第ではあるのだが、一度約束したことではあるし、逮捕がないなら、最悪負けても精霊石10個で済む。石はすでに2つも持っているし、勝負を受けた時からずっとだけれど、この勝負はなぜだか負ける気がしないつてのもあつたし。それになによりも……。

天職板にまた新しい「お導き」が追加されていたことだし、な。

【 バラカのお導き 】

- ・ 市長の家に行つてみよう 0 / 2
- ・ 御用商との約束を果たそう 1 / 3
- ・ ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 7 / 10

.....
ん?

ハテナマークだけのはなんぞこれ??

Hリシェの街は、良く見ると確かにいろんなところで祭りの準備らしきことをしているのだった。

街路樹を赤、青、緑、白の布で飾る人、ヤグラのようなものを組み立てる人、屋台を引く人。

まだ10日以上あるためか準備自体はまだノンビリやっているようだ。

……異世界の祭か。屋台とかやつたら儲かるかなあ。

馬を街の入り口で預け、レベッカさんとまづこれからどうするかを話しながら歩く。

とりあいす決まっていることは、奴隸商に行きエフタ氏が本物のソロ家の人物かどうか確認すること。市長についての情報収集とお宅に突撃。贈り物をなにするか協議。

新しい”お導き”が出たことは、そのままレベッカさんに話した。

昨日今日すでに2つもお導きを達成しているのに、さらに新しいのが出たということに驚いていたが「天職があるんだから、

ル・バラカによほど愛されているんでしょうね、ジローは」と納得したようだつた。

??のやつについても聞いてみたがレベッカさんもなんだかわからぬんだそうだ。

内容についても、「市長の家に行く」も「御用商との約束を果たす」も、どちらもこの勝負に関するものに間違いがないということで、驚いていたようだが、「大精靈がそう導いて下さっているのだから、この話に乗つても大丈夫なんだろうね」と急に楽観的な感じに。

大精靈を過信しすぎなんじゃなかろつかとも思つたが、この世界ではそういうものなのかもしれないし、よくわからないな……。

ついでに疑問に思つていた「お導きに従わないという選択肢」について聞いてみる。

レベッカさんによると、一部の偏屈な人はお導きに従わなかつたり（真逆のことをやつたりするんだと）、天職板そのものを見なかつたり、反精靈主義を掲げてみたりと、……まあいろいろいふことはいるらしい。

他国では精靈信仰よりも、火神信仰とか女神信仰だとかのほうが強い国もあるらしく、そういうた国では祝福 자체も大精靈が行うものではないのだそうな。なんつーか、神様みたいな存在がたくさんいるんだな異世界つて。

。 。 。

昼は聞き込み調査をしながら、街の案内なんかをしてもらい、夜はいちいちショローさんとのごとに戻つて泊めさせてもらひながら、3日間が経過した。

とりあえず、わかつたことは

。

奴隸商館の人曰く、エフタ氏は本物のソロ家の^{ソロ}人間であるとのこと。お供はつけず^{ソロ}にいることが多いらしい。

奴隸商館に堂々と入つていくレベッカさんはとても男らしかった。そして俺は外で待つてた。

市長ミルクパールさんは、女性で50歳。娘が1人いるが、帝都に留学中。旦那も一緒に住んでいるはずだが、あまり一緒にいるとこうを見かけないらしい。

お導きの「家を訪ねる」はまだ実施していない。家の場所はもう調べてあるが。

ミルクパールさんはかなりの仕事人間のようで、あまり詳しいプライベート情報が入つてこなかつた。せめて趣味や好きな食べ物でもわかれればいいんだが。

仕事はかなりバリバリこなしているらしく、市民からの人気も高い。

ミルクパールさんの就任時には、まだエリシェはさほど大きい街ではなかつたらしいが、今では第1自由都市マリシェーラとほぼ同等の規模を有してゐるんだそうだ。就任前には汚職や収賄が横行しそこそこ腐敗してたのだが、彼女がそれを一掃したらしい。

なるほど、それなら贈り物作戦は普通じゃ上手くいかないわな。

ソロ家は帝都の御用商として手広くやつてゐるらしいが、エリシェはまだほぼ未開拓に近く、わずかな奴隸を卸してゐるだけなのだそうだ。

エフタ氏はソロ家の3男坊で、マリシエーラの支部で長男のサポートをしながら商人修業中。つまり、あの男はああ見えて商人としては駆け出しといふことらしい。

きっと若いころに散々遊びまわつてたんだろうと俺は決め付けた。

レベッカさんの情報収集能力がすごい。誰とでも親しく話しかけてなんでも聞き出してしまう。元傭兵つてそういうもんのかな、そういうえば天職聞いたことなかつたけど、そういう系統のものなんかしら。

宝石の価値について店で聞いたりして調べたんだが、こつちは地

球ほど宝石が算出されないようだ。

量の問題ではなく種類が少ない。その代わり精霊石の加工物があるというわけだ。なら日本から宝石持つて貰えるかなーと簡単に考えたが、そう簡単な問題でもないようだつた。

まず、精霊石を加工成型して宝石にするわけだけど、地球の宝石とは決定的な違いは、この石が精霊力の塊だという部分だ。精霊石由来の宝石は、精霊魔法でエンチャントして「マジックアイテム」にできるのだ。そしてそれをアクセサリーに加工して装備するつてわけ。精霊石万能すぎるだろ。

聞き込みのために、酒場だの宿屋だの、ギルドだの市庁舎だのいろいろ廻って、街の地理にもだいぶ詳しくなった。

Hリシュの街の南側は港になつていて、他国からの交易品が届く窓口になっている。こっちの海も地球と同じような海なのかと思つたが、あまり波が強くないというか、コラコラと海面が不自然に揺れているばかりだ。月が2つある所為だらうか。

風もあまり潮の香りがしない。海水が真水だつたりして。

そういうえば、魚食はどうなんだろうな、こっちの世界は。昨日今日と食べたものって野菜や肉ばかりで魚は見掛けなかつたし、生態系が違う可能性もあるな。こんな立派な港があるなら、釣り道具とかも売れそんなんだけどなあ。

ショローさんの家の方角の逆側から街を出て、しばらく行くとルクラエラという鉱山街があるのでそだ。

国内有数の鉱山であるルクラエリヨの採掘、精錬場から、徐々に発展していき今では小規模の街と言つても過言ではない規模なのだとか。

しかもすぐ近くにダンジョンが2つもある為、探索者の為の武器や防具の需要もあり、結果として採掘、精錬、生産を一括で行う一大鉱工業街となつたのだそうだ。

昨日見かけたドワーフの一団もきっとそこの人たちに違いない。

つか、採掘と精錬と生産を一箇所でやつてゐて、汚染が半端なさそう。そういうものの対策とかしないだらうしなあ……。

でも、鉱山街とかダンジョンとか男心くすぐりまくりなんで、一度はどんなもんか行つてみたいな。武器や防具もどんどん売つてるのが見てみたいし……。この世界の金貨とかショローさん家の短剣を見るに、金属の精錬技術はかなり高そうだし、期待できそう。

ヒリシユでは、まだ高級武器屋みたいのを見つけてないだけだからか、面白い……というか、良い武器売つてる店見つけてないんだよ。俺がナイフを売つた店も大量生産品みたいな剣がメインだったしなー。

よし、3日間でこれだけいろいろ調べられれば上出来だらう。

肝心の勝負に関係してゐる部分はまだ全然なんだけどもなー。贈り物をなににするのかもまだ全然考へてないしな。

まあ、とにかく明日はお導きもあるし、市長の家に行つてみるとこじつけ。

しばらくして出てきたのは、50過ぎくらいの禿頭と総ヒゲのワイルドな男性だった。エプロンなんか着けちゃって、なんかの職人なのかな。

純粹にこいつ家つていいよな。憧れるよな。別荘として欲しいよな。

ドアベルを鳴らす。

次の日、俺とレベッカさんは市長宅を訪れていた。

それなりに立派な石作りの一階建ての建物である。こういう家つてなんていうのかな？ヨーロッパの古い街なんかを紹介するTV番組なんかでよく見るタイプの建物だけれど。

重厚な木製の扉で、ハメ殺しの窓があつて、スレートの屋根で…

…。

レベッカさんが応対しようとするが、JJはネタの仕込み的にも俺が応対しなければならない。

つか、レベッカさんに「数日週」してわかつたんだけど、姉御肌というか、すこぐ甘やかしてくれるというか、居心地は良いけど男をダメにするタイプかもしれない。むしろダメにされたい。特に俺みたいな末っ子には毒すぎるぜ！ 人妻つてのも案外ポイント高いような気がしてきたぞ！

……「冗談はさておき、JJはミスなく応対しなきゃいかん大事なポイントだ。上手くやらなきゃな。

「はじめまして。僕はジロー・アヤセというものです。宝石商をやらせていただいているものなのですが、ビル・リンクンローブ様でしょうか？」

「そうだが。宝石商がうちになんの用だ？」

「当然、良い宝石が入ったので」「紹介に……、と言いたいところですが、10日ほど前に『これからに宝石を見せに行きなさい』という“お導き”がありましたね。 中で話をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「面倒だが、……そういうことなら仕方がないな。入れ」

けつこう強キャラ系かな。正直けつこうビビッてるけど、スーパーボディーガードのレベッカさんもいることだし、なんとかなるだ

る。

「Jの人はビル・リンデンローブ氏。例のあまり嫁と一緒にいないダンナさんだ。Jの人はなにか家で仕事をしているらしいのだが、その内容は調査しきらなかつた。まあ、それ自体はまあどうでもいいんだけどな。

家に入ると、市長の家に行つてみよう　0／2　を果たしたことになつたらしく、天職板があらわれ、”市長の夫に真実の鏡を使ってみよう　1／2”に変化した。

あれつて人間相手にも有効なのか……。ビルまで暴くのかわからんけど、ちょっと怖いな……。

応接間に通される俺とレベッカさん。

レベッカさんが「どうしてお導きの内容ウソついたの？」と小声で聞いてくるが、とにかく任せて欲しいと頼む。

お導きの内容といえば、眞実の鏡のことはまだレベッカさんにも言つてないし、これについてはレベッカさんにも嘘の申告をしなきやならないんだよな……。まあ、どちらにせよ、クエストはここでクリアしちゃうし大丈夫か。

ビル氏と向かい合つて座り、切り出した。

「宝石を見せる前に、お聞きしたいのですが近々宝石が必要になるようなイベントがなにかありますか？　宝石を見せようなどこうお導きは私もはじめてでしてね。なにか特別な記念日かなにかが？」

「いや、特にそういうものはないな」

「誕生日であるとか、結婚記念日などは？」

「どちらもまだ数ヶ月は先だな」

その後いくつか質問をしたがまさにノレンに腕押し。ちよつと作戦を変更することに。

「では、宝石を見ていいただきましょうか。お導きがあるといつ」とは、なにかきっと宝石が必要なにかがあるはずだと思つのです。僕はそのお手伝いができるなら、と思つているんですよ。精霊の導いた縁でもありますしね」

そう言つて、ジュエリーケースを出す。

さりげなくケースを持つてビル氏の横に座り、ケースを開けた。

(真実の鏡)

宝石を見せるふりをしてビル氏に軽く触れながら念じる。これつて使うときこそ、相手に触つてなきやいけないつてのがちょっと厄介だな。

真実の鏡が発動し、ビル氏の詳細情報が天職板に表示されていく。

……うわあ……、すげえな真実の鏡。

今は応対中でじっくり見れないけれど、ひとまず使えそうな情報は得られた。

良い作戦も思いついたので、この路線で行こう。

物珍しそうに宝石を見ていたビル氏が言つ。

「……おい、これはなんだ？ 精靈石か？ これほど美しく成型されたものははじめて見るぞ……。お前、その服からすると帝都の商人なのか？」

「はい。帝都から来ました。どうです？ そちらは僕としてもお選めの一品でしてね。向こうではペリドットと呼ばれている石なのですが、指輪やネックレスなどに加工して奥様に贈られては？ もちろんエンチャントもこちらで代行をさせていただきますし、一生の宝物になりますよ。つと失礼」

売り口上の最中だつたが、お導きの達成による精靈石の受け取りを済まさなければならない。つか、勝手に精靈さまが出てきて渡してくれるだけなんだけどな。

天職板が光つて、ポンッと妖精（いちおう）いつが精靈さまらしいが）になる。3回目ともなるともう慣れたな。

「よおよお、悪しうなツラしゃがつて、おまえにはこの濁つた色の石がお似合いだよ。じゃあな。これからも世のため精靈様のためにガンバッテくれよ」

ポンッ

でつていう。

今回の精靈石は……「はあ、青が主体の虹色の石……。
これってひょっとして、いやひょっとしなくても……オパール……。
」

これって濁つてるつて表現するのか、精霊の基準がよくわからんな。

オパールは高級石だぞ！

「ありがとうございます。どうやらこれでお導きの達成となつたようですね。どうでしょ？ これモル・バラカのお導きですし、その石がお気に召したのであればお譲りしますので、奥様にお贈りなさつては？ 僕としてはネックレスにするのがお奨めですよ」

「ちょっと強引に押してみる。ペリドットもそれほど高価な石でもないので、精霊石を得た見返りとしてタダあげてしまつても別に惜しくもない。今はとにかく、ビル氏をその気にさせなければ……」

「しかし……、俺はいつこうったものを家内に贈つたことがないのだ……。渡そうと思つたことはあるんだがな、どうも恥ずかしいのは苦手でな……」

「あ、その気になつてくれたよつだ。よかつたよかつた。
強キャラ系かと思つたら、男なんてこんなもんよ。あとは、上手

ことと言つくるめうやえば出来上がり。

「ナウニナリとやしたか。……では、いつのまじうどしよう

がーて、あとは細かい仕込みと、俺自身のパーティ参加の準備だな。

第16話 異世界礼装は貴族の香り

エフタ氏との約束の日は良く晴れた。

いやあ、絶好の勝負日和ですなあ。^{エルフ}首を洗つて待つてろよ！

市長の家を訪れた次の日からも、時々レベッカさんに付き添つてもらつたりしながら準備でしたが、今日は特に最後まで見届けてもらうつもりだ。

なんたつて、初の異世界パーティ！ ルールが分からず恥かいたりしても何だしな（フィンガーボールの水飲んだりとかな）。

それに、単純にエフタ氏と1対1つてのも微妙に不安があるし、誰かが付いていてくれれば心強いもんね。

せっかくのパーティだからといふことで、今日はシエローサンも来るそうだ。「おめかししなきやー」とか言ってたけど、どんな格好でくるのかな。

と、来たようだ。2人とも大柄だから遠くからでも目立つな。

……おい、2人とも服装すげえぞ。

「待たせたなジロー。お、馬子にも衣装だな。レベッカが選んだのか？」

「そうよー。カツコーにじょひ。中古だナビねー」

「……お2人の服装のほうが凄いですよ。なんですかそれ？ 騎士礼装？」

2人はおそろいの花の刺繡鮮やかな臙脂色えんじいろのフロックコートに身を包んでいた。インナーにはフリルの付いた白いドレスシャツを着て、コートのボタンは2点だけ留め、内側にはジレが覗いている。腰に白銀の片手剣なんかぶら提げちゃって、絵になりすぎで困るわあ。

シロローサンは普段の不精ヒゲにざんばら頭を綺麗に整えて、ナイスミドルといつかちょい悪オヤジといつか……。190cmは超えてるであろう高身長も相まって、これなんてハリウッドスター？といった感じ。

レベッカさんは普段ひつひつめているセミロングの赤毛を垂らして、一部を三つ編みなんかにしちゃって、化粧もぱっちりキメてている。朱の口紅が色っぽい。

もともと美人だとは思っていたけど、これは超美人だと言わざるを得ない。いやあ、ふくへしいわあ……。そうだ！ 写真撮らなきや！

「これねー。傭兵やつてたときにちょっと大きい戦果上げてね。それで叙勲式やるから出ろつていうから、みんなでおそろいで作つたのよ。最初はもっと安くて簡単なもの作るはずだつたんだけど、話してるうちに段々調子乗っちゃつてねー、高くついたわあ」

なるほどな。傭兵でも叙勲式とかつてあるんだな、この世界。なんかどんなに活躍してもお金もらつてサヨウナラなイメージだつたけども。

強い傭兵团なら困つとかないと敵にまわつても厄介とか、そういうのもあるのかもな。

ちなみに、馬子にも衣装と評された俺も、いつものシェイクスピア服から、貴族風の服にチエンジ。レベッカさんの見立てで買ったんだけど、中古のくせに結構高かつた。

生地色と同系色の糸で刺繡が施された濃紺のジャケットと、シンプルなパンツ。黒のシャツ、革のベルト。靴は高かつたので、家から黒の革靴を持ってきた。

パツと見た感じ、ちょい昔のヴィジュアル系バンドの人みたいだ。でも、シックでなかなかカッコいいと我ながら思つ。……まあ、225エルもしたからね……。

あとは、シェローさん達みたいに俺も佩刀してみたい。でも、商人が剣とか持つてたら変かな。短剣くらいにしといたほうが無難かしら。

3人で中央広場に向かう。もうすぐ約束の時間だ。

エリシH50周年祭は昨日から開催されている。

今回の勝負の準備だなんだで、まだ祭見物をしていないが、これが終わつたらゆつくり周つてみたいな。気になる屋台もたくさん出ているし、できるじとならエルフの少女といつしょにな！ ゲヘゲヘ。

通常の3倍は混んでいる道を進み、待ち合わせ場所の中央広場に辿り着く。広場は幾種類もの屋台が軒を連ね、ヤグラが建ち、篝火が焚かれ、祭特有の喧騒に包まれていた。

住人も街並みもヨーロッパ風なのに、祭の雰囲気は、どうも日本的。屋台のラインナップもどこか懐かしさを感じるものだし、輪投げの屋台とか久しぶりにみたなあ……。

さて、エフタ氏は来てるのかな。こんなに人出があるとは思つていなかつたので、待ち合わせ場所としては失敗だつたかもしけない。漠然と中央広場前としか約束していないしなあ。

……あ、いた。

ノンキにお供のエルフ男と2人で屋台の焼きうどんなんか食つてやがる。なにやつてんのあの人。

エフタ氏本人もけつこうな美形だけど、それよりエルフ男だよ。超美形の紫のローブを身に纏つたブロンドヘアの男性エルフが焼きうどんを立ち食いですぜ？ うん、一周してカツコいい。

「こんちは。遅くなつてしません、これほど混むと思わなかつ

たもので

「……ちこは気付いてないようだつたので、話しかけてみると。」
俺が話しかけると、じつちをチラシと見たエフタ氏。その後またすぐ視線を戻し、すぐにまた俺も見た。
一度見すんな。

「……これはこれは。……本当に来たんですね。いやあ、自分で言うのもなんですが、かなり不利な条件を出してしまいましたし、絶対に来ないだらうと思つていたのですけれど」

「約束ですか……、と言いたいところですがね。実はやつぱり逃げようかとも思つていたんですよ。でもあの後、お導きが出来ましてね」

「…………――お導きが出たんですか？　どうこう内容の？」

「いえ、普通にあなたとの約束を守れという内容のものですから

なにを急に驚いたんだらう、この人。お導きフロークか？

「わうですか……。わう……、まあ、わうこうともありますのか……。しかし……」

なにやらブツブツ言つ出すエフタ氏。本当に大丈夫か？

「若、この者が例の？　なにせたりと契約してしまつてしまふ。どちらに転ぶにせよ、いかほの不利益にはなりますまい」

と、エルフ男性が口を挟む。サラッと爆弾発言するなよ、それじゃあどうせ転んでも俺が損するみたいじゃないか。

あれ？ つまりそういうこと？ 本当に契約して大丈夫か？

ブツブツ言つていたエフタ氏も、エルフ男の助言を聞き咳払いを1つしてこちらに向き直る。

「ジローさん。それでは私とエルフを賭けて勝負をするということで、今から精霊契約を結びますがよろしいですか？ 勝負の内容は、今夜のパーティでエリシェ市長に贈り物をし彼女がそれを気に入ればあなたの勝ち、そうでなければ私の勝ちで」

「そうですね。概ねそれでよいのですが、市長が贈り物を気に入つたかどうかの判断はどこですか？ あと、僕が主導して贈るものならなんでも良かつたんですね。物品に限らず」

「……いえ、贈り物は物品に限ります。さすがに『面白い話』や『大道芸』のような余興は今回の『贈り物』とは見なされません。物品であればどんなものでも構いませんよ。次に、相手が気に入つかどうかをどう判断するか、ですが『相手がそれを受け取り、感謝の言葉を口にする』のを判断基準としましょう。よろしいですね？」

……まあ、大丈夫だな。

俺が頷くと、エルフ男が精霊契約の魔法を使つといつことで、俺とエフタ氏を並んで立たせる。2人の手を取ると祝福の時の神官ちゃんと同じように、なにか呪文のようなものを唱え始めた。

お互に名前と年齢と性別を聞かれたので答える。祝福の時も聞かれたけど、精霊契約では必ず必要なんだろうか。

エフタ氏は驚きの22歳だった。ほぼ同じ歳だったとは……。もつと上かと思ったな。

その後もブツブツを呪文を唱えていたが、最後にカツと光が包み、それで契約が終了した。祝福の時とだいたい同じだな。

「契約はこれで完了しました。ご確認ください」

「ご確認くださいとか……。あ、天職板かな。

そう思い確認してみると、【バラカのお導き】の下に新しい欄があつた。

【精霊契約】
ジロー・アヤセとエフタ・ソロとの勝負要綱
15日のパーティ中にジローはエリシェ市長ミルクパール・リンデンローブへ贈り物をしなければならない。
相手が贈り物を受け取り感謝の言葉を口にすればジローの勝ちとなる。
その場合ジローはエルフの少女をエフタから受け取る。

ジローが負けた場合は精霊石10個をエフタへ支払わなければならぬ（未来取得分を強制的に篡奪する権利をエフタは有する）。この契約が果たされなかつた場合、果たさなかつた者の祝福が失われる。

なるほど、これが精霊契約か。ちゃんと文書として？ 出るのが凄いな。これエルフがウツカリ契約内容間違えたりしたら、けっこう悲惨なことになるんじゃないのかな。

「確認しました。内容も間違いありません。それでどうしましょう、パーティにはこのまま向かうのですか？ ああ、こちらも連れがいるのですが、いつしょによろしかつたでしょうか」

「はい。構いませんよ。会場へは私の紹介で入れますし。もう向かっても大丈夫でしょう」

「……あ、それと、僕が買つたらアレできるエルフの少女は連れてきているんですか、今日？」

ついアレとか言つて濁してしまつ。〈タレ〉。

ハツキリ奴隸とか言えばいいのに！ やっぱ現代日本人にはヘヴィだよ奴隸つて単語はさー、その手のナーナゲームでなら平気だけんどもよ。

「…………」
「…………」
「…………」

「もちろん連れてきておりますよ。『女心ください』の勝負が終わりましたらすぐここに受け渡しましたよ！」

……なに今の間は。なぜエルフ男と顔を見合わせた？

いちいち心配になるな……。やっぱ騙されたんのかな俺。

ちなみに、「御用商との約束を果たそう 1／3」は「御用商と商取引をしよう 2／3」に変化した。

勝つても負けてこの人とは付き合いが続くってことなんかなあ。

第17話 祝賀パーティは酔っ払いの香り

4人で会場へ向かう。

途中でエフタ氏の連れのエルフ男は、所用があるからと離れ、俺とショローさんとエフタ氏の3人になった。レベッカさんは別の用事で一時的に抜けていく。

エルフ男はエフタ氏の護衛も兼ねてるのかと思つたのだが、精霊契約のために連れて来ただけだつたらしい。

「エフタさん。こんなことを聞くのも変ですが、護衛を付けなくても大丈夫なんですか？」

「いえ、本当は付けたほうが良いのでしょうけれど、どうも煩わしいのが苦手な性分でしてね」

そんな理由で……。

でも大商家の3男坊で、好き勝手やってきたんだろう（俺の決

め付けだけど）、護衛だかお田付け役だかわからんのが傍にいるのは嫌なんだうな。

それか、俺が考へているより、ずっとこの世界の治安が良いのかもしけないだけかも知れないけどもな。

「それよりもジローさん、贈り物は何にしたのですか？」

……さすがにそれは言えないぜ。

最初に考へていたよりもだんだん大掛かりになってしまって、レベッカさんに協力してもらいながら準備したけれど、異世界人がどう感じるかだけはちょっと冒険。

「贈り物は……、秘密です。まあ楽しみにしていてください」

「ほう、自信があるのですね。……そうでなければこの勝負は受けられなかつたでしょけれど、市長のことはお調べになつたでしょから、簡単にはいかないとは思わなかつたのですか？」

「当然思いましたが、なぜだか負ける気がしなかつたんです。もちろん、贈る品にも自信があるんですけどね」

「……負ける気がしませんでしたか。では余計にどんな品なのか楽しみですね。あのお堅い市長が気に入るのかどうか、…………期待していますよ」

負ける気がしないってのは、ちょっと挑発的だったかな？　とも思つたが、エフタ氏はむしろ満足そうに微笑んで見せたものだ。

しかし……、どうも負けたくないという気配が感じられないんだよな、この人。それともボンボンなんてこんなもんなんかな。

ま、こまかに言つても仕方がないか。サイは投げられたのだ！

パーティ会場は官庁前の芝生の植えられた広場だ。

テーブルには、屋台料理よりは多少豪華だが、パーティ料理といふには多少豪快なものがいろいろとすでに並んでいる。料理だけなく、飲み物も酒にジュースにお茶にと、いろいろ用意されているようだ。早速ショローさんが田を輝かせている。

楽団がエスニックな響きのする音楽を奏で、招待客たちはすでに思い思いに楽しんでいた。

「ジローさん、あの方がエリシェ市長ミルクパールさんですよ」

Hフタ氏が指し示すほうを見る。

白い清潔なスーツ姿の神経質そうな女性が、来賓と挨拶を交わしている。なるほど、確かに潔癖そうだ。某大国の国務長官を思い出すな……。

「Hフタさん、それで贈り物はどうしまじょうつか。どうこうタイミングで贈るとかあるんですか？」

「そうですね……。まだパーティは始まつたばかりのようだし、もつ暫くしたら私が挨拶に行きますから、その後にでも」

「わかりました。ではこちからひりひりで準備をしておきます

ま、準備なんてもうほんとんどないんだけどね。レベッカさんが戻り次第、いつでもはじめられる。

それまでは、ショローさんと料理でも食べてるかー。

「うーー。いやあ、意外と強い酒でしたなあー、ショロー氏」

「ハツハツハツ。内陸の酒はもつとあんなものではありますぞ、ジロー氏」

ちょっとと氣付けの一杯と思つて飲んだら、存外飲み口軽やかでかるく酔つ払つちゃつたわあ。ショローさんもいい感じに酔つているし、ちょっとと調子こじちゃつたかもしね。

そういえば、レベッカさんに、ショローさんに酒を飲ませるとか言われてたよつた？……まあ、いいか。祭だしな！

これから一勝負あるけれど、酒が表に出るタイプでもないしパーティの席上のことだ、酔つっていても特に不具合はあるまい。

「、ビーチや、ハーベッカさん、が来たよ、だ。向こうから金図を送つてくね。

わ、って、いよこよだな。

招待客と歓談しているHフタ氏を見つけ出し話しかける。

「Hフタさん。どうでしょ、う、やうやう」

「ああ、ジローさん。うですね、ちょうど市長も体が空いたよう
です、行つてみますか」

「はい、よひじへおねがいします」

2人で、市長のところへ向かつ。シラフだつたらこれからあるこ
とを考えてもそこそこ緊張しただるうけれど、酒が俺を大胆にして
いるぜ。やれるー。

Hフタ氏が市長と挨拶を交わしている。

俺のことを紹介してくれるまでは横で待機。その間に、機材のチ
ックをしておく。

「……、それでこちらが、その話のジローさんです。ジローさん、
こちらがHリショ市長のミルクパールさん」

「はじまして、私は宝石商のジロー・アヤセです。お手にかかる
て光榮です」

紹介を受けて挨拶し握手を求める。

今回勝負を受けた理由のもうひとつの中の理由がこれだ。
図らずしてこの街のトップを紹介してもらえるというのは、この街で商売する上でいずれ大きな価値を持つ時が来るはずだ。
……まあ、それもここからの売り込み次第ではあるんだけどな。

「はじめましてジローさん。あら、ずいぶんとかわいい宝石商さんね。先に一言言つておきますけれど、その若さでソロ家のの人間なんかと係わり合いにならないほうがよろしいわよ。彼らはみな魔界の住人ですからね」

かわいいって……。いやまあ、こっちの男つてガチムチが多いからなあ。そんな評価でもしかたないか……。ただでさえ童顔なのに。しかし、エフタ氏、普通に嫌われてるんじゃないのかこれ。魔界の住人とまで言われちゃって……。

「それで……、あなたが私に贈り物を下さるの？ 先に言つておきますが、私はそういう物の受け取りをお断りしています。仮にも私は皇帝より統治権を任せられている身。そうしたつけ届けを受け取つていては、精霊の示す道を見失いますからね」

「存じております。……ですが、商品だけでも見ていただけますでしょうか。気に入らなければお受け取りを拒否なさつても構いませんので」

そう言つて、バッグからオリーブグリーンのネックレスケースを

取り出す。このケースは向こうで買ったものだ。おやじの手のものは向こうのほうが安いだろうし、物も良い。

俺自身も酔ってまかせて一気に営業モードに入る。

「今回あなたにお贈りしたいのは、こちらのペリドットのネックレスです。石の大きさは4カラット程度ですが、深いオリーブグリーンをより引き立てるオーバルカットに成型した精霊^{ペリドット}石と、土台には、ペリドットとは最も相性が良いとされる金を。こちらも職人の手で美しく彫金を施しました」

掴みとしては、まずバツと商品説明。どの程度異世界でこれらの単語が通じるのかわからんけれど、そのへんは別に重要じゃない。相手が「なんか凄そ」と思ってくれればそれだけで十分だ。

「素敵ね。緑色の宝石はいくつか見たことがあります、これほどの深い色合いのものは初めて見ます。ですが、……確かに素晴らしい品だけれど、なおさら受け取るわけにはいかないわね。ましてあなたやエフタ君のような商人からは」

まあ、そうだからな、今の段階では。まあ、どんどん続けよう。

「いえ、今回この品は私が用意こそしましたが、本当の贈り主は別にいるのですよ。……心当たりはございませんか？」

「いえ？ 私が贈り物を受け取らないことは國中の者が知っています

すから。こまだにがんばつてこるのは、それこそHフタ君ぐりこのものだわ」

本当に全く思って当たらなことつだ。

まあ、だからこそ効果的なんだるけれどもな。

「古来よりペリドットは金と相性が良い宝石と言われています。そして、その相性の良さから『お互いを輝かせる』組み合わせ、つまり夫婦愛の象徴として愛されてきました。そして、そこから生まれたペリドットの宝石言葉は『夫婦愛』…………。そのネックレスに施された彫金。見覚えがございませんか？」

いぶかしげにネックレスの土台の金の彫金を確認するミルクパールさん。ここで気付くかどうかはある種の賭けではあるんだが、若いころよく使っていたモチーフだと黙つていたし、気付いてくれるだろう。

「…………え、これって……。でも……」

うろたえる。うろたえる。

軽く混乱しているうちに話を決めるべく、レベッカさんに会図を送り、昨日のうちから会場に持ち込んでおいた電池式のマイクと小型アンプの電源を入れた。

ボリュームはマックスに調整してある。これなら会場内であればどこでも俺の声が聞こえるだろう。

「あ、あー、みなさま、本日はエリシウム50周年パーティにおいて

くださいました。ありがとうございます。これより市民を代表いたしまして、市長ミルクパール氏に感謝の意を表し花束の贈呈を行いたいと思いますので、ご歓談中のところ申し訳ありませんが、ご注目ください」

突然始まったイベントにざわめく招待客のほうを向き直る。
さて異世界人にも効くといいなこの趣向。

多少強引だけれど、じつちの世界のパーティはだいたい好き勝手に歓談して、好き勝手に次の会場へ移るといった雑なものらしいので、問題になつたりはしないだろう、多分。

アンプやマイクに不思議そうな顔をしている人もいたが、ショロームさんに「あれ新しい魔道具なんですよ」と吹聴してもらい、すぐに沈静化した。

「会場入り口を『じりんぐだわい』。本田のために他国より取り寄せた、白バラの花束。白バラの花言葉は「尊敬」。我々エリシエ市民から市長への尊敬を込めてこの花を贈らせていただきます。普段は贈り物を受け取りにならない市長ですが、この場だけは譲歩していただきましょう！」

白バラの花束は、向こう日本から持つて来たものだ。こちらではこれほど高度に品種改良された花をまとめて手に入れるのは難しい上、値段も高い。いや、まあ、向こうでもかなり高価だったけれどね。

招待客たちも、特にこのイベントに疑問を感じたりはしていないようだ。譲歩していただきましょうのところでは軽い笑いすら起きたくらいだし、問題なさそうだ。

花束を持っているのは、ビシッと黒いスーツを着た中年の男だ。後にはレベッカさんが控えている。

市長は花束よりも、そちらの男性のほうを呆然として見つめている。市長が小声で「あなた……」と呟くのが聞こえる。

花束を贈呈する中年男性は当然、市長の夫ビル氏だ。

この日の為にスーツを新調し、髪もヒゲも整えている。ドタキヤンされても困るので、レベッカさんは迎えに行つてもらっていたのだった。

いや、しかし、彼にこのイベントへの参加を頷かせるまでに、一週間毎日通ったものだよ。今も本心では嫌々なのかもしれないが、ここまで来たからには彼にもがんばってもららうしかない。

余程目立つのが苦手なのか真っ赤になっちゃって、ちゅうと氣の毒だけだ。

そして向かい合つ2人。

花束が市長へと贈呈され、拍手に包まれる会場。

「……このネックレス、あなたが作った物ね。このベリパイルのモチーフ、懐かしい……。あのひる、師匠にダメだしされた気晴らしによく作っていたものね」

「……ああ。懐かしいだろう。あの男に、一田で俺が作ったとわかるデザインにしろと言われてな。おかげで昔のことと色々と思い出しながらの作業だったよ」

「ふふふ、あなたが上手く丸めこまれてこんなところまで出でてくるなんて……。これはさすがにやられちゃったかしらね」

まだ余裕があるようだけれど、ミルクパールさんからすれば、このイベントは完璧な不意打ちだつただろつ。

結婚する前も、結婚してからも、ビル氏は仕事を優先する職人気質な寡黙な夫で、プレゼントなどしたことがないということだったし、ミルクパールさんにとっても、政治家という職業上留守がちで、なんとなく擦れ違つ日々が多かつたそうだ。

そして、そのままその距離間が当たり前の夫婦の距離感となり、これまで来たことらしいのだが、話を聞いたところお互いを必要以上に尊重しているだけのことで、愛が覚めたとかそういう関係ではなさそうだった。

真実の鏡で覗き見たビル氏の天職は、細工師クラフトマンだつた。

初訪問の日、エプロン姿で出てきたが、作業場が家の中にあり注文販売を基本として細々と細工師をやつているらしい。

作品を何点か見せてもらつたが、金属の彫金は当然として、ナイフの柄の作成、刀身への飾り文字の打ち込み、金属鎧への文様付け、簡単な小物の作成、などなど、器用にいろんな物を作つてゐる。

中でもやはり彫金の技術は素晴らしい、この人の作ったものを独占して日本で売らなきやなどとイヤラシイ商売つ氣をしてしまつたものだ。

当然、ネックレスの土台部分はビル氏本人に作つてもらつた。彫金師のくせに、結婚してから一度も自分で作ったものを贈つたことがないつていうのだから呆れる。でもまあ、それが今回はむしろ普

ラスの働くのがもしけないのだけじゃ。

「いや、イベントは当然まだ少しあるのだ。どんどん行こう。鉄は熱こうちに打てとも言つしな。

「さてみなさん、こちらの花束を贈呈した男性、知らない方がほとんどだと思われますので紹介いたしましょう。ミルクパールさんの夫のビル・リンデンローブさんです。このたび、エリシェ50周年の記念日にあたりまして、市民の為に働く妻へ、感謝の気持ちを込めて贈り物をしたいとの申し出がありまして、この場をお借りした次第です」

一気に多少の脚色を交えて紹介すると、招待客の間から「あれが……」「初めてみるが優しそうな旦那じゃないか……」「そもそも結婚してたんだ市長……」などと声が上がる。

「ビルさんの職業は細工師でして、今回は彼自身が心を込めて製作した精霊石のネックレスを市長へと贈るということです。精霊石には、妻の身を案じる夫の気持ちを込めて『病魔退散』の加護が付加されており、また精霊石も『夫婦愛』の宝石言葉のあるペリドットを選ぶなど、結婚30年にして、エリシェを代表するカップルに相応しい熱々ぶりであります!」

観衆のボルテージもだんだん上がってくる。基本的にみんな酔払いなので、こういうイベントはおいしいんだね。最前列で手を叩いて喜んでいるシエローサンが気になるけど、まあ良い賑やかしだよ!

「実は私、今回ばかりのビルさんより手紙を預かっております。彼

の妻に対する感謝の気持ちを綴った手紙ですが、自分で読むのは恥ずかしいということで、私に託されたものです」

ミルクパールさんが驚いている。

ビルさんはもつと驚いている。

そりやそうだ。手紙なんて託してないんだからね。俺が話を聞きながらメモった要素を勝手に上手く手紙にしてきたものだもんね。ちょっと情報量が少なかつたから苦労したけどな。

「それでは僭越ながら読ませていただきます。……妻へ。口下手で上手くお前に感謝の言葉を言うことができそうもなかつたので、こつこつ筆を取らせてもらつた。30年前、2人で食べたヘリパールを覚えているだろうか。見た目が可愛いヘリパールを食べるの可哀想と言うお前に無理やり食べさせたことを、このネックレスを作りながら思い出していたよ。食べてみたら意外と美味しいと喜んで俺よりも多く食べていたね。今だから言えるけれど、お前と結婚しようと思つたのは、実はそのときの姿が可愛かつたからだといふのは、お前も知らなかつただろう。結婚してからお前がエリシエの為に、どんなにがんばってきたか、ずっと近くで見ていた俺が一番よくわかつてゐるつもりだ。上手く感謝の言葉を口にすることができなかつたけれど、お前の夫であることを誇りに思つてゐる。……でももう30年も経つんだな。あれからヘリパ村へは一度も行かなかつたけれど、お互い歳を取つたし、娘ももうすぐ1人立ちする歳だ。また一緒にヘリパ村へ行つて、動けなくなるくらいヘリパールを食べよう。ネックレス気に入つてくれると嬉しい。ビル・リンデンローブ」

会場は拍手の雨に包まれた。

手紙を読み上げるなんて演出、地球じゃもつべタもベタなんだけど、異世界じゃあ最新鋭ですよ。招待客のマダム達も涙ぐんでるよ。最前列でシーローさんが男泣きしてるのが氣になるけど、まあ良い賑やかしだよ！

ミルクパールさんもさすがにこれには効いたらしい、瞳を潤ませ、熱っぽくビルさんを見つめている。

しかしビルさんも困惑顔。まずい、ビルさんの許容範囲を超えそうだ！

「それでは、ビル・リンチンローブさんから奥様へネックレスが贈られます。ビルさん、ネックレスを奥様の首にかけてあげてください」

俺の言葉を受け、ミルクパールさんの手からネックレスを受け取り、ぎこちなく相手の首にネックレスをかけるビルさん。緊張通り越して青くなっていたけど、そこは見なかつたことにしよう。

ネックレスがミルクパールさんの首にかかるころには、招待客も是非その宝物を見物しようと、ワッと集まっている。

上品なオーブグリーンの輝く宝石と淡く輝くゴールドのネックレスが、ミルクパールさんの元々持つ気品と相まって、えもいわれぬ輝きを放っている。

ビル氏には最後の仕事をしてもらわなくちゃならない。俺はマイクを外し小声でビル氏に話しかけた。

「ネックレスをかけたら、最後に奥さんに一言あげてください。それが最後の締めですから、よろしくおねがいします」

俺がそう言いつと、意を決したビル氏がミルクパールさんに向き直る。

俺は「ラソニア」ところにマイクを持つていき、声を頂戴した。

「……30年間ありがとうございました。これからもよろしくな

そして抱き合つ2人。

ああ、この辺は欧米的なんだな。日本だつたらなかなかハグはない。しかし、ビル氏……、本当に一言だな。

そして会場のボルテージもマックスに。いやあ、招待客のみなさんも楽しめたようだし良かつた。これこそWINWINの関係だよ。俺もついつい笑顔になってしまふな。

あとは、最後に一言市長に貢えればOKだ。
ま、暫くは2人の世界に入っちゃつてるだろうから、俺も休憩しよう。

と、ジュースでも飲もうとテーブルに向かった時だった。

会場の隅にエフタ氏の連れのエルフ男がいるのに気が付いた。

あ、来てたんだと思いはしたが、あまり気にはしなかった。

エルフ男の横にダボダボの縁のローブに身を包み、フードを口深に被つた人物があり、顔は見えなかつたが、目が合つたように感じた。

瞬間、天職板が出現し、いつもよりも強く輝き新しいお導きを示した。いや、????のやつが変化したんだなコレは。

第1-8話 ヘリパールはつなぎの香り

「ミルクパールさん。どうでしたでしょうか。贈り物、受け取つていただけますか？」

「ふふふ、もちろん受け取らせてもらひわ。……ありがとうございます」

「喜んで貰えてようでなによりです。僕も用意した甲斐がありました」

「本当に嬉しいわ。あの人気がこんな風に思つていてくれていたなんて、思つてもいなかつたのよ。あなたがこうして下さらなかつたら、一生知ることもなかつたのかもしれないわね。……今は本当に最高の気分」

そう言つて、首元で輝くネックレスに触れるミルクパールさん。俺は「光栄です」と返し、エフタ氏に向き直つた。

なにはともあれ、これで勝負は俺の勝ちだわー。貰えるわー。これでエルフ貰えるわー。

「お見事でした、ジローサン。まさかこんな手で来るとはさすがに思いもよりませんでしたよ。これは私の完敗ですね」

「正直、運に助けられた部分もあるんですけどね。でも市長も喜んでいるようだし、よかつたなと思います」

「やつですね。これほど喜ばれる贈り物はなかなかありませんよ。これからは私も参考にさせていただきます」

「ははは、上手くやつてください。一番大事なのは相手の虚をつくことだからよ」

「なるほど。相手が思いもよらないというのが大事なんですね」

「やつやつ。……とにかく、これで勝負は僕の勝ち……、ところとで、H、Hルフを貰えるということなんでしたね。段取りとしてはどうします?」

「もちろん、約束ですし、契約も交わしておりますからエルフは当然お譲りしますよ。ただこちらも引渡しの準備がありますから、あと2コルカ程度はこちらでパーティを楽しんでいくください。またお迎えにあがります」

「わかりました。楽しみにしています」

そうして、エフタ氏と一旦別れる。

準備つてなにをするのかな。引渡しのために綺麗なべべなんか着せちゃって、化粧とかまでしちゃつたりするのかな。

呼んでもらいつ呼名は、「こ主人様」か「旦那様」か。あるいは「主さま」か、「ジロー様」も捨て難いな。あ、「おにいちゃん」なんてのも有りかな。俺、末っ子だから妹欲しかったんだよ！ ん？ 誤解しないでよね！ 健全！ 健全ですぞ！

いやあ、しかし、うへへへへ、夢が広がりんぐ。ですなあ。ついつい飲みすぎちゃう！――

Hフタ氏が来るままだいぶあるので、レベッカさんとシエロ一さんにお礼しとかなきやな。

レベッカさんは街ではそこそこ顔が知れているのか、顔見知りらしき招待客と楽しく談笑していた。シエローさんも招待客と談笑…：というかバカ騒ぎしている。ホントに酔うとグダグダになっちゃうタイプなんだなシエローさん。まあこの酒は確かに美味しいし、飲みすぎちゃうのはわかるけど、つか俺もすでに結構酔っているけども。

シエローワンにはお礼したところで、もう明日には忘れていると判断。

レベッカさんだけでいいが、今日のところは。

「おつかれさまです。レベッカさんいろいろと使つてしまつて、ありがとうございました。おかげでなんとか贈り物は喜んでもらえたようです」

果実酒を飲んで、ほんのりと頬を朱に染めたレベッカさんはかなり色っぽい。普段とは髪型も違うし、化粧もしているからか、余計

「ドキリとしてしまう。酒の勢いで行ける所までいっかりやいたいくらい。

「おつかれさまジロー。こんなに盛り上がるとはねー。最初話を聞いたときは半信半疑だつたんだけどね、実は」

「いえ、僕もうまくいかは賭けだつたんですよ。ただ漠然とした上手くいくといふ予感だけがあつただけで」

「そうなのー？ そのわりには堂に入った司会ぶりだつたわよ。手紙のところでは私もグッと来たわあ。……そついえば最近食べてないなあ、ヘリパール」

「ヘリパールてどんなやつなんですか？ 実は僕知らないんですよ

「北のほうにヘリパ湖つて湖があつてね。そこにいる……、一コ口二コ口した可愛い魚？ みたいなのことよ。捌くのが難しいんだけど、油がのつていて美味しいんだよー？」

「なるほど、それは一度食べてみたいですね。ヘリパ湖つて遠いんですか？」

「エリショからだと馬車で2日くらいかかるかしらね。湖畔に街があつて、かわいい宿が多いし本当にきれいで良いことこのよ

異世界の観光地みたいなものなのかなあ。若いカップル御用達の場所で、ヘリパールを食べるとなにかアレして、夜はナニがヘリパールってわけか。なかなか下品でよろしいな。『そう・・・

。そのまま飲み込んで。僕のヘリパーカー……とか俺も言つてみたいものだな。

俺もエルフ少女との新婚旅行はそこに行くかな。『主人様のヘリパーカーが暴れて、私のビクに（以下略

「……今度行こうかー、ジローー」

「……え？　ああ、そうですね。みんなで行つたら楽しそうですね」

そうね、と軽く答えて妖しく笑うレベッカさん。

少しお金貯めて旅行を2人にプレゼントするのもいいかもしねいな。

今回レベッカさんは特にいろいろ手伝つてもらつたので、その分の料金を払うと申し出たのだが、予想通りというかやつぱりとうか断られた。

でも、そういうわけにはいかない。どうしてそんなに良くしてくれるのか、と聞いた俺にレベッカさんは言つたものだ。

「バラカのお導きが元になつて知り合つた人間同士はね、『大精霊の巡り合わせ』で、一生の友達になれると言われているのよ。だから、私たちはもう友達よ。友達のためにできることをしていくだけなの。ね」

なるほど。友達かあ、と素直に嬉しかつたけれど、でもお礼はしなきやならんつてことで……、ちゃんと用意してみた。

「レベッカさん。今回、たくさん手伝ってくれたお礼、いろいろつて言つてましたけれど僕の気が済みませんので、これ受け取つてください」

レベッカさんへのプレゼントは、大粒なガーネットを使った指輪だ。綺麗な赤い髪をしたレベッカさんには赤い宝石が良かろうと、手持ちから見繕つたものだ。

これも土台の製作はビル氏に依頼した。ペリドットをタダにするから、これもタダで作つて！ と強引に頼み込んだものだ。リング部はシルバー。留め金は金で、貝が宝石を挟んでいるような彫金を施してある。なんとなくアールヌーボー調でかっこいい。地味顔の日本人には、派手派手しすぎて似合わないだらうけれど、レベッカさんにはよく似合つだろ。

エンチャントは当然していない。といつかミルクパールさんに贈つたペリドットは、いちおう精靈石ということになつてしているので、俺の精靈石（水晶）を使って神官ちゃんにエンチャントしてもらつたのだ。このガーネットもエンチャントしたかつたが、さすがにそこまで精靈石の大盤振る舞いはできなかつたのだ。もう2個しか持つてないしな。

指輪ケースは当然というか、これも日本で買つてきたものだ。1000円も出せば上等なものが手に入る。最近じゃ100円ショップでも売つてるけど、贈り物なのにそれでは流石にアレだからな。

「……」でも受け取りを固辞するのかな、と思つたけれど、大人しく受け取るレベッカさん。俺が指輪のひとつでもいいうんぢくをペラペラ喋るのもなにも言わずに聞いている。

ん？ どうしたのかな。あんまり好みじやなかつただろか。

「えっと……。あんまり好みじゃあつませんでした?」

「あー、ううん。違う、違うのよー。あはは、ありがとうございます」

「いや、気に入っただけなら良いんですが。サイズがちゃんと合つかわからないんで、嵌めてみてください。おれりべ中指で丁度いこと思います」

サイズは事前に測れなかつたんで、田分量とビル氏の眼力（あのときいっしょにいた女性の指のサイズで作れと無茶振りした）頼りだわ。

「じゃあー、はー」

と囁つて俺に指輪を渡し、左手を突き出していくレベッカさん。

ん? どうこうことです?

つてか、ほめろつてことか。レベッカさんもだいぶ酔つてるなあ。いつもこのつて問題にならないのかな。こんな公衆の面前で……。まあいいか、ショローさんはなんか向いつの方で踊り始めちゃつてるし。酒の席のことなんて無礼講だよー。

「では失礼して」

と、中指に指輪をはめようと……、いかん、酒でもくさびる
！ 入らん！

仕方がないので、薬指にはめた。

左手の薬指に指輪をはめるとアレっていつ風呂もいけない
だろ？し、まあ別に関係ないだろ？。

「ありがとっ！ 大事にするねー。」

指輪を抱いて笑顔で言つレベッカさん。普段は姉御肌な感じだけ
ど、酔つたりよつと幼くなるというか、かわいい感じになるとい
うか……。

ほ、惚れてまつやる~~~~。

あつかり2時間ほどでHフタ氏は戻ってきた。
さていよいよ出陣だよ。ドキがムネムネするね。ちょっと先にオ

シッ口していくわ。

「ジローさん、お待たせしました。引渡しは調印や契約がありますから、商館をお借りしていますのでご同行願えますか」

「あ、はい。よろしくおねがいします。こちらも一人連れがいますけど、いつもにいでじょうか」

「はい。かまいませんよ」

というわけで、付いてくと主張するレベッカさんといっしょに、こないだはビビットに入れなかつた奴隸商館へ。

商談のための部屋だらうか、個室で少し待つていてくれとのことで、レベッカさんと2人で待つことに。

……やばい。楽しみなような不安なような単に飲みすぎてるだけのような、そんなもんがない交ぜになつて軽く吐きそつ……。

実はまだちゃんと奴隸というものに対し、向き合えていないと

いうか、いまいち現実味を持つて理解できていないと

これから理解していけばいいのかもしないけども、もうじこまで来たからには、進むしかないんだよな。進め俺！　進め！

「進め！　俺！」

「ど……、どうしたのよ急に、ジロー」

「あ、いえ、自分に発破かけてました。奴隸を自分のものにする

「ついでに実はまだビビッてしまして」

「大丈夫よ。奴隸って言つたつて終身雇用の契約するようなもんなんだから。あ、性奴隸は別よー？」

「…………」

「え、なに急に黙つちゃって……。まさか……、やつこいつとなの？」

「いえ、はつもつとはやつ明言してませんでしたね、そういうえげ

なんとなく流れる沈黙の時間。

いいじゃん！ 別に！ 男だつたら誰だつて憧れるじゃん！ 奇麗事なんて言わないよ俺は！ 性奴隸欲しいです！

「性奴隸ではありませんよ、ジローさん」

扉の隙間からエフタ氏。2重の意味でビビらせないで欲しい。ん？ 性奴隸じゃないだつて？

うん……、まあそうね。

わかつてた！ わかつてたよー そんな美味しい話はないつてわかつてた！

「今日は特にそういう約束でもありませんでしたしね。騙していたわけではないのですが、ジローさんもエルフの少女であれば良いと

「いつ風でしたので、私もあえて言わなかつたのは否認しませんが」

「いえ、もちろん問題ありません。全く問題ありませんこよ」

やべ、語尾が変になつちやつた。どどど動搖なんてしてへんわ！

「では……、これからも用意できましたので、今から連れてきます」

「あ、はい。おねがいします」

性奴隸の件はともあれ、ついにエルフ少女ちゃんと「」対面だ。

緊張しそぎて本氣で吐きそう。心臓とか毎分120回は打つてゐ
よねーつてくらいの早打ちぶり。そのくせだんだん酔いが醒めてく
る始末。

でも飲んできておいてよかつた！ シラフだつたら氣絶してたか
もな。

まずエフタ氏、次にエルフ男が部屋に入つてくる。

「こちらです、どうぞ」とエフタ氏が呼び、部屋に悠然と入つくるエルフ少女。

髪は美しく滑らかなベルベットのように美しく印象的な白金で、
腰まで伸ばして先っぽで一つ括りにしている。

肉感的ではないが、均整の取れたスタイル。身長は俺より低そ
うだ。神官ちゃんと同じくらいだろうか。

小顔なエルフ男よりもさらにずっと小顔なのに、エルフ男より長

く、すこし垂れた耳。

おそらくは精霊石製と思われるペンダントと、ブレスレット、アンクレットを身に着けている。

衣装は、縄を主体としてレースをふんだんにあしらった純白のドレス。

そして、露出している肌全体に施された赤青白緑の幾何学模様の刺青。おそらくは全身に施されているんだろう。……顔までバツチリ入ってるから、顔が可愛いとかどうのってのを完全に超越している。刺青のインパクトが強すぎて、軽く脳停止状態に陥ってしまう。俺があっけに取られないと、レベッカさんが俺にそっと耳打ちしてきた。

「ジロー……。もともとキナ臭い話だとは思っていたけれど……。
白い髪のエルフ……、あの子……、ハイエルフだわよ。……エルフ
の王族」

第18話 ヘリパーアークはつなぎの香り（後書き）

まさかのレベッカさん回

第19話 ハイエルフは身震震の香り

ハイエルフとか言われても……

ハイエルフってこんな刺青いれずみとか入れちゃう種族なのか……。クソツ、神官ちゃんみたいな感じを連想していたけど、ちょっとだけぶ様子が違つてきちゃつたじゃないのよ……。

でも刺青女つてこっちの世界ではアリなのかな。日本じゃ刺青そのものがリアルで見る機会ほとんどないから、インパクト超強いんスわあ。この子が俺の奴隸になるのかあ……。なんだろ?この気持ち……。

しかも王族とか……。

俺の前にクソ真面目な顔で座る3人。エフタ氏、エルフ男、刺青ハイエルフ娘。

……おい、どうして誰もなにも喋らないんだ! 刺青ハイエルフ娘がじいっと俺のこと見てていたたまれないんだよ!

「ゴホン。なにも言わないんですね、ジローさん」

とエフタ氏。それはこっちのセリフでしょう。どうじゅうてん

だ。

「……では、順を追つて説明しましょつか。こちらはティアナさん。実はティアナさんは普通のエルフではなく、ハイエルフ族という……、簡単に言えばエルフの王族のようなものでしてね。ハイエルフ族はあまり下界に下りてきませんし、実質的な権力を持つてるわけでもありませんから、あまり知られてはいませんが」

なるほど……。あまり知られていないハイエルフ族を知つてたレベッカさんパねえ。

しかしガチで王族なのか。どうして王族が奴隸になんて……。普通の奴隸でよかつたんだけどなあ……。つていうより普通の奴隸のほうがよかつたなんだけども……。

「疑惑に満ちた顔をしていますねジローさん。気持ちはわかりますが、聞いてください。…………ジローさんは運命といつもの信じますか？」

突然なにを言い出したんだ、この男は。

俺が答えに窮していると肯定と受け取つたのか、あまり気にせず話を続けるエフタ氏。

「ハイエルフ族は『運命を司る大精靈ル・バラカ』に最も愛された種族だと言われています。そして、彼らは人生に一度だけ『特別なお導き』を授かるんですが、これが本当に特別でしてね。……関係する人間を巻き込んで、強制的にお導きが達成されるように動かされるんですよ。本人も気が付かないうちに。綺麗な言い方をすれば、

運命に導かれるといったところなのでしょうが

導かれし者たちですね、わかります。

さしづめ俺は商人だからト ネコポジションか。ハズレだわ。

「…………といひで、ジローさん、どうしてこの座にして勝負受ける氣になつたんだしたつけ?」

「それは…………なぜだか負ける氣がしなかつた……。って、つまり?」

「私としても確信はありませんでしたし、今でも実は確信があるわけでもないのですが、あの時点ですでにジローさんが巻き込まれていた可能性が高いかな、と」

「えつと、つまり、その特別なお導きにですか? そのお導きの内容はなんなんですか? 巻き込まれたのなら帰着するとこがあるんでしよう?」

「おみちびきの内容はだれにも教えてはならない決まりなのです」

突然口を開くハイエルフ娘。あらかわいいお声。

「そう。ディアナさんの言つ通り、この特別なお導きの内容は他者に知られてはならない決まりらしいのです。ですが、推察はできます。一つ前の行程はおそらく『奴隸になる』か、これに近い内容だったのでしょうか?」

「ひみつです」

「うか。ひみつなら仕方がないな。

「次の行程はわかりませんが、順当に考えれば当然『奴隸になつて仕える相手を見つける』かそれに近いものでしょう。そして、そんな時にジローさんと出会つた……。それこそ運命的に。私があの勝負を持ちかけたのは、そういうた経緯があつたからだつたのです」

「僕が、その……ティアナさんの仕える相手の候補だと考えて勝負を持ちかけたと? では別に勝負をする必要はなかつたのでは?」

「先ほども言つたとおり、確信があつたわけではありませんし、私も商人の端くれですから……。なるべく得になるように動いたというだけのことです」

「…………?」

「勝負の件ですが……、ジローさんが巻き込まれていたなら、必ずこの席に座ることになると、あの時点ですでに決まっていました。運命が必ずそつなるよつに導かれる。それがハイエルフのお導きの強制力でしてね」

「んん? もう少し碎いて話してもらえますか? いまいち要領を得なくて……」

「そうですね……。つまり、巻き込まれていたのなら、ジローさんが市長になにを贈つたとしても市長は喜んで受け取つていていたという

「うどですよ

俺の15日間の努力が全否定！

いくら使ったと思つてゐるんだお！

「ですから、巻き込まれていても巻き込まれていなくても損のない勝負を打つたというわけです。……まあ、まさかあそこまで手の込んだ贈り物をするとは、私も思つていなかつたので驚きましたが。そして、あれなら巻き込まれていなくても勝負に勝つっていた可能性が出てくるでしょ？。私が未だに確信を持てないのはそういうわけなのです」

「勝つても負けてもエフタさんにとっては得をする勝負だったといふわけですか。市長どんな取引があつたのかは、是非教えていただきたいところですが。……しかし、この……ディアナさんを僕に渡すのは損ではないのですか？」

「……いえ、それこそが最大の得です」

「あ、そうなの？ すこしば損しろよ。

「実は、ソロ家は代々この『特別なお導き』をサポートする代わりに、ハイエルフ族からある協力を得る協定を結んでいましてね。行程もだいぶ進みましたし、もうすぐお導きは達成でしょう。そうなれば、私としてもソロ家としても大きな恩恵が得られるのです」

なるほどねえ……。もつといつそ関心するよ。勝手に遊び人認定してたけど、案外やり手じゃないか。

今回の勝負のエフタ氏の書いた絵は……、俺が導かれてなくて負ければ精靈石10個儲け。導かれてなくて勝つても市長との取引分儲け。導かれていていれば絶対勝つて市長との取引分儲かって、さらにハイエルフのお導きも進んで儲かる。

精靈契約の時にエルフ男が言っていた通り、どう転んでも損にはならなかつたつてわけだ。

……まあ、俺にとつてもいちおう損はないし、別にいいんだけどさ。ちょっと上手く転がされた感があるな。

でも……、奴隸になるなんてお導きありえるんだろうか。大精靈酷すぎだろ。

「……しかし、ディアナさんは奴隸、なのでしょう？ 別に僕でなくとも売つてしまつても構わなかつたのでは？ 売れてしまえば、それがその運命だつたということになるんじゅうし？」

「最初に会つたときに『説明しましたが、いわゆるエルフ奴隸を求めている方とは条件が折り合いませんでね。……いくつか事情はあるんですが、最大のものはやはり、『ハイエルフになにか変なことをすれば種族間問題に発展する』ということでしょうか。これについてはジローさんも気をつけてください』

「変な」と……とは？」

「自前の奴隸となれば、性奴隸であろうとなからうと、そういうことがあるのが普通です。それで奴隸側が主人を訴えたりということも皆無と言つてもいいでしょう。……ですが、今回の場合はそういう

う風にはならない。ところがですよ

「な、なるほどなー……」

美味しい話には裏があるとは言つけれど、裏ありますだよー。ほとんど全部裏だつた！

「……では他の事情のほうはなにがあるのでしょ？」「

「これは本人を前にして言ひにくいことです。まあ容姿といいますか、全身の紋様に拒否感を示す方が多いだらうとこいつ」と。『特別なお導き』中は精靈魔法が限定的にしか使えないという点。さらには、彼女は王族。つまり使用者がするような仕事は一切やつたことがないといつて点も重要です」

〇ふ…………。

異世界で足手まといのお姫様を奴隸に……とか、それなんてエロゲ？ って雰囲気なのに、実際は手を出せば種族間問題、見た目もヘヴィな刺青娘、精靈魔法もちょいちょいで、料理もできなきゃ掃除もできん！

「エルフタは無礼です」とか言つて可愛い感じもするけど、刺青とのギャップがすげえしなあ。

しかし……、俺つて異世界貿易のために文章が読める護衛が欲しいってだけじゃなかつたっけっか？

いや……、エルフの奴隸が欲しいとか欲かいた俺が悪かったのかもしれないけどさ。なんかもエルフならなんでもいいか！ って心境だつたのも否めないし。

でも、むしろ俺が護衛しなきやならない感じになっちゃったなあ、これ。ぐぬぬ。

俺がそのときどんな表情をしていたのかはわからないが、エフタ 氏と話している最中も、じいっと俺を見つめていたディアナが言つた。

「だいじょうぶだよ、『主人さま。お導きをおわれば、みんな良く なります。だからよろしくおねがいしますね』

（綾馳次郎脳内裁判）

「え、突然ではありますが、第754回脳内裁判を行いたいと思 います。今回の案件は『どーよ今回のコレ。許せる？ つかマジど うすんの？ 脱出しちゃつ？』です」

「^{有罪}ギルティ。エフタの野郎、マジ外道。日本円に換算して70万く らい使つたのに！」

「^{有罪}ギルティ。俺のエルフ少女とラブラブHの夢が失われて何に希望 を抱いてこれから生きていつたらいいのかもうわからない。俺は今 泣いているんだ！」

「ギルティ。もっとライト感覚で奴隸を所有したかったのに、人生 で一回だけのでかいクエストとかちょっと重いんスよねえ～」

「^{有罪}ギルティ。もつとオッパイ大きい子が良かつた」

「いや待てお前たち。気持ちはよくわかる。が、彼女は今なんて言った？『ごしゅじんさまと言わなかつたか。』そうだ、俺は俺たちはもう彼女の『ご主人様なのだ！』もうそれだけで許せる！ノットギルティ！」

「判決。あの子が『ご主人様』と言つたからすべて許せる気がした、この異世界の片隅で」

（脳内裁判終了）

「…………Hフタさん。こんなにネガティブな情報を晒してしまつたら、僕が彼女を奴隸とする』とをやめると『言い出すとは思わなかつたんですか？」

なんつって、もうやめる気はないんだけどな。

刺青の件を抜きにすれば、ハイエルフちゃんスタイル良くてかわいいしね。胸は残念だけど、ケツはいいぞ！脚も長いし。まあ、もうつけようと肉付きが良ければ言つことなしだね。

あれ？ それともこの気持ちもお導きの強制力で発生したものなのかなあ？

「いえ、思いません。これは口止めされているので言えませんけど、もうあなたはどうあつてもこの契約を思いどどまることができない。……そうでなくとも精霊契約もしていますしね。『あなたが勝つた

場合私からエルフ少女を受け取る』と。それに最初に言つてたじやないですか。エルフを手に入れるのが夢だつて

「ん？ それって受け取らなかつた場合、契約違反になるんですか？ ちょっと曖昧ですね」

「そうですね。曖昧です。……案外契約違反にならないかもせませんし、試してみますか？」

「……あー、遠慮しておきます」

悪いわー。エフタ氏性格悪いわー。

その後、俺とハイエルフ娘のディアナとの精霊契約をし、受領証にサインをして、つつがなく契約が完了した。

天職板を出して内容を確認してみる。

【精霊契約】

ジロー・アヤセとディアナ・ルナアーベラとの奴隸契約要綱
ディアナはジローの所有する奴隸としてほどほどに働いてもよい。
ジローはディアナを所有する者としての責任として、ディアナが
過不足無く生活できるよう勤めなければならない。

この契約の破棄は両者の同意の下、いつでも行えるものとする。
この契約が果たされなかつた場合、果たさなかつたジローの祝福
が失われる。

……ん?

あれ? なんか偏つてね? なんか俺不利じゃね?

さつき話し合つて決めた契約内容と大幅に違うんですけど!?

「……ああ、ジローさん、言い忘れてました。ハイエルフとの精霊
契約は、精霊が勝手に大幅な脚色をすることがあるそうですから、
気をつけてくださいね。ふふふ」

見ろ! ここのエフタの嬉しそうなツラ! 脚色つてレベルじゃね
えぞ!

「ああ……、これで私はもう奴隸……。こ主人さまに首輪をつけら
れて街を歩かされたりするのですね……。そして見世物小屋に入れ
られたりするんだわ……、ああ……、こ主人さまあ無礼ですぅ……」

「うわあ、ついで変な妄想が口から溢れてるよー。…ちやんとお

口チャックしてー！」

エフタ氏と決めたディアナとの奴隸契約内容は、「ジローの命令に従うこと（性的なものは別よ）。契約破棄権はジローだけが持つ。ジローはディアナの最低限の衣食住の面倒をみなければならない。契約違反は違反したもののが祝福が失われる」なんていう内容だったはずだ。厳密にはもつと細かい決め事があつたけど、大雑把にいえばこんな感じだった……んだけどなあ……。

精靈契約魔法を実行したのはエルフ男だが、誓つて契約内容を改ざんするようなことはしていいのだそうだ。

というより、契約時に手を繋いで魔法を紡ぐのはそういうた改ざん防止の為であつて、仮に改ざんした内容で契約魔法を使つても手を繋いだ相手が内容を受け入れていなかから弾かれるんだそうで。

ただ、エフタ氏が言つていたように、ハイエルフとの精靈契約だけは注意が必要でハイエルフ本人が望んでいなくても、ハイエルフが有利になるように精靈が内容を勝手に改ざんしてしまうのだそうだ。

普通のエルフの場合はそういうことはなく、ハイエルフだけに起ころる事象だということだけ……、こいつを予約の方々に売れなかつた最大の理由ってこれなんじやないのかな……。

さて、結局のところ、これから異世界で活動するのに必要なものはなにも手に入つておらず、むしろ余計なものを背負い込んでしまつた格好だ。

あの刺青もそのうち見慣れて可愛く感じるのがもしかりけれど、今のところは色とりどりでおめでたい仕様つて感じだし、エルフが手に入つたと言つてもなんだか素直に喜べない感じがあるな。

しかし、特別なお導きつて、どうして俺が選ばれちゃつたんだろうなあ……。

Hフタ氏にも一杯食わされた感もありあり。

しょせんただの一ートの俺に、いつぱしの駄け引きとか無理だつたんだ。
だつたんだ……。

でも、すこしは奴にも損して貰わんと俺の気が済まんのだけど、なんも思いつかないなあ……。

ま、とつあいづ、細かいことを確認しつつ打開案を探すか。

「Hフタさん。契約内容はともかく、僕とティアナさんとの契約が完了したわけですが、ソロ家としてティアナさんのお導きを手伝つてのは、まだ生きているんですね?」

「はい。当然お導きが達成するまでは、バックアップをさせていただきますよ」

バックアップは生きているようだ。

せめてこのバックアップくらいは上手く利用させてもらわないと、俺の祝福が危ない。「過不足なく生活できるように勤める」とか言つたつて、家は一応あるけど、他にはなんにもないんだからな。だいたいからして、異世界で寝泊りしたの全部シェローさん家なんだから……。まだ宿屋にすら泊まつたことなかつたりするんだぜ俺……。

「……では、我々の護衛ができる奴隸を1人、用立ててくれませんか？……ほら、ディアナさんもお願いして」

「ご主人さまつたら他人行儀なのです。さんは付けなくていいんだよ？」

上目使いで言つてくるディアナ。

まだ他人みたいなもんだよ心情的には！　お前がお願ひしてくれないと、ディアナの為に必要つていう体にならないんですよ！

「ああ……、そういうえば最初にお会いしたときに護衛のための奴隸が欲しいと言つていましたね。その後にエルフが欲しいなんて言い出すから、その衝撃ですっかり忘れてましたけど」

契約が完了してから、微妙にフランクになつてないかこのエフタ。

……べつにいいけど。

「やつです。商売をしていくのに欲しかったというのもありますけど、ティアナさんの護衛という意味でも必要になってしまいますので。どうですか？」

「私からもお願ひするのですヒフタ。『主人さまは甲斐性なしなのだわ』

さうげなく毒吐くなこの子。あとでお仕置きしなきや。しなきや！

「ええ、護衛用の奴隸程度ならかまいませんよ。丁度奴隸商館にいることですし」

「……ずいぶんあつさつと承諾しましたけど、護衛用といえど、安いものではないんぢやないですか？」

「安くはありませんけれど、必要ならば仕方ありませんしね……、なにより今回ジローさんには、働いてもらいましたしね。私ばかり得をしても悪いですから、サービスだと思つて恩に着てください」

いちいち言い方が憎たらしい！

でもなぜからマイチ憎めないのは、ボンボンゆえの天然感からかなあ。悪辣という感じといつより、悪戯好きって感じなんだよなエフタ氏。

「ではちよつとここの主人に聞いてきますよ。護衛用の奴隸はそれほど需要があるわけではありませんから、あまり選べないかもしが

ませんが

そう言つて、部屋を出て行くHフタ氏。

護衛用の奴隸……か。ここでさらに新しい奴隸と契約すると、さらにもう1人分稼がなきやならないってことなんだよな。

もう完全に異世界に生活ベースを移さざるを得なくなんじゃないだろうか……。

Hフタ氏が出て行つたのを確認して、いままで黙つて成り行きを見守っていたレベッカさんが口を開いた。

「ねえ、ジロー大丈夫？ その子との契約を破棄したいのなら私がなんとかしようかー？ 両者の合意があれば破棄できるんでしょう？ 私は契約に関係がないし、……言つことを聞かせる方法ないくつか知っているわよ」

今まで見せたことのない酷薄な目をティアナに向けるレベッカさん。

わ、怖い。

物怖じしない天然風味のティアナでも、射竦められて目線そらしてゐるし。

「ありがとうございますレベッカさん。ですが、まあ思うところもありますので、無理にならない程度に頑張つてみようかと考えてるんです。少なくとも、彼女がほどほどに働いてくれる内は……ね

「わ、私はちゃんと働くんだよ！ 契約は精霊がかってに変えちゃつただけで私はわるくないのです」

「ふうん……。そうね。まあ、私は男の仕事になるべく口出ししない主義だからねー。でも……、困つたら私に言つてねジローー」

「はい。ありがとうございます」

レベッカさん頼りになるわあ……。でも頼りすぎでびこまででも、甘えたくなるわあ……。

しばらくしてHフタ氏が戻り、別の部屋に護衛奴隸を集めとこので、見に行くことに。

そろそろ酔いは醒めてきている俺は、奴隸を集めたものを見に行くという、現代日本では絶対に起こり得なかつた状況に、またいちいちビビりはじめていた……。

しかもそこから一人お買い上げするんだもんな……。

異世界だ異世界だ！ と変に浮かれすぎてたのかもしれないなあ……。異世界だろうがなんだろうが、他人の人生を丸ごと買おうなんて傲慢すぎる事態だもんよ。

俺が勇者だつたらむしろ奴隸制度を根絶するために戦うなんていう、選択肢もあつたのかもしれないのかな……。

でもま、しょせん俺はトル 「だつたといつことなんだな。

……ああー 割り切つて巨乳の女の子買ひついで！ イエーイ！

こちらです、と商館の主人に通された部屋は20畳くらいはあるかという天井の高い一室で、そこに奴隸と思しき人たちが縄で繋がれ並べられていた。

あ、やばい。

当たり前だけど、これガチで奴隸だ。

縄で繋がれて、一様に暗い目をして、きれいだけど非常に簡素な白い貫頭衣を着ている。人種はさまざまだが、全員男だ。人間だけじゃなく、ドワーフや、獣人らしき者もいる。

重い……。

『いやかに「どうでしょ、うか。もしよろしければ天職や経験の有無などを一人一人説明させていただきますが」などと言っている商館の主人との対比もあって、なおさら重い……。

さつさと選んで脱出したいたが、男ばつかなんだよな。

”強くて若い女の子”なんてファンタジー世界でも架空の存在のかしら。夢破れることの多い異世界で本当に嫌になってしまはずね！

「どうします、ジローさん。護衛としてなら、近接戦闘に長けた天職を持つものか、傭兵経験のあるもの、もしくはハンターズギルドに登録して働いていた者なども良いかもしませんね。そっちのドワーフの彼などは、お奨めらしいですよ。天職もちょうど珍しい『戦士』ですね」

さて、どうしよう。

「実はおにやのこがいいんです」なんて恥ずかしくて言えないしなあ。また「正気か」とか言われちゃうんじゃないのかな。
「うーん、なんか良い言い訳は……。

と、不意に『ティアナと田が合つて、ピンと来た。これだ！

「ええつとですね。実は、護衛としての技能を持つものが欲しいといつのも第一条件としてあるのですが……、この子の世話をすると、仕事も頼みたいと思っているので、できれば彼女と歳の近い女性が良いのですよ。さすがに、彼らのような頑強な男に、若い女性

の世話を頼むというのもアレですしね。ですので多少妥協して、戦闘系の天職さえ持つていればいいんで、若い女性の奴隸はおりませんか？』

よし、完璧なロジック！ 我ながら惚れ惚れするね。

商館の主人は「おお、そういうことでしたか」などと嘆息、エフタ氏は含み笑いをして感じが悪い。クソ、もう少しここにはどう思われてもいいわー！

「では、戦闘系の天職を持つている若い女の奴隸を用意させていただきます。申し訳ありませんが、少々お待ちください」

と、『主人。

「『主人さまは助兵衛です』
とテイアナ。ほつとけ。

その後、また別の部屋に奴隸を集めたということとド、移動した。

女性奴隸と男性奴隸は別々に扱い、同じ部屋にいたせたりはしないらしい。……って、エフタの野郎！ また嵌めようとしたやがったな！

どうも、奴のからかいの対象になつてゐる気がするぜ……。追求してやる！

「エフタさん、商館の『主人に男性の奴隸縛りで見せるよ』といつましたね？」

「いやあすみません。護衛が欲しい「J」とでしたので、良かれと思つてのことだったのですが……。ディアナさんの面倒といふとメイドの代わりもさせるといふことでしょうか。欲張りですねジローさん」

「Jのタヌキお兄さんめ。

人数はだいぶ少ないが、さつきの部屋の女版とでも言つべき光景が広がつている。

一様に暗い目、さまざまの人種、きれいな貫頭衣。

うーん……。やっぱりヘヴィだわあ……。

みんな10代と思しき年齢だし、奴隸なんかにはなりたくないなつたよなあ。まして戦闘系の天職持つてるからつて、護衛として戦つたりとかな……。

奴隸に必要以上に感情移入しちゃマズイのかもしれんけど、そう簡単には割り切れねーわ、やっぱ。

「えっと、主人。ここのみんなは戦闘系の天職を持っている子たちとこうことなんですよね？ 実際に戦闘経験がある子はいるんですけど

か？」

と、聞きたつ女の子を吟味してみる。
カッコいい事言つても、結局は好みの子のほうがいいもんね。

すみのまつこが、いるんだよ。褐色の肌の女の子が。

他の子と同じように暗い目をしているけど、釣り目がちの目に大きい眉。アメジストのような紫の髪も美しい。
年齢は二十歳いかないくらいで、スタイルも抜群だ。
地味な貴頭衣の上からでも、つい主張しちゃう立派なお胸。
それになにより、少し長くて尖った耳。

あれつて……、我々の業界で言つてこのダークエルフちゃんなんじやないんでしょうか。うふ、うふふふ、なんでこんなとこに並んじやつてんのかな？

「…………あ、あの？ 聞いておられました？」

と、ご主人。すまん。全く聞いてなかつた。聞いていたとしても、もつその情報は陳腐化したし。

「ここの子の情報をおしえてください」

と、ダークエルフちゃんを指名すると、全員の表情に戸惑いと驚きが浮かんだ。なにがそんなに意外なんだね、チミたち。私のエルフ好きは知つておろうが。

「ジローさん。その子はターク族ですよ。あまりそういう事を気にしないのかもしませんが、よろしいのですか？」

「だからなにがですか？ ターク族？」

……エフタ氏の説明によると、ターク族はその特徴的な褐色の肌と、エルフに似た耳のせいと、偽エルフとして迫害の対象……とまでは言わないが、差別対象となつてている種族らしい。

特にこの国ではその傾向が顕著で、南の火の国では褐色で差別されることはないらしいのだが……。

また、ターク族はあまり精霊に愛されていないといつ認識らしく、天職が2つ以上出た例がないそうで、精霊信仰の強いこの国では、相當に形見が狭い思いをしているんだそうだ。ついでにお導きの数も少ないとかなんとか……。

うーん。なるほどねえ。

でも俺には全く一つも関係ねえ！
もつここの子に決めましてん！

「その子、お前はマリナって言つんですがね……、あまりお褒めできない理由がもう一つあります。……天職が騎士なんですよ」

と申し訳なさそうに言つ主人。

「良さそうじゃん。護衛には特に。なんか問題あるの？」

「どうして騎士はダメなんですか？」

「それはね、騎士は男性しかなければならないものだからよジロー。だから騎士の天職を持つ女は、実質的になんの天職もないのと同じと見なされる。實際には戦えるのにね。なぜだかそういうことになつているのよ」

と憤るレベッカさん。

「女は騎士になれない……か。でも戦闘系の天職なんだろ? し、レベッカさんも戦えるって言つてるし、問題ないじゃんね、どう考えても。」

「……て、そうか。天職は職業だから「騎士の職に就けない」以上、意味がなくなつてしまつわけか。どうしてもRPG脳で考えちゃつていかんな。天職は職業! ゲームじやないんだぜ!」

話を聞く為に、直接マリナに話しかけてみる。……ちよつと照れるな。

「ええっと、俺はこれからあなたを買いたいと思つているんですが、

戦闘経験はありますか？ 家事はできますか？ 文字は読みますか？

？」

後ろでエフタの野郎が「奴隸に敬語！」とか言いながら噴き出している。あんにゃうだんだん遠慮がなくなってきたな。

でも、我ながら確かに滑稽だ！ なんか質問もカタコトになっちゃつたし……。でも知らない女人の人にはきなりタメ口とかかけないんだもん！

俺の質問にモジモジしていたと思ったら、意を決したように突然キツと俺を睨み付けマリナは言った。

口走ったと言つてもいいかもしれない。

「わ、私が騎士の誓いをたてるのに相応しい主であるなら、その証拠を示しなさい！ さ、そもそも私の体は奪えても、心は奪えないと知ることにな、なり、ましよう？」

やだ、なにこの子、超かわいい。

でも大丈夫か。途中でグダグダになつたぞ。がんばれ！ 最後までがんばれ！

俺がつい和んでいると、ディアナが横から搔つ攫つていった。

「マリナ。私はディアナ。ディアナ・ルナアーベラ。エルフ族の姫なのです。私に忠誠を近い、私の走狗となり、私に生涯を捧げな

さい。さすれば卑しきターキ族のお前にも、精靈の加護が得られる
でありますよー」

ディアナ……。

なんで突然乗つかった……。しかも棒読みで。
契約するのは俺だつづーの。

まあでも面白いからいいか。

「おおおお、姫！」

「よしに頼みますよ、マリナ……」

寸劇を繰り広げている2人を尻目に、契約の手続きをする俺なの
だった。

第21話 魔法の地図はハイテクの香り

「『』主人。マリナは騎士の経験が……、あるわけないか。あれはなんなんですか？」

「いやあ、どうも彼女なりに騎士に憧れていたらしくてですね……。その……騎士『』の延長のようなものだと思つのですが」

なるほどね。

……ってなんにもなるほどじゃないよ。

……歳こいてなにやってんの、あの子。

でも、ま……、カワイイからいいか！

とにかく、マリナは買つこととした。厳密にはエフタ氏に買つてもうつわけだけど。

マリナはティアナとまだ寸劇をやっているんで、先に書類に調印する。値段は……金貨40枚か。日本円の暫定的な換算だと600万円。奴隸の値段としては、どうなのかいまいちわからんけど、安いよなあ……。

まあ、ターキ族不人気のようだし、天職もアレだから安いんだろう。後学のために他の子の値段も聞いたところ。

その後、奴隸商館の雇われエルフの元、俺とマリナとの奴隸契約を行つた。

マリナの中で、「姫であるところの『ティアナの』主人さま＝私の主に足る存在」という方程式が完成したようで、普通に滞りなく契約は完了したのだった。

天職板を出して契約内容を確認する。

よしよし……。「明らかに生命に危険を及ぼす命令以外マリナはジローの命令を拒してはならない」の項目に注釈が入っていないぞ。

え？ どういづことかって？

エロスも許されてるつてことだよ君ー やつたー！

童帝の俺がそんな命令を出せるかどうかは別にしてだけどな！

うおー

マリナについては、商館のサービスである程度着飾つて渡してくれるというので、最初の部屋で待つことになった。

部屋に移動する途中、ティアナを捕まえてエフタからなるべく多くの便宜を取り付けるから上手く乗つかつてくれと頼んでおく。

「ところでエフタさん。市長との件、結局どんな約束事があつたんですか？ 僕が勝つてなにやら得したそうですし、教えていただきたいですね」

「ああ、地図ですか。市長とは地図を賭けてたんですね」

「え？ 地図ですか？ どうしてそんなものを？」

「地図といつても、古代の魔法地図ですよ。私はこれを集めていましてね。市長がルクラエラ山で発掘されたものを贈られて持つているという話を聞きつけて、交渉していたのです」

「これです、と見せてくれたHフタ氏。

時代がかつた羊皮紙？に簡単に描かれた地図……。なんだが、まるでタッヂパネルように地図上の情報を、タッチして切り替えることができる。文字も出てきているが読めないので、レベッカさんに読んでもらう。

「ええっと。……『ル克拉エラ山の坑道奥にゴブリンの一団が確認された！ 大至急討伐求む！ クリア条件、坑道最奥のゴブリンマザーの討伐。クリア報酬、500G 魔石（赤）』だつて。なにこれ」

「古代のハンターズギルドで使われた、仕事の発注書だと言われていますが、詳細はわかつておりません。私は他に8枚ほど持っていますが、だいたい似たような内容が書かれていますね」

「……ギルドで発注するクエストですよね、これ。お金の単位もGだし。なにこの異世界。昔はもつとRPG色強い世界だったてことなのかな。

「Hフタさん。古代って、だいたいいつ位の品なのかはわかつてい

ないんですか？」

「精靈文明時代のものだと言われています。ですのでも、だいたい…
…1000年ほど前でしょ？」「

ふうん。

” 真実の鏡 ”

【種別】

クエスト発注書 (Easy mode)

【名称】

No.00231

鉱山のゴブリン母さん

【解説】

モンスター討伐クエストの発注書

難易度 D

ゴブリンだと思って舐めてかかると失敗するぞ！

冒険者1年生の戦士はゴブリン母さんのスコップでタコ殴りにされて再起不能になつたらしい！

【魔術特性】

クリア後は報酬に変化

なし

【精靈加護】

【所有者】
エフタ・ソロ

ガチ過ぎる……。

クリア後は報酬に変化つて、未クリアアクエストなんかこれ。坑道奥には1000年待ち続けたゴブリン母さんが干からびてたりするのかなあ……。

「では相当に古いものなんですね。高いんですか？　これ」

「私も含め、コレクターが割といますし、数もないですから……、少なくとも金貨20枚程度はしますね」

20枚か。たけえな。

でもま、いざれ手に入れてクエストクリアできるか試してみたいな。クエストがまだ生きてればの話だけだ。

エフタ氏、試したことあるのかな。

「なるほど。けっこうするんですね。ところで、この地図に書かれている内容、実際に坑道奥に行つてみたりはしたんですか？」

「坑道奥はさすがに行つてませんよ。古い坑道はモンスターが多く湧きますしね。ですが、私の持つ他の地図のもので、鉱物の採集依

頼というのがあります。これは探してみたことがあります。残念ながらにも見つかりませんでしたが」

「試したは試したんだ……。意外と暇だなこの人も。

「話は変わりますがエフタさん。ちょっとお願ひがあるんですが、さつき『ディアナに聞いたところ、お導きの次の行程をクリアするには、まだいぶ時間がかかりそうだ』という話なのですよ」

「まだいぶかかるのですー」

「で、僕は今まで1人でしたし拠点も、宿屋やこのレベッカさんのところに厄介になつていてそれで済んでいたんですけど、これからはそもそもいきませんよね。で、すでに屋敷を買ってあるのですが、まだ住める状態ではないので、当然整備しなければならないわけです。しかし、それができるほどの資金が恥ずかしながらいませんでね。『ディアナの住む家になることですし、ソロ家でバックアップしてもらえませんかね、これ」

「わたしと『主人さまとの新居ですね……。ど、奴隸は地下室でお仕置きされたりするのだわ……、』『主人さまったら気が早いですう……』

「また変な妄想が口から溢れてるよー。今大事なところだから自重して！」

「ええ、構いませんよ」

「いつも軽いな！ ここでの金銭感覚どうなってんだ！」
ディアナのお導き達成したら、よほど並みがあるんだかつて。
俺にも一枚喰ませる。

「あらがとうござます。ではその件は後ほど話すとして、実は今
『御用商と商取引をしよう』という内容のお導きが出でてゐるんです
よ」

「おお、それは素晴らしい。やはり私とあなたとは大精靈の巡り合
わせがあつたということですね」

と、本当に嬉しそうにするヒロタ氏。

本気かこいつ。ボンボンの考えることはわからん……。

俺を騙すようなことをするくせに、全然悪びれないし……。いや、
悪いこと思つてないんだろうな心底。

でもま、ディアナのバックアップの件もあるし、しばらくなこの
男とも付き合つていかざるを得ないわな。

ただ、もうイタズラに引っ掛けられないように気をつけないとこ
よ。

「おまかせしました」

部屋に奴隸商の主人と、白を基調とした綿の簡単なドレスを着せられて、軽く化粧を施されたマリナが入ってくる。

丘惑いの深紫の瞳をキョロつかせ、自信なさげに両手をハイジハイジさせて、モッシュモジのマリナ。

なにこのかわいい生き物。リアルお持ち帰りできるなんて夢のようじやん。ティッヘー。

マリナと田が合ひつ。もう変なこと口走らないのが、なにか言いたげに俺を見ている。

「主人さまとしては、マイ奴隸に一聲かけてやらねばなるまいてー

「綺麗だよマリナ。本当に綺麗だ。……君を隅々まで冒険したい
やべ、むしろ俺が変なこと口走りやけひつた。

驚き田を見開いて顔を真っ赤に染めるマリナ。

俺の左腕をツネリ上げるティアナ。

俺の右腕をヒネリ上げるレベッカさん。

おつ折れる！

「だいたいご主人さまは無礼なのです。私に対しても無礼なのです。
私には何一つああいう事は言わなかつたのです」

「そうね。ジローはちょっとと考えなしなところが多いかもねー」

「あ、主殿にそんな」と呟く、言われても、う、嬉しくなんかない
んだからあ……」

「いやーモテモテですねジローさん。ははは」

これがモテるってやつなのか！ 生まれてはじめてモテた！
なんてな。もうエフタには騙されないぞ！

第22話 これからのお預けは地道な香り

さて、これで今回の勝負も一段落したことだし、これからどうするかを整理して考えていい。」

まず、最初に問題なのは、なんと言つてもお金のことだ。
家の整備はソロ家資金でやれそうなのでいいんだが、これから先の生活費、厳密には奴隸2人の生活費を稼がないとジリ貧なわけだ。でもこれについては、金稼ぎのアイデアも一応あるし大丈夫だろう。もしなんならエフタになんか売りつけてもいいしな。

次に問題なのは、家がなんとかなっても屋敷からまでが街まで遠い件だ。

これについてはもう馬しかあるまいと思つてゐる。むこうから商品を持つてくるなら馬車も必要かもしだ。でも、こればっかは高いだろうからなあ。最初は小さい商売しかできないかもしらんな。乗馬は要練習だな……。3人いるから少なくとも2頭は買わなきゃならんし、騎士の天職持ちのマリナはすぐに乗れるようになるだろうが、俺はかなり練習しないと無理だらう。ディアナはマリナの

後にでも乗っけとけばいいか。本当は俺だってマリナの後に乗りたいんだけど！

あとは、マリナが護衛奴隸としておそらく役に立たない件。
要修行。

もう一つのこと全員でレベッカさんとショローさんに弟子入りするのもいいかもしない。天職持ちなら1ヶ円もやれば相当な腕前になるんじやあるまいかな。

そういうえばディアナの天職ってなんだつたのか聞き忘れてたつ。奴も戦闘系持つてればいいんだけども。

次にこれはとても大事な事だけど、俺が異世界人なのを告げるかどうかってのがあるよな。

レベッカさんなんかは、もう確実に俺のおかしさに気付いているはずなんだけど、なんにも言わずにしてくれてるし、これから円滑に物事を進める為には言つちまつたほうが楽なんだけども。

もちろん、奴隸2人にも。

ま、ちょっと賭けな部分もあるけど、……話してみるか！

最後にお導きの件だな。

今出でいるお導きは、「御用商と商取引をしよう 2／3」と、
新規で出た「鉱山街に行ってみよう 0／3」と「湖畔街へ行って
みよう 0／3」。

Hフタとの商取引は、ある程度いつちでの商売が軌道に乗るまで放つておこうと思つ。

今のところ奴がこの世界の知り合いで一番金持ちなんだろ？

大金引つ張れるアイデア浮かんでから使つたほうがいいしな。お導きがらみなら、多少無理な商談でも通るだろ、多分。この世界の人たちは「お導き=正しい」という宗教観が強すぎる感じがあるからな。

鉱山街と湖畔町は、それぞれルクラエラとベリパ湖畔のことだろう。

ルクラエラのほうはそういう遠くなさそうだし、興味もあるから近いうちに偵察に行ってみるべ。ヘリパはもう少し商売が軌道に乗つてからだな。

そして、……これはさつきレベッカさんにディアナとの契約破棄したいなら手伝おうかと申し出られた時に断つた理由でもあるんだけど、実は例の「運命の大車輪」がディアナと契約したときには10になつたんですよ。

てことは、この運命の大車輪では、ディアナの「特別なお導き」となんか関係があるクエストだってことだらう。多分。

ひょっとすると、ズバリそのものの可能性もあるわけで、そうするともう次の行程でお導きが終わるし、終われば精霊魔法も使えるようになるらしいし、少しほんのり良くなるんじゃあるまいかな。

それ以外に……、わざと抜かしてたわけじゃないけど、やっぱりアレだよね。奴隸のこと。やつらとの距離感をどうするかって問題があるよな……。

俺とエルフ達は主人と奴隸という関係になるんだし、そういうつもりでいるべきなんだろうけど、ブラック企業でも高校のときのバイトでも下っ端しかやつたことないんだよなあ……。
上手に人を使える気がしない……。

どこかで主人としての威厳を見せねればいいのかもしれないけど、高卒一一年に威厳とか……。どう見てもティアナのほうが威厳に満ちてるわ……。

でもま、別に奴隸だからって、最上段から構える必要もないんだろうし、自分のペースでやればいいか！ 年齢的にも似たようなもんだしな！

だいたいレベッカさんだけ、奴隸なんてただの終身雇用契約みたいなもんよつて言つてたし、深く考へる必要ないはず！

でもおっぱーぐりいは揉ませてね。

奴隸商館から出ることには、すでにだいぶ日も傾いて、夜の帳が見えはじめていた。

いまさら帰る気にもならなかつたので、上手いこと言つてエフタ 氏に今夜の宿を奢つてもらいみんなで泊まるることに。エフタ やつたね！ エルフ女子達と楽しい同衾！ デュフー

宿屋までの道の途中、隣を歩くエルフ少女達を見る。

プラチナブロンドの髪をなびかせ悠然と歩くディアナ。

ただ歩いているだけで醸し出される泰然とした気配は、やはりエルフの王族ゆえのものだろうか。同じエルフでも神官ちゃんの庶民的な気配とは、全く違うと言つていい。

正直言つて、俺が思い描いていたエルフ像としては、ディアナは満点なんだ……。刺青さえなければ、だけど。

商館では「刺青のインパクト」「エフタの小細工」「契約の改ざん」のトリプルパンチで軽く茫然自失してしまったが、どれもディアナ自身は落ち度ないんだよな……。

ただお導きに従つてただけなんだろうし、本人全く気にしてないみたいだけど、お導きで奴隸になるなんてわけのわからん状況だし……。

まあ、ハイエルフの特性で奴隸になつても不利な条件にならないと確信してただけかもしれないけど、そんな腹黒とも思えないしなあ。正直、俺人見る目ないからわからんけどもよ……。

とにかく、彼女に落ち度がない以上変に氣にしても仕方がないし、なんとか適当に上手くやつていくしかあるめえ

。それにどうせ……、ディアナはエルフのお姫様らしいし、お導きが終われば国へ帰るんだろうからな。あんまり、いり……感情移入しそぎないようにしたほうがいいんだろう。

だから、ときどき耳を齧らせてもらひ程度に留めておくぜー

。しかし、カラフルな刺青も相まって異常に目立つなディアナ

ナは。

地の肌は色白なんだし、せめて刺青がなければ正統派美少女なんだろうけどなあ。刺青の奥の顔立ちは良いんだし。

……今はちょっとピエロみたいで、逆に愛嬌のある顔立ちなんだけどね！

まあ、だからこそ俺みたいなのでも、お気楽に話せるとも言えるのかもしねんな。

……しかし、この刺青はホントになんなんだろうね。

種族的ななんかがあるのか。呪術的な意味とか、ファンション的な意味とか。……それとも実はただの趣味だとか。

ま、本人に聞いてみたほうが早いか。

「ディアナ。その刺青って、その……ハイエルフの種族的ななんかなのか？」

「ご主人さまったら、自前の奴隸とはいえ女の子が気にしている外見的特長に真顔で質問してくるなんて、とんでもないドSですう……」

……

「そういうのはいいから」

「い、いけずですね。確かにそう見えますけれど、刺青ではあります。これは……簡単に言えば私の精霊石なのです。これ以上はひみ・つ・よ」

「おお！ 精霊石なのか！ ジャあ、はやく使って剥いで欲しいね。刺青じゃないならいはずれは剥げるつてことだよね。ご主人様の特權で使っちゃダメかな？ かな？」

「大切な使い道があるので、ダメです。ご主人さまの頼みでも、こ

れだけはダメなのです

はい、残念でしたー。

ま、どんな使い道か知らんけど、早めに使ってくれることを願うばかりだな。

マリナは、今の俺達のやりとりを黙つて聞きながら歩いていた。マリナはターキ族。ちょっと聞いてみたらダークエルフ族なんていうものは存在しないのだそうだ。俺からすると、まさにダークエルフって外見なんだけどな。

ターキ族の特徴は、人間より少し長寿で、少し身体能力が高い……ということらしい。当然精霊魔法は使えないし、エルフ族ほど不老長寿でもない。

エルフに似た耳を持つているという理由で差別されているわりには、他の国民同様にエルフを尊敬しているらしく、なかなか健気だ。まあ、精霊信仰の強いこの国では当然のことなのかもしれないんだけどな。

アメジスト色の綺麗な紫の髪をだいたいセミロングくらいで整えている。それほど濃くはない褐色の肌はみずみずしく、健康的だ。彼女は親の借金のせいで奴隸になつた、いわゆる「借金奴隸」。詳しい話は聞いていないけれど、普通に重い話だよな……。まあ、この世界観的にはわりと普通にありえることらしいんだけど……。

チラチラとなにか聞きそりしていた、マリナがおずおずと俺に質問していく。

「あ、王族のは、どうしてマリナをお、お買い上げ？ なすったんありますか？ マリナのよつなミンカス、……私、ほんとになんにもできないんです」

強気で騎士の誓いがうんぬんとか言ってた人とは別人みたいに、ヘトヘトのマリナ。あれは無理してたのかな。

「こで正直に「マリナが一番可愛いかったからだよ」とか言えたらイケメンなんだけどな……。今度こそ腕折られそうだから、ちよつとそこまで度胸ないわ。

「俺はこのくんの出じゃないから、ターキ族に対しての偏見もないし、値段も安かつたからね」

「マリナのことが気持ち悪くないんありますよ、か？」

「気持ち悪い要素がないよ。カワいい要素はいくらいでもあるけどね。国のみんなにマリナのことを血慶するのが今から楽しみなんだ俺」

「へう……、あ、王族の、ど奴隸をからかって酷いあります。マリナにかわいい要素なんかあるはずがないんですけど、よ……」

「そんなことないよマリナ。本当にかわいいよマリナ」

やつべ、結局調子こじて口走っちゃった。ついつら涙を浮かべて羞恥に頬を染めるマリナの可愛さが大陸に響き渡るでえ……。

「はー、やじまでー」

そして、また腕をヒネられる俺であった。
おっ、折れる！ 今度こそマジで！

パーティ会場で酔いつぶれたシーローさんを回収してから、宿屋に着いた。エフタ氏の定宿らしく、3階建てでなかなか高級そうな宿だ。ラウンジに大きな暖炉があつて、密と思しき人たちが思いに談笑している。

この世界の家って、石作りで無骨なものが多そうってことを考えると、木材をふんだんに使い、床には絨毯までひいちゃつてこの宿は、かなり高級な部類に入るんだと思う。

まあ、俺が金を出すわけじゃないからいいんだけどね。後学のために一泊いくらかは聞いておこう。

そういえば夕飯出るのかな。そもそも腹も減つてきてているし、こっちの世界つて食べ物のグレードはやけに高いから楽しみなんだよね。

エフタ氏が2部屋取つてくれたよつで、宿屋のおばさんが部屋まで案内してくれる。

エルフ達と一晩明かすとかドッキドキだけど、こればかりは早く慣れなきやな！

ある意味、初夜だよこれは…

「はい。あなたたちはほそっちの部屋ね

とレベッカさんに言つ渡される俺。

そして、酔いつぶれたシーローさんと2人で廊下に取り残される俺たち。

ええー……。

2部屋つてそういう……。性別で分けるなんて発想はなかつたわ
あ……。

第22話

これからのおまかしてあります。

「意見」感想おまかしてあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3102y/>

ネトオク男の楽しい異世界貿易紀行

2011年12月16日18時16分発行